

俺と君を繋ぐ音

小鴉丸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——音楽はもう捨てた。

春明高校に通う二年の草薙奏は音楽を聴く事が好きだ。だが、音楽を見る事は好きではない。

そしてある日幼馴染みの松原花音を意外な形で見る事になる……。

それは少年が捨てた道であり、彼女が選んだ道。

そしてその道で奏でられる音は二人を繋ぐこととなる——。

目次

第一話	幼馴染みとの休日	1
第二話	賑やかな公園で	6
第三話	ぶつけた怒り	12
第四話	心の傷	18
第五話	俺に似ていた彼女	24
第六話	草薙家にて	29
第七話	何気ない日	35
第八話	不思議な気持ち	43
第九話	帰り道と気付いた心	49
第十話	緑との再開、星との出会い	54
第十一話	珍しい四人で	59
第十二話	放課後の会話	65
第十三話	水族館へ【前編】	71
第十四話	水族館へ【後編】	76
第十五話	戸惑い	84
第十六話	宣戦布告 — 逃げない気持ち —	91
第十七話	その想い 《こころ》 に気付いても	98
第十八話	伝える想い	104
第十九話	二人の決意	112
第二十話	応援	116
第二十一話	「花音。俺は、お前の事が——」	121
第二十二話	付き合い始めて	132
第二十三話	お互いの昼	138

特別編

花音特別編 誕生日と集まるメンバー	147
はぐみ特別編 ちよつと変わった関係に	154
こころ特別編 幸せなひと時を	161
コラボ 夕焼けに誓う幼馴染達	170

第一話 幼馴染みとの休日

〈奏side〉

外の天気がとてもいい日曜日の今日。

俺、草薙くさなぎ奏かなでは二階にある自室から一階にあるキッチンへ降りる。「さて、あいつが来る前にある程度は完成させないとな」

エプロンを着てキッチンに立つ、そして準備を始める。

ボウルを取り出してホットケーキミックス、砂糖を入れて混ぜ始める。そしてバターを少し入れさらに混ぜる。

「あーお兄ちゃん何作ってるの?」

妹の未来が二階から降りてきた。キッチンに身を乗り出すようにして聞いてくる。

「簡単なクッキーだ。今日はいつが来るって連絡があったからな」

「クッキー!」

目を輝かせながら言った。

「来るのはお姉ちゃんでしょ? あくあ、私も居たかったなく」話をしながら作業を進める。

「なんだどこか行くのか?」

「うん。すぐ終わるかもしれないけど学校にね」

部活の格好をしているから部活動だろう。

未来は羽丘女子学園中等部二年生でテニス部に所属している。

「お前の分も作っておくぞ、二人も三人もあまり変わらないし」

「流石お兄ちゃん! 大好き!!」

笑顔で言われる。

俺ら兄妹は滅多に喧嘩なんてしない、だからだろうかこの年になってもこんな関係でいる。

「そういうのは好きな男に言え」

「私はお兄ちゃん好きだよ?」

「あーそうですか。ありがとうございます未来さん」

しよっちゆうやるやり取りなのでいつものように軽く流す。

「というか行かなくていいのか、部活だろ」

「ああつ！ そうだったよ〜！」

ドタバタと玄関に行きキッチンにいる俺に声を投げ掛けて家を出て行く。

「お兄ちゃん行ってきまーす！」

「おう」

扉が閉まり静かになる。

「(そういえば……)」

と、考え事をし始めながら生地をこねる。

「(花音が家に来るのは久しぶりな感じがするな。今でも来るには来るけど昔ほどではなくなったな。今は学校も違うし予定が合わないから仕方ないっちゃ仕方ないが)」

花音とはこれから家に来る女の子だ。所謂幼馴染みという事になる。

家がまあまあ近いという事で小、中学校と仲良くしていた。俺は春明高校、花音は花咲川女子学園と高校では別々になったが今でも仲の良さは相変わらずだ。

因みに未来が花音をお姉ちゃんと言うのは、昔から俺と一緒にいる事が多く家にも来ていて遊んでくれていたのでいつの間にか姉という印象が付いたらしい。(未来談)

それと、未来は花音をお姉ちゃんとして慕っている、それに応えるように花音も未来を妹のように扱う。そんな二人を見てると本当に姉妹のように見える。

「——つと、こんな感じか」

生地が完成したので棒を使って生地をのばす。そして適当に型抜きをし生地を抜いて、オーブンで焼く。

その間に皿を準備する。すると——

ピンポン。

玄関の方から音が鳴った。

来たか。と思いつながら俺は玄関に行き扉を開ける。

「あつ……奏くん。久しぶり、だね」

少し笑いながら彼女——松原花音は俺に挨拶をした。

「おう久しぶりだな。入れよ、食べ物作ってるからさ」

「ほんと? えへへ……ありがと……」

リビングに行き花音は椅子に腰掛ける、そして俺はオーブンを確認する。

「いい匂いだね、クッキー……かな?」

お菓子好きの花音はこういうのは鋭い。

「ああ当たり前だ。でももう少し待てよ、さっきしたばかりだから」

まだということを確認した俺は二人分のお茶を注ぐ。そして焼き上がるまでの間、お茶をしながら二人で話す。

「美味しい……」

「そうか? 普通のお茶だぞ。どこも変わらないと思うが……」

「奏くんと飲むから……いつもと違って、美味しいの……」

「それは嬉しい言葉だな」

一口お茶を飲み答える。

たまに素なのかは知らないが花音は俺に対してこんな事を言う時がある。平然としているが内心はドキツとしたりする。と、というのは過去の話で中学二年の頃にはこれに慣れていた。

「そういえば——」

「ん?」

花音が口を開く。

「が、学校はどう?」

「春高か? 割と楽しいぞ。二年になってからは少し大変だけどな」

春高とは春明高校の略だ。

「そうなんだ……。その、彼女さん……とかは?」

彼女?

珍しい、花音がそんな事を聞いてくるなんて。

「いるわけないだろ。からかっているのか?」

そう言うと花音はブンブンと顔を横に振る。

「か、からかってなんかないよ! 奏くんってカッコイイから、彼女さんいるのかな……って」

ほら来た。自然に人が照れるような事を言う。

……久々に会ったんだから俺はからかうとするか。

「そう言う花音はどうなんだよ。彼氏」

「ふえっ!？」

話を振ると可愛らしい声を出して驚く。

「そ、それこそいるわけないよ! からかっているの?」

「ああ、からかっている。それで本当のところどうなんだよ? 女子校と

はいえ少しは男子と会うだろ、登下校とか」

さつきと逆の立場。俺は先にからかいを宣言して花音を攻める。

「会つてもすれ違うだけだよ? 私が話したりなんて、出来るわけ――

――」

「いや向こうから話しかけるかもしれない。お前可愛いからな」

ガタツ! と椅子が動く。

「かつ、かか可愛い……だなんて、恥ずかしい事言わないでよっ!」

顔を真っ赤にさせて怒ったように言う花音だかこういう事には慣れてないからどこか必死さが伝わる。

「恥ずかしい事って……でも事実だぞ。少なくとも幼馴染みの俺はお前の事を可愛いと思う。未来だってそう言ってるだろ」

「~~~~~ツッ!」

ますます顔が赤くなる。

「(これくらいでやめておくか)」

満足した俺は軽く花音の頭を叩いてオーブンを見に行く。中を覗くといい感じに焼けていたので取り出して皿に載せて持っていく。

「う~~~~~っ!」

なぜか少し涙目になっていた。

「悪かった悪かったって。ほら、クッキー焼けたからこれでも食べて機嫌直せよ」

花音の前に二、三個クツキーの載った皿を置く。

「うう……」

それに手を伸ばして一枚取りサクツと食べる。

「……………」

俺はそれを見ている。何がある、という訳ではないが何となくそう
してしまった。

「どうだ？」

クツキーなんて久しぶりに作ったし簡単にしたから味が気になっ
たから聞いてみる。

「……………美味しい」

「そうか、そりゃ良かった」

一枚目を食べて二枚目にいく。そんな花音を見て少しホツとした。
そうして俺らは二人の休日を過ごし始めた。

第二話 賑やかな公園で

く奏sideく

昨日は幼馴染みと一日を過ごした。

そして今日は月曜日、当然のように学校がある。朝ご飯は家にいない親に代わり俺がご飯を作っている。

「未来ー、朝飯出来たぞー」

階段の前に立ち二階へ向け声を発する、すると物音と同時に返事がくる。

「はーいー」

机に料理に並べて未来が降りてくるのを待つ。その間に親の事を思い出す。

俺ら草薙家は割と変な家庭だ。母は仕事で遠出をしている、これはまだ分かるのだが問題は父親の方だ。何を思っただ事だろうか日本各地をふらふらとしているらしい。

しばらくすると未来が制服を身にまといリビングに来た。

「今日も美味しそうだねー!」

いただきます、と言って食べ始める。

「毎日聞いている気がするが……」

俺も一緒に食べる。

だが毎日聞いていると言っても、自分の料理を褒められるのは嬉しい事だ。

「もしもお兄ちゃんが結婚して、家を出てい——」

突然そんな事を言い始める。

未来はそこまで言ってなぜか間が空く。

「——く事は無いね。お姉ちゃんだし」

当然と言わんばかりに言って箸を進める。

「どうして花音が出てくんだよ、そもそも付き合ってもない」

妹の未来もだが、俺と花音を知ってるやつは妙な誤解をしてるやつが多い。

例えば母さん。たまに帰ってきて最初にいう言葉は「まだかのちや

んどくつついてないのね」だ。中学の頃に周りで噂になった事だつてある。

「え〜っ!? お姉ちゃんってお兄ちゃんの事好きだよ?」

「友達として?」だろ。異性としてなんて見られてねえよ」

花音とは長い付き合いだ、そのくらい分かる。

「じゃあ逆にお兄ちゃんは?」

「あ?」

俺が花音をどう思っているか、か。

「(あまり深く考えた事は無かったな……)」

少し黙り込み考える。

「友達……だな」

可愛い、カッコイイとはお互いに思うがそれ以上に踏み込むことはなかった、それはこれから一緒だと思ふ。

「この話は終わりだ終わり。あまりのんびりしていると学校に遅れるぞ」

話を逸らすようにする。

食事の間、未来はどこか納得していない様子だった。

ご飯を食べて皿を片付けた俺は未来とともに家を出た。学校は方向が違い、家の目の前で分かれる。

「じゃーねーお兄ちゃん。行ってきます」

「おう、頑張つてこい」

手を振って見送る。その後で俺も学校へと足を進めた。

く花音sideく

「今日は公園でライブをしましょう!」

「いいね、こころん!」

「また急な……」

昼休み。一年生の弦巻こころちゃんと北沢はぐみちゃん、奥沢美咲ちゃんがご飯をしながら会話している。

「世界を笑顔にするためよ！ いろんな場所でライブするの！」
「はあ。で？ どの公園？」

「春明高校の近くに公園あったわよね。昨日見た感じ人も多かったわ」

「っ、春明……」

「……こころちゃんが出した言葉に反応してしまう。だってその高校は――。」

「花音さん」

「えっ？ な、何美咲ちゃん？」

急に声をかけられて驚く。

「いや、ちよつと変な感じがしたから……。悩んでる事があつたら言つてくださいね。花音さんの力になれるならあたし、出来る事はするつもりなんで」

「ありがとう美咲ちゃん。でも大丈夫だから、気にしないで」
笑顔を作り答える。

春明高校は奏くんが通つてる高校。その高校の名を聞くと一番に奏くんの顔を思い出してしまう。

「(もしも奏くんの帰る時間と重なれば……)」

「花音？ 元気が無いわよ？ どうしたの？」

「な、なんでも――」

首を横に振る、そして話を今日のライブにもつていく。

「そ、それで……今日のライブはどうするの？」

「そうね。まずは薫を迎えに行つて公園に行つて……」

「……こころちゃんが予定を立てる。それにはぐみちゃんが付け加える。

「ミツシエルも呼ばないとね！」

「そうね！ ミツシエルは――」

「……こころちゃんは美咲ちゃんの方を見る。

「あーはいはい。ミツシエルはあたしが呼んでおくので、ご心配なく」
今になつてもこころちゃん、はぐみちゃん、薫さんの三人はミツシエルが美咲ちゃんなんだつて気づいていないらしい。

でもそれが三人らしいというか……。

「細かい設定はあたしがやっつくから問題は無いね。まあ謎の人たちとだけど」

「ああそうだわ花音」

「何？　こころちゃん」

解散する前に呼び止められた。

「私達ハロー、ハッピーワールド！　は周りを笑顔にするの、それなのにあなたが暗い顔してちゃ元も子もないわ。悩みがあるのなら私達に相談してくれてもいいのよ？」

「なになに、かのちゃん先輩悩み事？」

「別にそんなんじゃ……」

それに美咲ちゃんも入ってくる。

「珍しくこころの意見に賛成。さつきも言っただけど一人で悩まないでください。その……あたし達は、仲間……みたいなんですからね」
気恥ずかしそうに言ってくれる。

でもこれは、こればかりはまだ言えない。私自身で、私の音で振り向かせたいから。また一緒に音楽を奏でるために……。

私の――

「えへへ……。ありがとうみんな。でも本当に大丈夫だから、心配かけてごめんね」

こころちゃんは少し間を置いて。

「……花音自身がそう言うのなら深くは言わないわ。でもあたし達は仲間」それだけは覚えていてね。仲間は裏切らないわ」

そうして昼の話し合いは終わった。

みんなが教室に戻り、私一人になった時にもう一度思う。

「（私の――思いを伝えるために）」

〈奏side〉

「じゃあな草薙」

「おう、また明日な」

クラスメイトと挨拶を交わして教室を出る。俺は未来と違い部活には入っていない、運動が出来ないわけではなくただやる理由が無いからだ。

学校を出て帰路につく。

丁度喉が渴いていたので近くの公園で飲み物を買って帰ることにした。

「何か……こんなにこの道って騒がしかったか？」

どこかいつもと違う帰り道に違和感を覚えながら歩く。人が公園の方目指して走っているようだ、特に小学生が多い。

すると僅かにだが音が聴こえてくる。それも公園に近づく度にだ。

「向こうで楽しい事してるだって！」

「マジで!? 行こう行こう！」

俺の横を小学生二人組が走り去っていく。

その二人組の通った道を沿うように歩いていくと、やはり公園に着いた。

音はハッキリと聴こえる。それもこの音は今も昔もよく聴いていて、俺は辞めた音。

そして次の瞬間、俺は自分の目を疑った。

「な——」

公園に入ったらすぐに子供や地域の大人達が集まっているのが見えた。それもとて盛り上がっていて、全員が笑顔で賑やかだった。

「やっほー! みんな元気ー?」

「元気ー!!!」

真ん中で歌を歌っている女の子。そしてその周りを囲むようにそれぞれの楽器を持つてる他の女の子。

バンドだ。

俺が必ず見ないようにしていたもの。それは昔を思い出すから——、だけど今回は違った。

「か、かのん……?」

ドラムの少女。よく知っている、昨日も会った、幼馴染みの松原花音。

「♪——♪」

叩く。ドラムを叩いている花音。その姿に俺は釘付けになる。

「——っ!?!」

「——あ」

叩いている最中に少し観客を見るために顔を向けた花音。俺と目が合う。

一瞬目を見開いた。そして音が途切れないようにドラムを叩き続ける。

「みんな楽しんでってね！」

俺はその場から動けずそのライブを終わるまで見ることにした。終わったら花音にある事を聞くために。

第三話 ぶつけた怒り

く美咲sideく

「ふー、暑い……」

ミツシエルを脱いで外の風にあたる。

周りでは他のメンバーが今日のライブについて話していた。

「今日も楽しかったわ、お疲れ様みんな！」

「お疲れ〜！ ころん、薫くんも！」

「ふっ、笑顔のためならこれくらいどうという事はないさ」

そしてもう一人、花音さんだが……。

「……………」

なぜか元気が無いようだ。

昼からだろうか？ あんな感じになったのは。

「花音さん？」

後ろからあたしは声をかけてみるが反応がない。昼の事もあり流石に心配になってくる。

「花音さー」「花音」——？」

「……………」

ビクツと体が震える。

あたしの声と重なった声はあたしよりも低くすぐに男性のものに分かった。だが、それが誰だかは分からない。

その声にだろう、花音さんがこちらを振り向く。

どうやら声の主はあたしの後ろにいるようだ。

「？」

あたしも後ろを見て確認する。

制服は春高だろう。学校帰りだろう鞆を手にかけていた。

「悪いな、君」

「あ……………」

男が花音さんに向かって歩き始めた。その進行方向にいたあたしを邪魔だったからか、肩に手を置かれ体をずらされる。

その男は花音さんの前に立つと静かにこう言った。
「ちよつと、話がある」

〈花音side〉

「な、なに？」

目が合った時に予想はしていた、けど。

「……二人で話そう」

美咲ちゃんを少し見て場所を移動するように指示される。

「かつ花音さん！」

「ちっ……」

強引に手を引つ張られる。

「大丈夫……知り合いだから、待ってて？」

私は奏くんに引つ張られて人の少ない公園の奥に行く。その奏くんを見るとどこか焦っている様に見えた。

そして公園の奥に着き手を離される。

「花音、お前……バンド組んでたんだな」

「……うん」

「どうだ。……なんて言うか、後悔はしてないか？」

私が音楽を続ける理由。それはこころちゃんに誘われたのもあるが、それが引き金になりもう一つの理由もできた。

それは、奏くんにもた音楽をしてほしいから。

「後悔してないよ。楽しいもん」

私は奏くんが音楽を辞めた理由を知っている。

楽器から完全に手を離して、私に音楽の話を全くしなくなった。

「楽しい、か」

奏くんは何かと比べるように呟いた。

「……悪かったな、雰囲気崩して。他のやつも心配してたのにを強引に連れ出して」

「う、うん……私こそごめんね」

「花音が謝る必要はないだろ」

しゅんとして言った私の頭に手を置いてくしゃくしゃとする。

「わあ、もう……」

「ははっ悪いな。じゃあ俺は帰るから……邪魔して悪かった」

「花音！」

奏くんが帰ろうとすると後ろから他のみんなが私を心配してか追いかけてきた。

「って何も無いじゃない」

「こころちゃんがそう言う。」

「かのちゃん先輩大丈夫!?!」

「心配したよ花音」

はぐみちゃんと薫さんが私に駆け寄ってくる。美咲ちゃんはこころちゃんの後ろでそれを見ている形だ。

「……………」

「ちよつとあなた！」

無言でその場を立ち去ろうとする奏くんに声をかけるこころちゃん。

「何だ？」

「花音に何をしていたの？」

「話だよ、他人には関係ないだろ」

「他人じゃないわ。私と花音は仲間なもの」

「は？」

訳が分からない、と言わんばかりの声だった。こころちゃんはいつも通り自分のペースで話を続ける。

「この人は花音の友達なの？」

「う、うん」

「そう。それならあたしの友達でもあるわね！」

「……はあ」

頭を抱え、大きくため息をつく奏くん。

「お前とは初対面。よって友達じゃない。俺に関わってくんな」

「？ なんと言われようが関わるわ」

捨て吐くように言った言葉に首を傾げながら答える。

「関わる理由なんて無いだろ」

「理由ならあるわよ?」

「言ってみろよ」

「あたし達がライブをしていた時にあなただけ笑顔じゃなかったからよ!」

確かに思い出すと奏くんは笑ってなかった。周りみんな笑っているからそんな人がいると余計目立って見える。

「笑顔じゃないと悪いのか?」

「こ、こころちゃん……もう、いいから。奏くんも……」

二人の雰囲気が悪くなってきた、それを察して私は会話を止めに入るが……。

「笑顔じゃないと楽しくないもの。あたし達はハロー、ハッピーワールド! 世界を笑顔にするのよ! あなたも楽しい方がいいでしょ?」

「俺は楽しくなくてもいい。演奏を見て笑うなんて、もう出来ない」
手を握りしめて強く言う。

私は奏くんがそう言う理由を知っている、けど知らないこころちゃんはそれに食いつく。それも一番に苦しいところに。

「もう? 昔は笑っていたのね? それなら大丈夫——」
「っ!」

奏くんが動いた。きつと我慢の限界だったのだろう。

「きゃ!?!」

奏くんはこころちゃんの胸倉を掴んで顔を近づけて重い声で言い放つ。

「お前に何が分かる。何も知らないから言えるんだろ。俺とお前は他人だからな。それでもな、人の心まで入ってくるなよ? 昔は昔、今は今だ」

それは奏くんの思い。

今まで決して外に出すことのなかったもの。一人で抱え込んでいたもの。

「さつきお前は、世界を笑顔に」と言ったな、良い目標じゃねえか。でもな、それは本当に出来ているのか？ お前がただ目を瞑っているだけじゃないのか？」

「そ、そんな事は——」

こころちゃんが初めて動揺を見せた、前に美咲ちゃんも似たような事を言ったがこんなにはならなかった。

それを見た奏くんは嘲笑う。

「ははっ。言い返せないか。今までどんな活動をしてきたか分からない、さつきを見る限りでは路上ライブに似たような事をしてきたんだろう。自分達は少しづつ目標に向かってる。そう思っているんだろ。それが考えないようにしてるだけだ」

「ちが——」

「……………」

そんな二人を見てる美咲ちゃんは悔しそうに下を向く。他の二人も声を失っている。

奏くんの気迫に押されてるのだ。

「こう見えて俺も昔はバンドを組んでいた、奇遇な事に目標は『みんなを笑顔にする』なんて馬鹿げた目標を持っていたさ」

その頃の奏くんを思い出す。

とても笑顔で、楽しそうに演奏をしていた。

「俺がお前に教えてやるよ。目を瞑ってるお前に、知らないふりをしているお前に、俺が教えてやる」

「や、めて……………あたしは……………、そんなつもりじゃ——」

こころちゃんの瞳には涙が浮かんでいる。一方的に言われて、言葉が自分の中に被弾しているのに耐えられないのだろう。

「お前のその行動は——」

「もうやめてよ奏くん!!」

その言葉を遮るように叫んだ。こんなに大きな声を出したのは初めてだと思う。

「!!」

私の声で我に返ったのか手を離してこころちゃんから離れる。そのこころちゃんは地面に力なく座る。

「俺は……」

下に座るこころちゃんを見下ろしている奏くん。こころちゃんは両目から涙を流していた。

「くそ、だから嫌なんだよ……」

頭を掻いて面倒くさそうに言う。

そしてこころちゃんの目の前にハンカチを投げてその場から去っていった。

「奏くん……」

私はその幼馴染みの背中を見ることしか出来なかった。

第四話 心の傷

〈奏side〉

家の扉を開け中に入る。玄関には靴があり未来が帰ってきている事が分かった。

「……ただいま」

リビングでテレビを観ていた未来に不思議な顔で見られる。

「おかえりく。ってどうしたの?」

「あー、色々あつてな」

鞆を投げてソファーに横になる。体の重みが一瞬で取れてくる。

「喧嘩?」

「それに似たようなものか? 下校途中に路上ライブっぽいを見てな、そこに花音がいたんだよ。それもバンド組んでた」

「お姉ちゃんが? それじゃあお姉ちゃんと喧嘩したの?」

「いや違う」

俺は否定をして今日あった事を話す。

ライブを見た事、その後花音と話した事。そして……。

「女の子を泣かせた!? お兄ちゃんが!」

ボーカルの女の子を泣かせてしまった事。

あの時はどうしても昔の自分と向き合っているようで本心を——結末を突きつけて終わってほしかった。でも、それは自分ではなく自分と似たもの、自分とは違うものなのに。

「ハロー、ハッピーワールド……確かに似てるね」

「重なったんだ、あの頃の自分と」

バンドを組んでいた頃の自分。

あの頃は自分がこうなるなんて予想もしてなかった。

「はあく……やっちゃったなあ」

額に手を置き後悔の念に浸る。よりもよって女の子を泣かせてしまったなんて。

「今度謝らないとね」

未来が優しく言ってくる。

「だなく」

土曜か日曜に花音に時間を作ってもらおう、そこで全力で謝らないと。

俺は土日の予定を決めてご飯を作り始めた。

〈美咲side〉

「今日弦巻さん休み？ 珍しいね」

「何かあったのかな？」

次の日何も知らないクラスメイトはこころが休みなのを不思議に思っている。出席確認では家の用事という事になっているが……。

「ありましたよ。それも、相当な事が……」

知らないのならそう言うのが当たり前だ、でも昨日の出来事を知っているハロハピのメンバーはこうなる事は薄々予想がついていた。

あの後、こころは泣き崩れて謎の黒い服の人達に連れられて帰った。

「(これは花音さんやはぐみに相談かな)」

「——という事で今日の放課後はこころの家に行こうと思います」

そして昼休み、あたしは二人に提案する。既に薫さんからは了承を得ている。

「私も行こうと思つてたんだ……。あのままじゃ心配だもん」

「うん！ はぐみもこころんが心配！」

当然こうなる事は予想出来ていて。

「はい、満場一致ということで今日はこころの家にお邪魔するつもりです！」

お見舞いに行く事が決まり二人から喜びの声が上がる。

「あ、そうだ、かのちゃん先輩」

「？ なに？」

「昨日の男の人って誰だったの？」

「それ、あたしも聞こうと思ってました」

思い出したように言ったはぐみの言葉に乗っかる。

「……ここに關してはあの男も關わっているからだ。」

「えつと、幼馴染みなの……。今でも仲は良いよ」

「名前を聞いてもいいですか？」

花音さんは頷き、話を続けた。

「草薙奏くん、制服で分かったと思うけど春明高校だよ」

後……。と暗い顔をして言う。

「奏くん音楽が嫌いなの……。聴くのは好きなんだけどライブを見るのが、少し……。昔の記憶が戻ってくるから……。……」

昨日の男の言った言葉。その中に過去に關する事がたまに出ていた事を思い出す。

『お前に何が分かる。何も知らないから言えるんだろ。俺とお前は他人だからな。それでもな、人の心まで入ってくるなよ？ 昔は昔、今は今だ』

『こう見えて俺も昔はバンドを組んでいた、奇遇な事に目標は〃みんなを笑顔にする〃なんて馬鹿げた目標を持っていたさ』

「昔に何かあったの？」

「……。うん。詳しくは言えないけどそれがバンドを辞める、音楽を奏でなくなった理由」

そして一呼吸おいて。

「多分だけど同じ目標を持っているところちゃんに自分と同じ道を通ってほしくなかったんだと思う……。だからあんな強く言っちゃって……。……」

なるほど。

「……。その人なりのアドバイス、だったのかな？」

「でもあんなに強く言われたら……。……」

あたしも前に言ったが男と女だと違うのだろう。それも、向こうは自分らのバンドと似ていたらしい。

「そういえば黒い服の人に聞いたんだけど」

話を変え、登校中にあつた出来事を話す。

「こころは部屋から出てきてないらしい、黒い服の人も心配してた」
主がそんな状態なら気が気でないと思う、いつも元気な少女なら尚更だ。

と、その時誰かの携帯が鳴った。

「あつ、私だ。ごめんね」

どうやら花音さんのだったらしい、携帯を操作して何かを見ている。

「……美咲ちゃん。今日のお見舞い、もう一人増やしてもいいかな？」
どうやらメールのようだ。

それに目を通してあたしを見て言った。

「別にいいですけど、誰ですか？」

「それはね——」

花音さんはどこか笑みを含めながらその人の名を口にする。

「ねえ、かのちゃん先輩……それって大丈夫なの？」

「——あたしもはぐみと同じです。流石にやめた方が……」

二人で反対をするが、花音さんは強く自分の意思を伝える。

「大丈夫だよ、私を信じて。……きつと何とかしてくれるから」

くところsideく

昨日の事が、頭から離れない。

『お前に何が分かる』

あの人を怒らせるつもりはなかった。

『人の心まで入ってくるなよ』

そんな顔をさせるつもりはなかった。

『お前がただ目を瞑ってるだけじゃないのか？』

違う、と言いたかった。

『それは考えないようにしてるだけだ』

あの人が言う言葉は全て、心のどこかで思っている事だった。

『俺がお前に教えてやるよ。目を瞑ってるお前に、知らないふりをしているお前に、俺が教えてやる』

まるで、あたしじやないあたしが、現実を突き付けるように、目を逸らすなど言うように。

『お前のその行動は——』

今までの行動を、みんななどの思い出を否定するかのよう——。

「だれか……助けてよ……」

声が、漏れていた。

誰にも届くことのない声が。あたしの弱い部分が。

カチャ——。

「——っ！」

扉が開いた。

それと同時に笑顔にならないと、と思った。

だって、あたしが世界を笑顔にするんだから、本人が笑顔じゃないと意味が無いから。

「ごころ？」

「ごころちゃん、お見舞いに来たよ」

「……………」

「ごころん……」

扉を見るとバンドのメンバーが立っている。今日学校を休んだから来てくれたのだろうか？

「あ、あらみんな……どうし——」

「ごころ——」

美咲が私の声を遮る。

「無理、しないでよ……。あんたにそんな顔は似合わないよ」

苦しそうに、重く、重く言われる。

何を言ってるのか分からなかった、あたしは笑顔なのに……。

「何言ってるのよ、美咲？」

「……………」

無言で近づいてきて、あたしの目元を手で触れる。

「ごころ……あんたは今、泣いてるんだよっ！」

今度は優しく言われる。

そして自分で触れると、そこには濡れている自分の手があった。

「あ、あれ……？ あたし……どうして？」

泣いているという事を自覚して美咲が口を開く。

「あたし達も話したい事があるけど、最初はやめとく。他に話すべき人を連れてきたよ。あたし達はその人とこころの話が終わってからにするよ」

「？ 何を、言ってるの？」

「こころちゃん大丈夫だからね、奏くんは悪い人じゃないから……」

花音が言い残して四人が部屋から出て行く。そしてそれと入れ替わりに、一人の影が入ってくる。

「あなたは……」

扉が閉まり部屋には二人だけになる。

「……よお。昨日は、悪かった」

あたしと昨日の男の。

第五話 俺に似ていた彼女

く奏sideく

「ひっ！」

俺と目が合うと怯える。

そのまま俺は彼女の目の前に行き――。

「昨日は悪かった」

頭を下げた。

「……………え？」

「別にあそこまで言うつもりはなかったんだ。だけど過去についてとなると勢いで行動しちゃうから……………その、反省してる」

「……………」

彼女が今、どんな顔をしているのかは分からない。でもさっきは泣いているのは分かった。

「……………って」

「？」

声が小さくて聞き取れなかった。でも何か言ったのは分かるんだが……………。

「こっち、座って」

ベッドの反対側を叩いている。

俺は言われるままに座る。彼女とは背中を合わせる形で座っている。

「何をしに来たの？」

「謝りにだ。流石に初対面の、それも女性を泣かせたなんて男としてどうかと思ったからな」

「……………」

「……………」

そしてお互いに無言が続く。

「あなたは……………」

それを破ったのは彼女だった。

「もう、音楽はしてないの？」

答えるのを一瞬躊躇う、だが答えないといけなかった。

「ああ、三年前に辞めた」

「……どうして？」

「夢を否定されたから」

「——っ」

昨日俺が言った言葉に “みんなを笑顔に” とあった。まさにそれだ。

俺はそれを否定されて音楽を辞めた。

「バンド仲間の全員が親やその友達に『その行動は意味が無いから辞めろ』『時間の無駄だ』『それよりも楽しい事がある』と言われて全員が去っていった。その前に俺にも一緒に辞めようと言われたが、俺はそれを断ったさ」

当時の事を思い出す。

「一人、支えてくれた人がいた。俺の音を聴いてくれた人」

「……親？」

「いいや違う」

自分の親よりも近くにいた幼馴染み。

「幼馴染みの少女、で一番の親友。そいつが隣に居てくれたから、一人でも頑張れた」

笑顔で居てくれた、どんな時も楽しいと言ってくれた。

「でも俺はそいつの期待を裏切ったんだ。自分は一人だった、って気づいたよ」

バンドを組んでいた時は周りに人が多かった。

けど誰もいない。

「現実を受け入れた。夢から逃げた。なのに幼馴染みは俺と入れ替わるようにドラムを始めた」

音を捨てた俺と音を掴んだ花音。それはまるで、逃げないで言うように……。

「つと最後のは関係ないな。まあこれが辞めた理由だ。簡単に言えば “一人になった” からだな」

「……あたしも一人になるのかしら」

俺が話終わるとぼつりと少女が言う。

「薫、美咲、花音、はぐみ……バンドを辞めて一人になるのかしら。あなたみたいにあたしには親友と呼べる人はいない、人は笑ってくれるけどみんな距離を置いてる様に思えるの……」

弱く、今にも消えてしまいそうな声。

「あたし達は今はうまく進んでるけど、止まる日が来るのかしら、一人になる日が来るのかしら」

声が震えていた。

想像してしまったのだろう、その自分を。

「俺が——」

「え？」

「俺がお前の傍に居てやる」

自然と口が動いていた。

「俺とお前はどこか似ている気がする。そんなお前をほつとけない」
あの時傍に居てくれた花音。それがどれほど俺の支えになっていたか、本人は分かってないだろう。

「あんな事を言った俺を信用しろなんて言わない、けど俺はお前を支えていたい」

それはきつと俺の本心なんだろう。それと花音の音を聴いていた
いというのもあるのかもしれない。

「自分の諦めた夢を、お前を支えて見てみたい」

もしもそれが叶うのなら……。

「もし、よかったら手伝わしてくれ。お前達が奏でる音を、お前の夢を」

言い終わると最初のように無言になる。

おそらく十秒くらいなのにとても長く感じた。

「——ねえ、こっち向いて」

言われ振り向く。

すると。

「んっ——」

彼女が腰に手を回し顔を俺の体に埋めてきた。僅かになびいた髪からは女の子特有のいい匂いがしドキドキする。

「少し……このままでもいいさせて」

「ああ」

何分そうしていたかは分からない。

落ち着いたのか彼女が話してくれる。

「こんなあたし誰にも見せたことなかった、あなたが、初めて顔を埋めたまま話す。

「男の人にこんな事するのも初めてよ」

そんな事言われても、という感じだ。

「あなたがあたしの最初の親友。名前、教えて？」

「草薙奏だ、お前は？」

「奏、奏ね……あたしは弦巻こころよ」

そして数秒の沈黙。

「ねえ奏。あたしの夢、手伝ってくれる？」

さっきの俺の言葉だ。勿論答えは決まっている。

「手伝うさ、こころ。それは俺の夢でもあったんだからな」

昔の自分と向かい合う。

そう、今は昔とは違う。過去を克服する、このバンドと共に。

「さて！ それじゃあ、こんなくよくよしちやいられないわね！ 早速みんなに言うわよ！」

顔を離して立ち上がる。

打って変わって表情が一瞬で明るくなる。さっきまでの顔が嘘みたいだ。

「言うって……何をだ？」

「勿論あなたの事よ！ 新しいメンバーは紹介しなくちゃね！」
手を引っ張られて扉に向かう。

「お、おい！ 待って待て！」

俺は戸惑う。

「ん？ 何かしら？」

扉の前で止まる。

俺は一呼吸おいて昔バンドメンバーでやっていた事をする。

「これからよろしくな。こころ」

片手を上げる。俺がやろうとしてる事に気づいたのかこころも手を上げて――。

「ええ！　これからよろしくね奏！」

ハイタツチをして扉を開けた。

第六話 草薙家にて

〈奏side〉

「えー。前にも言ったけど新しくバンドのメンバーになりました草薙奏です、よろしくおねが——」

「もう！ 挨拶はいいのよ！ それより早く食べましょう！」

「そうだね！ はぐみ、お腹ペコペコだよ」

「(自由かよ)」

呆れた表情で俺が焼いたクッキーを食べ始める二人を見て思う。

「ちよつと、草薙さんが話してるんだから少しは……」

「ふふつ、いつも元気なのはいい事じゃないか」

「元気すぎるのもどうかと思うけど……」

あの出来事の後、元気になったところを見て安心したみんな。

俺は迷惑をかけたから罪滅ぼしに休みの日にお菓子をぐ馳走する事にした。のだが……。

「奏は前にみんなに紹介したからいいじゃない、そんな事よりも食べましょー！」

「食べよう食べよう！ いったただきま〜す！」

「ああつ！ はぐみずるいわよ！」

お構い無しに食べ始める。

俺は諦めてみんなにお菓子を振る舞う。

「ああもう……、口に合うかは分からんが食べてつてくれ」

その言葉で他の三人が手をつけ始めた。そのタイミングで未来がホットケーキを持ってきた。

「ほんと賑やかだね〜」

「だな」

未来には賑やかなバンドと言っていた、正直これだけで説明は十分すぎるだろう。

「あなたは……えつと、未来だったわね？ 一緒に食べましょうよー！」

「えつ、でも……」

チラツと俺を見る。

「別にいいぞ。お茶は俺がしとくから」

言ってキツチンへ向かう。するとなぜか花音がキツチンに来た。

「手伝うよ、奏くんは注いだのを持っていつてくれる？」

「おう助かる」

自然とこんな感じになる、幼馴染みだからだろうか。

言われたように花音が注いだお茶を机に持っていく。そして注ぎ
終わり俺らも席についた。

そしてみんなを見る。

「美味しいわね！ クツキーも未来が作ったの？」

「クツキーはお兄ちゃんだよ。こういうの作るのが得意なんだ」

「かなくん先輩凄い！ 家にも作ってくれないかな」

「確かにこれは美味しいね」

「焼きたてだから尚更ね」

全員から高評価のようだ。

俺はホットケーキを一口食べた。

「奏くん」

「ん？」

「はい、あーん」

花音がクツキーを一つ俺に差し出してくる。昔に（今もだが）よく
していた事だが……。

その手にあるクツキーを自分の手で取ろうとして一旦止まる。

「ここですか？」

「？ そうだよ？」

「まあお前がいいならいいけどさ」

俺は口を開ける、その中にクツキーが入る。

シヤリシヤリと音をたてて食べる。うん、美味しい。

「お前もクツキーだけじゃなくてホットケーキも食べるよ、未来の腕
上がってるぞ」

「そうなの？ じゃあ私も食べようかな」

花音がホットケーキを取ろうとして俺がさつきとは逆の事をする。

「ほら」

フォークで一切れ刺して花音に突き出す。

「ありがと奏くん」

俺にお礼を言ってフォークを咥えホットケーキを食べる。

「うん！ 美味しいね！」

「だろ？」

「えへへ……お兄ちゃん程ではないけどね」

そんな俺らのやり取りを見てハロハピのメンバーは呆然とする。

「……」

「ん、どうしたのみんな？」

「花音さん、意外と大胆ですね……」

「珍しい花音を見れたよ。積極的なのも可愛いね」

美咲と薫が指摘する。それを聞いた花音は顔を赤くする。

「あつ！ こ、これは……その、いつもの感じで——」

やはり本人は気づいていなかったのだろう。こういう所を少しは意識してくれると助かるのだが……。

「へえ〜！ かのちゃん先輩ってかなくん先輩という時ってこんな感

じなんだ〜」

「むう〜」

それを見ていたところはなぜか頬を膨らませていた。

「奏！」

そこをみると花音の様にクツキーを差し出していた。

「自分で食べれるぞ？」

「いいから口を開けなさい！」

「……断る理由も無いからいいけどさ」

言われた通りに口を開ける。

「(うん、美味しい) ほら、ここも食べろよ」

俺のフォークで一切れホットケーキをここらに差し出す。

「え——？ いやあたしは別に……」

フォークを見ながら戸惑っている。

俺はその理由が分からずに続ける。

「ほら、口を開ける。お前も食べ」

「あ、あたしはいいわ……、自分で——」

「何でだ？ 俺もやったんだからお前もやれよ」

グイと突き出す。

なぜ俺が食べてこいつが食べないのかが分からん。

「うう……分かったわ」

諦めたように口を開ける。そこにフォークを入れる。

「どうだ、美味しいだろ？」

「……うん、美味しいわ」

そう言うところは顔が少し赤かった。

熱か？ と心配する。俺の向かい側に座っているから、俺は椅子か

ら立ち手を伸ばす。

「どうした熱か？」

心配になり額に手を置く。

「~~~~っ！」

「ふむ。熱じゃないみたいだな」

「なっ何でもないわよ！」

体を押し戻される。

椅子に座った俺に、未来がこんな事を言ってきた。

「お兄ちゃんわざと？」

「は？ 何がだよ」

「うーん、分からないならいいんだけど……」

その言葉の後に隣の花音からの視線が気になったが、きつと気のせいだろう。

「そういえばどんな活動をしているんだ？」

食べ終わった後にこのバンドの活動について質問する。そこを把握しておかないと手伝いなんて出来ないからだ。

「こころの気が向いたら色んな場所でライブをする、といった感じですよ」

答えてくれたのは美咲だ。

「え？　じゃあ予定みたいなのは……」

「ありませんね」

苦笑いをする。

「なんか……予想はしてたけどさ」

「ごめんね、奏くん」

花音が謝る。

「お前は悪くねえだろ。でもなあ、となると俺に何が出来るか……」

あらかじめみんなには俺は裏のサポートと言っている。ライブの準備や楽器の調節とそんな事をしようと思っていたのだが……。

裏方の仕事は謎の黒服の人達がほばやってくれてるんだよなあ。

「あたしは同じ夢を掲げる仲間がいる。それだけでも十分よ？」

「……ところがそんな事を言う。」

「そうだね」

その言葉に薫が納得をしている。

「ここにいる人間はみんな同じ目標を持っているさ、何も無いよりもそれはいい事だと思うよ」

「うん？」

あれ？　なんか、あれ？

「はぐみもね！　同じチームでみんな同じ目標を持ってるだけで、みんなのためになつてると思うの！」

「あゝ草薙さん？」

美咲が冷静に話しかけてくる。

「色々あったと思いますけど、あまりこの三バカとまともな話をしない方がいいですよ。話が分からなくなりますので」

……なんだろう、とても説得力があるように感じるのは。

「じゃあ俺は居るだけでもいいのか？」

「まあ多分そういう事だと」

いや何かはするけどさ。

微妙な顔をしているであろう俺の服を花音が少し引っ張る。

「どうした花音？」

横を見ると花音は笑顔だった。

「えへへっ、これからもよろしくね。奏くん」

俺はそんな彼女を見ると自然と笑みがこぼれた。

「ああ、これからもよろしくな花音」

第七話 何気ない日

〈奏side〉

ある店の開店時間とともに家を出る。目的地は商店街にある、とある珈琲店。

商店街を歩いて行き、その場に着く。

「いらつしやいませー!」

扉を開け店に入ると店員が挨拶をしてくる。

「おーっす」

「あつ、おはようございます先輩」

羽沢つぐみ。この店の娘で、俺の後輩でもある。

「今日はどうしたんですか?」

「宿題……とのんびりとな」

持ってきたバックを見せる。

家よりも落ち着くがこつちも落ち着く。昔からここに通つてるせいか、この雰囲気慣れているというのかもしれない。

「飲み物はいつものでいいですか?」

「ああ、頼む」

今日は人が少ないらしく丁度いい感じだ。いつも座っている奥の席に座りノートやら教科書やらを取り出す。

「勉強頑張ってくださいね、先輩」

つぐみはコーヒーを机に置き仕事に戻る。

「(さっさと終わらせてゆつくりとするか)」

〈花音side〉

「(い)?? 花音さん」

「うん、そうだよ」

日曜日のお昼、美咲ちゃんとお出掛けをする事になった。それで私がよく行くカフェに行く事になったのだが……。

「道……迷わなかったね。もしも迷ったらあたしは場所を知らなかったからさ……」

とても安堵している。

そう、美咲ちゃんは道のことを心配していたらしい。

「行きつけの場所だから大丈夫って……でもごめんね？　心配させて」

そう言いながら私は扉を開ける。

開けたらコーヒーのいい匂いがする。

「いらっしやいませー！」

「つぐみちゃんこんにちは」

店員のつぐみちゃんが挨拶をしてくれる。

「花音先輩こんにちは。それとハロハピの——」

後ろにいる美咲ちゃんを見ている。気づいた美咲ちゃんは紹介をした。

「ミッシェルの中の人こと奥沢美咲です。確かAfterglowの人ですよ？」

「はい！ Afterglowでキーボードをしています、羽沢つぐみって言います。よろしくお願いしますー！」

「こちらこそよろしく。それで……花音さん、どこに座るの？」

言われて周りを見渡す。どうやら一番奥の席が空いているようだ。

「じゃあ……一番奥に行こっか」

私が奥に行こうとする前につぐみちゃんが声をかけてきた。

「そういえば今日は草薙先輩も来てますよ」

「そうなの？　見た感じどこにも居ないけど……？」

「あれ？　勉強するって言ってましたけど。帰っちゃったのかな？」

「いや、居ますよ草薙さん」

先に奥に行っていた美咲ちゃんが指でちよんちよんと席を指す。
「？」

分からないで奥に向かう。

「わあ！　草薙先輩……なんか可愛い……！」

そこには寝ている奏くんが居た。

両腕を重ねて枕代わりになっている。その腕の下にはノートや教科書が広げられているのを見ると、勉強をしていたのが分かる。

丁度ぽかぽかしている場所に座っているから眠気が差したのだろう。

「草薙さんが居るなら……花音さんどうします？ ……って花音さん？」

「……えっ？ えと、ごめんね……つい」

パシヤリと写真を撮っていたところ美咲ちゃんの声に気づく。

私の隣ではつぐみちゃんも写真を撮っていた。

「えへへ、今度蘭ちゃん達に見せよう」

「……ここに座ろっか？」

私は奏くんの前に座る。

「じゃああたしはここで」

美咲ちゃんは私の横に座った。

メニユーを見て美咲ちゃんは注文をする。

「これとこれ、お願いします——」

「(奏くん、可愛い寝顔……)」

気持ちよさそうに寝ている幼馴染みを見て思わず顔が緩む。

「ふふっ……♪」

つんつん、と顔をつつく。それに奏くんは少し体を動かして抵抗をする。

「花音さん楽しそうですね」

「そうかな？」

「そうですね。……花音さんって草薙さんが絡むと性格変わりますよね？」

どこか踏み込むように言われる。

「幼馴染み、だから……かな？」

「幼馴染み……ねえ」

持ってこられたコーヒーを飲みながら考えるように言う。

「ま、花音さんが楽しそうならあたしはそれでいいですけどね。あ、メニユーどうぞ」

メニューを受け取り店員さんに注文をする。頼んだのは取り敢えず紅茶だ。

「……………そう、私達は幼馴染み。でも私は——」
この心に秘める気持ち、いつか奏くんに届けたい。でもそれに恐怖を感じる。奏くんは私の事をどう思ってるのか分からないから……、幼馴染みのそれよりも上に進むというのが、踏み出す勇気が今の私には無いから。

美咲ちゃんの意味を含む言い方に自分達のあり方を考える。

「す、すいません。そんなに考えさせるつもりは無かったですけど……………」

「うくん……………奏くんの気持ちが分かれば、こんなに考えないのかなあ……………」

ふと漏らした言葉。

奏くんが私をどんなふうに使ってるのかを知りたい、けどそれを聞くことが私には出来ない。

「まああまり考えなくてくださいね。私達ハロハピは笑顔じゃないといけませんから、こころが何か言ってますよ」

「……………そうだね。うん、ありがとう美咲ちゃん」

「ん、当然ですよ」

この話が終わる合図になった。

「じゃいつもみたたく話しましょうか。三バカもいないんだし」

「あはは……………、えっとね——」

美咲ちゃんが笑いながら言う。

それに私はいつものように安心しながら、話を切り出した。

〈美咲side〉

「——花音ってやつぱり髪、綺麗だよな」

「か、奏くん……………恥ずかしいよ……………」

え？ 何？ あたしがお手洗いに行ってる間に一体何が!?

ちよつと席を離していたあたし、帰つてくると二人が先程とは違う雰囲気（両方寝てたけど）を出していた。

「ずつと触つても飽きない……久々に触るからかもな」

右手で花音さんの髪を触る草薙さん。傍から見るとただイチャイチャしてるカップルだ。

「うう……美咲ちゃん帰ってくる前にはやめてね？」

「別にいいじゃないか、帰ってきてても。昔はよくしてただろ？」

「そつ、そうだけど〜！ でも……私、恥ずかしいんだよ……？」

花音さんあたしもう居ます。隠れて見えます、すいません。

心の中で謝りながらこっそりと二人を見続ける。

「よし、落ち着け奥沢美咲。冷静になれ、この短時間で何があつたか、思い出すんだ……）」

そうしてあたしは数分前の行動を思い出す。

「……………」

無言であたしは席から離れる。その理由はお手洗いと――。

「うん……………」

花音さんが途中でうとうとし始めて寝たから。

席を離れ移動する前に花音さんを見る、失礼だがとても年上には思えない。いつもふわふわとして、優しく、みんなに振り回されても笑顔でどこか楽しそう。

そんな花音さんを見てきた、だが。

「（でも草薙さんには……）」

草薙さんには違つた。

いつもとは違う花音さんを見た、だから昨日はとても新鮮だった。

「（幼馴染みか、もう付き合ってもいいと思うくらいだけど）」
歩きながら思う。

あたしには幼馴染み、それも男子のなんていない。だから花音さんが今どんな気持ちなのかは分からない。例えいても分かりはしないだろう。

でも、楽しそうなのは分かる。

お手洗いが済んで席に戻ろうとする、そこで羽沢さんに呼び止められた。

「奥沢さんく〜!」

「羽沢さん? どうしたの? あと美咲でいいよ」

「ほんと? じゃあ私もつぐみでいいよ。えっとね、あの二人どんな感じ?」

あの二人とは花音さんと草薙さんだろう。

「どんな感じって、何も無いよ。二人共寝てるからね」

「え〜! そうなの?」

つぐみはガツカリそうに言う。

「あーでも、草薙さんが起きたら面白い事になるかも……」

「面白い事?」

「そうだよ。でもちよつと困る……かな?」

微妙な笑顔を作る。何かを思い出してるようだ。

「? ま、あたしは取り敢えず戻ります、そうなるかは自分の目で確認した方が早いので」

うん、思い出したけどさ……。

「(ひよつとして、あれが?)」

つぐみの言っていた困ることなのだろうか。でも花音さんは嫌がってない……というか嬉しそうにも見えるが。

そのまま二人を見続けていると、草薙さんに動きがあった。

「……………」

急に髪を触れていた手を下ろし無言になる。

後ろからだど何があったのかよく分からない。それと花音さんは胸をなで下ろしている。

「(も、戻るなら今かな……)」

あたしはなるべく自然な感じで席に戻って花音さんに声をかける。

「か、花音さん起きてたんだ」

「あつ……う、うん……」

お互い気まずい。

別に直接何かをした訳では無いが……。

「……………」

「……………」

つい無言になる。

花音さんはさっきの恥ずかしさでだろう、あたしはというと動揺を頑張つて隠してるつもりだ。

そして、その無言の空間を破つたのは意外な人物だった。

「ん……んん、ああ……っ！」

〈奏side〉

大きく背を伸ばして起きる。

「あれ？ 何で二人が居るんだ？」

起きるとどういう事か花音と美咲が目の前に座っていた。

「あつ……えつとですね……」

「えつとね、お昼にカフェに行こうって私が言つてね……それで奏くんが居たから……」

まあ、花音らしいといえば花音らしいか。

というかもう昼なのか、結構寝てたんだな。

ベルを鳴らして店員を呼ぶ。

「コーヒー一杯」

注文をしてから話を続ける。

「花音は分かるが、美咲は無理に付き合わなくても……。こんなよく分からん男と同席なんて嫌だろ」

「いえ、草薙さんはハロハピのメンバーなんですから、よく知ると言う意味では逆にありますよ。花音さんに感謝です」

嫌がる素振りなんて見せずに言ってくれる。そんな彼女にどこか嬉しさを感じた。

「そう言ってもらえると助かるな。せつかく会ったんだ、適当に話しか。時間はあるだろ？」

「花音さんがいいならあたしはいいですよ」

「ほんとう？ ……じゃあ奏くん、今日は一緒に過ごそうね」

柔らかく微笑んでくれる。

本人は自然に言ってるつもりだろうけどやっぱりドキツとするな

……。

「ああ。でもマジで適当に話すだけだけだな」

「……まあ、あたしはそういう時間も好きですけどね」

美咲がクスツと笑う。

その時に注文したコーヒーが届いて話を始めた。

「(こういうのも、たまにはいいか)」

第八話 不思議な気持ち

〜〜〜 side

「おはよう！ 美咲！」

「……ああ、おはようこころ。相変わらず元気だね」

朝教室がざわざわしてる中あたしは一番に美咲に駆け寄る。

「あたしはいつでも元気よ！ 美咲は元気じゃないの？」

「元気ですよ〜」

頬杖をつけて言う。

「あたしにはあまり元気に見えないわ。昨日何かあったの？」

「昨日？」

美咲は窓の外を見る。そうしてる間にあたしが昨日していた事を話す。

「あたしははぐみと遊んでいたわ！」

昨日は家ではぐみとスポーツをしていた。

今思い返してもいい汗をかいたと思うわ。

「……昨日は」

思い出していると美咲が口を開いた。

「花音さんと喫茶店に居たよ」

「あらそうなの？」

「うん。結局は三人になったけど」

「？ どうして三人？ 誰か呼んだの？」

薫かしら？ と思ったけど演劇部の練習と言っていたらか違うだろう。

「呼んだというよりも先客かな、草薙さんが寝ててさ」

「(っ——) へ、へえ……それで？」

「花音さんが草薙さんと遊んで、その後に三人で話してた。普通に楽しかったよ」

奏の名前が出てきた時に一瞬変な感じがした。

「……………」

「おーい、こころー?」

「え?」

目の前で美咲が手を降っていた。

「どうしたのぼーっとして。あんたらしくくない、そろそろHR始まるから座りなよ」

「え、ええ分かったわ……」

言われてあたしは席につく。

そしてHRが始まる。あたしはさっきの違和感を考え続けた、けどそれは一向に答えが出る気がしなかった。

〈奏side〉

一時間目が終わり挨拶をして休み時間に入る。だが俺は違った。俺の席は窓側、それも絶妙にほかほかする位置だ。クラスの真ん中の寒い空間とは訳が違う。

「おーい起きろー奏ー。移動教室だぞー」
「……………」

そこに俺に向け声が発せられる。がそれを無視する。

「ふむ。…………おーきろー」

バシバシと教科書らしきもので叩かれる。

俺は枕にしていた教科書を抜き取りそれを前方横に振る。すると手応えがあった。

「ぐふっ! お、おま……横腹……」

「うるせえ。人がせっかく寝てたのに何で邪魔をする」

机の下で横腹を押さえているやつを見ながら準備をする。

「ね、寝てたから起こしてやろうと思ったただけなのに……」

「…………寝てないから起こされる必要も無い」

「さっき寝てるって言っただろ!」

「目を閉じて突っ伏してただけだ。いいから行くぞ、移動教室なんだろ?」

「あ、おい！ 待てよ！」

席を立ち移動をする。

さつきから話しているこいつの名前は白羽総士。昔は俺とバンドを組んでいた仲間だ。全員辞めたがメンバー同士の仲は今でもとても良い。

「あー、そういやさ」

自分の教室2―Bから出る。その間に総士が移動しながら話す。

「お前らってまだ付き合っていないんだな」

「……お前も好きだな」

この質問される度にめんどくなくなってくる。

何だ、そんなに付き合った方がいいのかよ。

「俺じゃねえ。龍斗が会う度に聞いてくるんだ」

「あいつ……まだ好きなのか。てか未来か花音、どっちかに絞れよ」

これもバンドメンバーの一人だ。

九十九龍斗、春明高校一年生で最近また音楽を再開したらしい。

「お前が花音を取れば終わる話だ。そもそもお前の寝起きの癖であんなったんだからな？」

「は？ 寝起き？ 何の話だよ」

深いため息をつかれる。

「お前の寝起き……知ってるさ、お前が無意識なのは。でもあんなイチャイチャされたら誰だってイラツとくるぞ？ それも龍斗は花音を好いてるんだからな」

ああその話か。確か去年も話した気がする。

「前も言ったら覚えてねえよ、俺が何をしたかなんて」

どうやら俺は寝てる最中に一回起きるらしい、でも毎回とは限らない。その起きた時によく花音の髪を触るらしい。『花音の』というのは普通は人の近くでは寝ないが花音の近くなら何故か寝れるという謎の特性（かどうかは知らないが）がある事にも関係がある。

「俺もそのスキル欲しいよ。あれだ主人公なんちゃら」

「はいはい」

話を流しながら階段を登り二階にある自分のクラスから四階の音

楽室に向かう。その時あることを思い出した。

「あ」

「? どうした?」

「いや、何でもない」

「何だよ……変なやつだな……」

先に扉を開けて音楽室に入る総士の後続く。

「(そう言えばこころに話したい事があったんだ。昼休みにでも連絡しとくか)」

〓〓〓〓〓 side 〓〓〓〓〓

朝の事が頭から離れないまま時間が過ぎていき昼になった。

花音とはぐみが教室に来てご飯を誘ってくれたのであたしと美咲は一緒に屋上へ向かった。

「んー……んんんん?」

「み、美咲ちゃん……こころちゃんは何をさつきから唸ってるの?」

「あたしにも分からない。今日はずっとこの調子だからさ」

「んんんんん?」

考えても考えても分からない。今まで体験したことのない感情、だからだろうかそれを導き出せない。

「珍しいよねこころんが悩むって——って、こころん?」

「んんん。どうしたのははぐみ? アイデア?」

「いや携帯が鳴ってるんだけど、こころんのだよね?」

言われてからポケットの携帯が振動しているのに気付く。

「あらホントだわ。誰から——」

あたしは携帯に表示されてる名前を見て驚く。

「ちよ、ちよつと向こうに行つて来るわね……。す、すぐに戻つて来るからー!」

「え? ン、ン、ン、ン?」

美咲の声が聞こえたが無視をして屋上にある影の部分に走ってい

き電話に出る。そして向こうから声が聞こえてきた。

『お、出た。おーい聞こえるかー?』

「え、えええ! 聞こえるわよ!」

『おお……やっぱり元気だな。まあいいや。ちよつとお前に頼みたい事があつてな。帰りに時間を合わせれるか?』

「え——?」

『そうだな〜大体——』

思考が停止してる間に話を淡々と進める奏。あたしはそれを聞いてる余裕なんて無くなつていた。

「(え? え? 帰りに時間を合わせる? それつて一緒に帰るつて意味よね?)」

『花女は四時半には学校が終わるだろ……それなら——』

何故か鼓動が早くなるのが分かる。

「ね、ねえ? あたし一人……なんて事は無いわよね?」

『四十五分くら——ん? お前一人だけど、問題でもあるのか?』

「いつ、いや! 無いわよ! 問題なんて全く無いわ!」

二人で帰る!?! それも奏と!?!

ますます鼓動が早くなる。そういえば朝の時も奏の名前が出てきた時に似た感じに——。

『あ、悪い。ちよつと待ってくれ』

急にそんな事を言う、理由はすぐに判明した。どうやら向こうで誰かと話をしているようだ。通話中なので少し声が聞こえる。

『おーおー、彼女さんですか? 奏さん』

「(かつ、かの——!?!)」

顔が熱くなる。恐らくあたしの顔は今真っ赤なのだろう。

『彼女!? 花音さん!? そこに居るんで——ゴハアツ!!』

『黙れ龍斗。それと花音じゃない、ただの知り合いだ』

『彼女というのは否定しないのですかな奏さん?』

『……………』

『え、何その手。ちよ! ゴメン! 悪かった、俺が悪かったから! 奏様! どうか……どうかお許しグオツ!』

数秒、携帯の向こうが静かになり奏の声が聞こえてきた。

『……ふうく。取り敢えず今日の放課後、四時四十五分くらいだな、花に俺が迎えに来るからな。正門近くで待っててくれ』

「えっ？ ああ——」

『じゃあな。また放課後』

ツーツーツー……。

あたしの言葉の前に電話が切られてしまった。さっきのを断っていないのでこれは——。

「か、奏と……二人、で……帰るの？」

ドキドキが止まらない。

この感じは奏の家でもあった。病気、なのだろうか？ でもあたしは風邪なんてひいていない。

「俺がお前の傍に居てやる」

あの時の言葉が脳を横切った。

この謎の感情に囚われる時は決まって奏が関係している。きっと本人と二人きりになれば、分かるのかもしれない。

そう、二人きりに——。

「~~~~っ!!!」

な、何を考えてるのかしら！ あっ、あたしは別にそんなつもりじゃ——ん？ そんなつもりってどんなつもり？

「ごちゃごちゃした頭を整理するのも兼ねてみんなの元に戻る。」

大丈夫、みんなと話せば元通りになる。後の事は後で考えればいい。

「(あたし、どうしちゃったのかしら——)」

答えが出ないこの違和感あたしの胸に引っかかる。それでも、とてもドキドキする……。

「(どうしてこんなにも……奏を考えると——)」

この分からない気持ちは放課後まで続いたのだった。

第九話 帰り道と気付いた心

〈奏side〉

学校が終わって家に帰る、そして鞆を置いて俺は再び家を出た。目的地は花女だ。家からは距離があるので自転車で向かう。電車でもよかったが、この時間帯は混むのでなしだ。

今日学校で思い出したのはここに相談したい事があつたという事。まあ相談というよりも頼み事に近いと思う。それは過去の自分の克服……手伝いをするためには嫌でも音楽と関わらないといけない。

「(……俺が勝手に思い込んでいただけらしいけどな)」

音楽を辞めたのは俺だ、でも最近龍斗がもう一度再開しようと言ってる。

「(ドラムの感覚、残ってるかな)」

ライブを見たくはないが別に楽器が無理になってる訳ではない……と思う。

言い出しておいてなんだが少々不安になりつつ花女へと向かった。

〈こころside〉

「(こ、ここで待つてればいいのかよ？)」

HRが終わって教室を出て待ち合わせの場所に着く。どうやら奏はまだ来ていないようだ。

「じゃーねー弦巻さん」

「え、ええ！　また明日ね！」

クラスメイトとすれ違ふと挨拶をして帰っていく。

時間を見ると四十分、そろそろ来てもおかしくない時間だ。

「(どうしてドキドキするのかしら……、やっぱり奏と——)」

「なんで下向いてんだ、眩しいか？」

「えっ!?　かな——!？」

目の前にはいつの間にか制服姿の奏がいた。あたしは驚いて声が一瞬出なくなる。

「何驚いてんのかは知らんが帰るぞ」

自転車の後ろを指を指しながら言う。

「ええ、そうね」

あたしは奏の前に出て歩く。すると呼び止められた。

「歩くよりこっちの方が早いだろ。後ろ、乗れよ」

さつきと同じく後ろに指を指す。どうやら後ろに乗れ、という事だったらしい。

「周りに見られるじゃない……」

「恥ずかしいのか？ 別にお前は大丈夫だと思ってたんだがな。恥ずかしいのならなるべく速くするぞ」

「でも……」

「はあ、気にするなって」

手を握られ近くに引き寄せられる。あたしは指示されるように後ろに乗った。

「ちゃんと掴まっとけよ。飛ばしていくからな——ッ！」

「え——ひゃっ!？」

奏が自転車を漕ぎ始めたと思ったたら体がかくんとなる。あたしは咄嗟に奏の体にしがみつく。振り落とされないように、強く。

「(奏の匂い……あの時みたいに落ち着く……)」

みんなと一緒にだと楽しい。けれど奏と居る時は楽しさ以外の気持ち……心がドキドキして、余計に考えてしまう。

最初はあるな事になったけど受け止めてくれて、打ち明けてくれて……。

「(ふふっ。これじゃまるで、物語の恋する——)」

と奏に抱きついたまま一つの結論にたどり着いた。

「まるで恋するヒロイン」あたしはそう思った。おとぎ話のお姫様、王子様を一途に思い、物語の最後には結ばれ幸せとなる。

「(そう、そうなのかしら。あたしは……)」

最近の出来事は決まって奏が関係している。

あの日から奏が私にしてくる事全てにドキツとして強く意識をして鼓動が早くなる。

「ねえ奏！」

気付いたら自転車漕いでいる奏に声をかけていた。

「どうしたー！」

車の音に声が消えないように大きく返してくれる。

「あたし頑張るわ！ 笑顔も！ 思いも！」

「あー？ どういう意味だー！」

「ふつつ、教えなーい！」

ギョツと抱きついて笑う。奏は何だそれ、と少々呆れている。

この気付いた気持ちはあたしの初めての恋心……。恋のライバルは花音。

「（あたしは負けないわよ！ 花音！ あなたに追いつくわ！）」

あたしは始まっているのかいないのか分からない勝負に燃えているのだった。

く奏 side

こころの家に着いて自転車から降りて中に入る。

「行きましょう！ 奏！」

笑顔で手を引かれその後続く。

「（花音もこれくらい元気が……いや、あのままでいいな）」

そんな事ともう一つ思う事があった。それはさっきの自転車の件だ。

ちゃんと掴まっつけよ、と言ったのは失敗だった。その、何だ。意外と「ある」んだな……って。

「（って何考えてんだ、俺は）」

でも花音ほどは……。

ダメだ。考えるな。……よし、オツケー。

そうこう考えてる内に扉を開けて中に入っていた。

俺から手を離してこころが話しかけてくる。

「それで頼みって？」

「ああ、前に来た時にドラムを見かけた気がするんだが……」

前に来たのはハロハピで会議をした時だ。その時にチラッと別の部屋で見た気がした。

「ドラム？ 確か二階にあったわよ？」

よし。

「もしよかったらそれ、今貸してくれないか？」

「ええいいわよ！ それじゃあ二階に行きましようか！」

そして二階に行きある部屋に向かう。

やっぱり広いよな、と思いながらこころの後ろをついて行ってた。

「アレでよかったかしら？」

「おう、ありがとうな。ちよつと叩いていいか？」

「いいわよ！ あたし奏の音を聴いてみたいわ！」

瞳をきらめかせて期待をするように言ってくる。

「一年以上触ってないから下手かもだぞ、期待はすんな」

そう言つて軽く叩いてみる。

どうやら叩きはできるようだ。あの時からやってもないのに無理だと思い込んでいたせいで妙な感動っぽいものがある。

「……思い出すなあいつらとバンドやってた日を」

エタハピとして活動していた時の事や蘭達に教えていた頃が最近のように感じる。

「(何か、乗ってきたな……)」

自然とある曲を叩いていた。

~~~~~♪」

こころはそのリズムに少しづつ乗つて鼻歌を歌っている。

「(ぎこちないけどこの曲はやっぱり覚えてるんだな)」

俺が叩いているのはエタハピでも思い出のある曲だ。最後のライブで一回だけ演奏した曲、他の曲も思い出はあるが何回も演奏したの以上にその一回は大きかった。



一曲終わってドラムを叩くのを止める。するとこころが感想を言ってくれる。

「凄かったわ！ か……カツコよかった……し、聴いてて楽しかったわ！」

「そりやどーも」

褒められて悪い気はしない。

少しづつ、感覚は取り戻していけばいい。

「もうちよつと叩いててもいいか？ 俺は満足したし、お前が迷惑なら帰るが」

言うところろは首を振る。

「迷惑じゃないわよ！ もし知ってる曲があったらあたしが歌ってもいいかしら？」

「断る理由なんてねえよ。じゃ叩けるものからやるか」

「ええー！」

楽しい。と心から思ったのは久々だったかもしれない。それほどこの時間は心地よかった。

## 第十話 緑との再開、星との出会い

♪奏side♪

「……ここも久々だな」

一人そう言つて扉を開けた。

「……ふん、珍しいやつが来たもんだね」

「久々に来たのにそれかよ」

昨日のこころとの出来事の次の日、俺は学校帰りにライブハウスに来ていた。『ライブハウスSPACE』。昔俺達がライブをしたた場所。そして――。

「まだあの写真あるんだな」

「人気だったからね。外すにも外せないだけさ」

俺達が最後にライブをした場所。

俺は壁に掛けてある写真を見て言った。

「……まあ、思い出だからいいけどさ」

その言葉に何故か少し驚いた様な表情をした詩船さん。だがすぐにいつもの表情に戻り話しかける。

「それで何だい、何をしにここに来たんだい」

「別に理由なんて無い、自然と足が向いたんだ。どうせすぐに帰る」  
こころに影響されたんだろう。

昨日の時間は俺としてもとても楽しかったと思う。

「じゃあここに来たついでにあんたにいい事を教えてやるよ」

「いい事？ 何だよ俺に関係ない事は興味ないぞ」

次の瞬間詩船さんから発せられた言葉は俺としても予想していなかったものだった。

「もう時期この店を閉じる事にしたよ」

「――へえ」

あんたには関係ないけどね、と付け加えられる。

確かに関係無いけど胸に引つかかった。

詩船さんと話していると扉が開き人が入ってきた。

「あれ今日は珍しい人が居るね」

俺はその声に反応する。声の方を見ると制服の女の子が六人立っている。

「ゆり先輩知り合いですか?」

「……紗綾知ってるか?」

「私は知ってるよ。たまに見るからね」

「やつほー、覚えてる?」

「お久しぶりです」

それぞれが俺を見てから言う。何人かは知っているが二人だけは知らないのがいる。

花女の制服を着ている六人を見ながら俺も言った。

「ゆり先輩久しぶりです。それと紗綾、たえ、りみも久しぶりだな」

とりあえず知ってるやつらには声を掛ける。

「うん、久しぶり奏くん。元気にしてた?」

「お久しぶりです草薙さん」

「おひさー」

「奏さんこんにちは」

昔に関わりがあった人とこんな場所で再開するとは思ってなかった。いや、一名はここに来ている事は知っていたが。

「ひよつとして音楽再開する気になった?」

「まさか。なりませんよ」

この人、牛込ゆりさん。俺の一個上で先輩にあたる。バンド“Gitter\*Green”のギター、ボーカルをしている。

「バンドしてたんですか!?!」

話していると突然女の子が入ってくる。

「……昔な」

「私、最近バンドを始めたんです!」

「……そうか」

短い返事をする。

その子を見ると目を輝かせていた。つい、俺も昔は——と考える。「なあ、何でバンドなんて始めたんだ? もつと他にもあるだろ」

なんで聞いたのか分からない質問。

「前に星の鼓動を感じたんです。それでそれを探してて……そしたらバンドと出会って——、これだ！　ってなって、えっと……」

「要は同じ感じがしたから、か」

「簡単に言うतそういう事です！」

星の鼓動、それがどんなのかは分からないけど同じ感覚がしたから。なんとも面白い理由だ。『みんなを笑顔に』なんてのも面白いといえれば面白いが。

「あ、そういえば名前……」

この二人からはまだ聞いていないことを思い出す。

「私、戸山香澄です！」

「市ヶ谷有咲です」

猫耳の子が香澄、ツインテールが有咲か。

「俺は草薙奏だ。よろしくな戸山、市ヶ谷」

「よろしくお願いします！　奏先輩！」

「よろしくお願いします」

戸山と違い市ヶ谷は物静かな人のようだ。

そしてお互いに挨拶も済んで俺は入れ替わるように店を出る。

「じゃ帰る」

詩船さんに軽く挨拶をして外に出ようとす。

「私は待ってるよ。またここで君の音を聴けるのを」

ゆり先輩の横を通るとそんな事を言われる。

俺とゆり先輩は中学の頃にここで知り合った。

ゆり先輩達の『Glitter\*Green』は人気だったのは知っていたが俺達の『Eternal Happiness』も割と人気だったらしい。

ある日、ゆり先輩が俺達のライブを見てその後声掛けてきた、それが出会いだ。

俺は外に出た後SPACEを見る。

「……待つだけ、無駄だと思いますけどね」

既に聞こえない声と言って、俺は家へ向かった。

「おや、奏じゃないか」

「薫？」

S P A C Eから帰っていると珍しいやつとあった。

よく考えるとあまり薫とは話した事がなかったな。

「どうしたんだそんな妙なやつと一緒にだなんて」

その薫の横にいる人物を見て言う。その人物はため息する。

「相変わらず失礼ね。それでも芸能人なのだけけれど？」

微笑みながら言われる。

「二人は知り合いだったのかい？」

「まあな」

薫が少し驚いたように言う。

その人物とは白鷺千聖。割と、いや普通に有名人でもある。

何で俺と千聖が知り合いかというとな音繋がりでただだ。

「千聖とはお茶をされていてね、今はその帰りさ」

「なんとというか、俺的には逆にお前らが知り合いなのが驚きだが……」

正直な気持ちだ。学校は確か違った気がするが。

「親同士に親交があるのよ」

それでも以外だが。まああまり深くまでいくのはよくないな。

「ふむ……そうだ千聖、さっきの事を奏に言ってみてはどうだい」

「さっき？……ああ、あれね」

何やら二人が話している。

内容については勿論知らない、けど薫がどことなく楽しそうなのは分かった。

千聖が俺に話し掛けてくる。

「あなた日曜日時間に時間あるかしら？」

「日曜？……あるけど。なんだ厄介事はごめんだぞ」

「厄介事なんかじゃないわ。花音と水族館に行ってほしいのよ」

「はあ？」

詳しく聞くとどうやら千聖は急に仕事が入って一緒に行く事が無

理になつたらしい。

「話を聞いたけど花音はとても楽しみにしているらしいからね、奏頼めるかい」

「あいつが水族館好きなのは俺がよく知ってるし、方向音痴だから一人じゃ無理だろ。それなら行くしかないじゃねえか」

その日に無駄なことに時間を割くよりも楽しめる方がいいし。

花音となら退屈はしなさそうだしな。

「それなら良かったわ。花音には私から伝えておくわね」

「すまないね呼び止めてしまつて」

話が終わり薫が謝ってくる。

やっぱり役者だからだろうかこういうちよつとした事でも様になつて見える。

「別に気にしてねえよ。ま、それじゃあな薫、千聖」

「ああ、また会おう奏」

「ええ、また今度」

日曜か、花音と水族館だなんていつ以来だろうな。

その日を少し楽しみに俺は帰るのだった。

## 第十一話 珍しい四人で

く花音sideく

四時間目が終わりチャイムが鳴る。

生徒達はそれを合図に教室を出たり机をくつつけて弁当箱を広げ始めた。

「それじゃあ屋上、行きましようか」

「うん千聖ちゃん」

私はというと親友の千聖ちゃんと屋上へ向かう。

「あ……そういえば千聖ちゃん」

「どうしたの？」

廊下を二人で歩きながら話す。

「今日はもう一人呼んでるんだけど、いいかな？」

「あら奇遇ね。私ももう一人呼んでるのよ」

手で口を隠しながら少し笑って千聖ちゃんは言う。

誰を呼んだんだろう、と思いながら私達は屋上に向かった。

屋上に着いた私達。

そこには既に一人お弁当を持って私を待っている子が居た。

「こんにちは美咲ちゃん」

近くによつて挨拶をすると美咲ちゃんも返してくれる。

「こんにちは花音さん。……もう一人って千聖さんだったんだね」

後ろから歩いてくる千聖ちゃんを見て言う。

その千聖ちゃんは周りを見て美咲ちゃんに話し掛けた。

「もう一人は来てないのね？」

「もう一人？」

何のことだろうかという表情をしている。私も誰が来るのかは知らないのだが……。

と、考えていると屋上のドアが開いてピンク髪の子が屋上に入ってくる。その子は真つ先に千聖ちゃんちゃんへと駆け寄った。

「ご、ごめんね〜！ 千聖ちゃん待った？」

「いいえ私も今来たばかりよ」

「そっか〜！」

えへへ、と笑う。

あの人は確か、Pastel\*Paletteの……。

「じゃあご飯——の前に花音は彩ちゃんと話した事は無かったわよね？」

「う、うん。丸山さんとは顔を合わせたくらいで……」

「それなら二人に軽く紹介してあげて」

そう言い話を丸山さんに振る。

「うん、分かったよ。知つてのとおりPastel\*Paletteのボーカルをしてる丸山彩です。……ってこんな感じかな？」

「ええ。たまに変な事をするかもしれないけどそこはスルーしてあげてね」

「ええ〜！ 千聖ちゃん、酷いよ〜！」

いつもの千聖ちゃん。他の人と喋るのをあまり見た事がないから新鮮に感じる。

「大丈夫ですよ千聖さん、ウチのバンドには変な人が多いですから……」

「あはは……美咲ちゃん……」

とてもしんどそうに美咲ちゃんと言う。

でもハロハピのメンバーはあれでもまとまりがあるから凄い。

……美咲ちゃんのおかげだけ。

「私変な人じゃないからね!？」

「でも日菜ちゃんにたまに言われ——」

「ちさとちゃん……」

少し涙目になっている。

「ち、千聖ちゃんそれくらいに……。丸山さんも変じゃないって知ってるからさ、ねっ。」



「ごめんなさいね彩ちゃん」

「うう……ありがと花音ちゃん。それと彩でいいよ……」

お礼を言われた。

何故かどことなく似てる気がするの気のせいなのだろう。

「い、いえいえ。それよりご飯にしよ」

それぞれが弁当箱を広げ始める。

なんというか今回は珍しいメンバーだ。私と千聖ちゃん、美咲ちゃん、で食べる事はたまにあるけど、そこにもう一人加わるのは初めてだろう。

普段話さない事を四人で話しながらもご飯を食べていた。

「へえ、ハロハピのメンバーってやっぱり個性的な人が多いよね」

「そうかな?」

「ほら、こころちゃんとか」

「あの子はいつも笑顔よね。見てて飽きないわ」

「あたしはまとめるのに苦労してますよ……」

「でも楽しいよね」

「まあ、楽しくないなんて言ったら嘘になりますけど」

何だかんだ言っても美咲ちゃんはいつもバンドメンバーの事を考えてくれる。それはミッシェルとしている時が一番現れている。

そうだ! と彩ちゃんが話を切り出す。

「二人は彼氏とかいるの?」

彼氏。その単語を聞いた瞬間幼馴染みの顔が浮かぶ。

そんな中、先に美咲ちゃんが答えた。

「あたしはいないですね。そもそも男性とは関わる機会がありませんし」

「花音ちゃんは? 可愛いからいそうだけど……」

「ふええっ!? わ、私はいないよ!」

つい慌ててしまう。

けどそこに彩ちゃんは追い討ちをかける。

「うーん、じゃあ気になってる人は?」

「気になって——、……い、いるよ」

一度は飲み込もうとした言葉を出す。

「ほんとう!? 誰!?!」

年相応の女の子らしく恋の話には食いついてくる彩ちゃん。

私はたまに千聖ちゃんと話すくらいだからそこまでは慣れていない。  
い。

「幼馴染みの人だよ。私の片思いだけど……」

「うくん! ムズムズするね〜! そうだ! 千聖ちゃんは——」

「いないわ」

「千聖さん早いですね……」

即答。その二文字が相応しいやり取りだ。

「知ってるのに聞く理由がないじゃない。それはそうと花音、あなたに話があったんだったわ」

「話?」

く千聖 side く

彩ちゃんが恋愛について話してくれていたおかげで昨日の事を思い出した。

私はまだ日曜日の事を花音に言ってなかったのだ。

「今度の日曜日なのだけれど……」

「うん、楽しみにしてるね♪」

「ああ……えっと、その……」

よほど楽しみなのだろう。目を輝かせているのが分かる。

そこに彩ちゃんが花音に聞こえないように私の耳元で喋る。

「千聖ちゃん日曜日って……」

「仕事がある事を言ってなかったのよ。今から言うわ」

一旦咳をして落ち着きながら花音に仕事の事を言う。

「えっとね花音、そのとても言いづらいのだけれど日曜日に急に仕事が入って水族館に行けなくなったの」

「え……」

一気に光が消え少し涙目になる。

そんな親友の顔が見たくなく私は奏の事を慌てて伝える。

「で、でも安心して！ 私は行けないけど代わりに奏が来てくれるらしいわよ」

自分でも驚くくらいに私は花音の涙目に弱い。文字通り心が痛むのだ。

「ふえ？ ほんと……？」

「ええ」

「えへへ……♪」

奏の名前を聞いたら顔を緩ませて微笑む。

「ああ、だから日曜日が楽しみって言ってたんだね」

「うん。千聖ちゃんも行けないのは残念だけどね。行くなら三人がよかったなあ」

美咲ちゃんと二人で話している。

「でもチャンスよ花音」

「チャンス？ 何の？」

言葉の意味を分かってないようだ。花音は首を傾げる。

花音が奏を意識してるのは知っている。けど花音は自分からは行かずに待っている。

奥手なのは知ってるがそれだとどつちも進歩が無いままになってしまう。

「何のって、それは告白しかないじゃない」

「こっ——!?!」

驚きとともに顔を赤くする。

その話の中に彩ちゃんと美咲ちゃんが入ってきた。

「告白するの!?! 応援してるね!」

「もう二人共付き合ってもおかしくないですよ」

彩ちゃんは興奮していて、美咲ちゃんは私と同じ事を思っていたよ  
うだ。

「ま、まだ無理だよ……」

「何言ってるのよ花音。奏はあなたの事を意識してるわよ。先に動い

たらもう片方も変わるわ」

どちらも幼馴染みというのが強くてあまり踏み出せないのだろう。でも二人は両思いと言っても嘘にはならないと思う。

「そ、そうかな？」

その瞳には期待があった。

もしも変われるならという、一歩踏み出せるならという。

「じ、じゃあ頑張ってみるね……！」

グツと両手をする花音を見ていると「ああ、やっぱり」なんて思う。

「応援してるわ花音」

「頑張ってるね花音ちゃん！」

「応援はしますけど、無理だけはしないでくださいね」

それぞれが声を掛ける。

「うん、ありがとうねみんな」

花音は笑顔でそれを返す。

たまにはこんな時間もいいわね。

らしくない事を思いながら昼を過ぎた。

## 第十二話 放課後の会話

〈奏side〉

「……総士そこ間違ってるぞ」

「え？ マジでか」

総士の間違いを指摘する。

今は学校が終わりその放課後。俺は総士の居残りに付き合っていた。

「ちやんと教科書読め」

「あたっ」

教科書で頭を叩く。

その内容は現代文のプリントを書くというものだ。

今日の授業で寝ていた総士が俺らの担任（現代文の先生）に居残り  
で終わらせろと言われたのが始まりだ。

それでなぜ俺も残っているかというと、その担任と総士の会話、帰りのHRに遡る。

「白羽ー、お前今日居残りな」

「何でつすか？」

「今日俺の授業で寝てただろ。その分のプリントをちやんと書いて俺に提出しろ。期限は今日までだ」

「そ、そんな!？」

クラスからはくすくすと笑い声が聞こえてくる。

そうこれが現代文じゃなければこうならなйдらう。総士はどういう事か現代文だけは点数が低い。それ以外はクラスでトップをキープしている。

クラスでは総士×現代文という組み合わせは既にご愁傷さまという扱いになっていた。

そして丁度俺もそう思ってた所でもある。

「マイフレン！ 力を貸してくれ！ 報酬はジュース一本！」

後ろの席の俺を見て叫ぶ。

俺はため息混じりに言い返す。

「足りないな」

「二本！」

「安い」

「むむ……、山吹ベーカリーのパン三つとジュース一本！」

「ん……」

二人のやり取りが止まる。

紗綾の家のパンは美味いからここ周辺だと大人気だ。それを蹴るのは勿体ない。

「先生、俺が見るんで大丈夫です」

「か、奏く！ へへっ、俺は信じてたぜ！」

「そうか？ 草薙が居るなら安心か。それじゃあ今日はこれで終わりだ、日直」

先生は日直を呼ぶ。それは帰りの合図だ。

「起立、礼」

その言葉とともにHRが終わりそれぞれが教室を出る。

総士は俺の方に走ってきて抱きつこうとしてきた。

「ありがとうマイフレンく！ これで俺は救われたく！」

「うるさい引っ付くな」

早く準備しろ、そう言つて総士を押し返す。

「了解しました！ 奏様！」

「はあ、ノリだけはいいよなあ」

なんて事だった気がする。

そして時間は元に戻る。

「うあく！ 現文めんどくせえ！」

「もう少しだろ、頑張れよ」

プリントを見ると半分以上は終わっている。

どうして現代文だけ無理なんだろうと思う。

運動神経は抜群そして成績優秀（現代文を除く）、クラスのムードメーカーでもあり男女共に人気のある総士。本人でもどうして現代文だけが出来ないのかは疑問に思ってるらしい。

唸り声をあげる総士は気分転換のつもりか、ペンを置き俺に話し掛けてくる。

「お前さー日曜とか空いてる?」

「あいにく無理だな、予定がある。土曜ならいいぞ」

「土曜は俺がダメなんだよ。つぐの家の手伝いがあるからな」

見事にすれ違う。

でもどうせ、暇だからお前の家に来ていいか? なんて事なんだろうからな。正直どうでもいい。

「そんじゃ奏は日曜何するんだ?」

「あー?」

勉強しろよと言おうとしたら先に言われたのでそちらに答える。

別に隠すような事でもないから言う事にする。

「花音と水族館に行く」

「はあ!」

それに何故か驚く。

そうかそうかー、と言って頷く総士。

「何だよデートかよー、羨ましいなー」

「デートじゃねえよ」

そう、これはデートじゃない。ただの幼馴染み二人が出かけるだけ。

……俺と花音は付き合っていないから。

「……なあ奏」

「何だよ」

急にいつもの明るい声ではなく真剣な声だ。こういう時の総士は相談に乗ったり、心配している時だ。

「お前はあいつの事、どう思ってたんだ？」

「どうって、そりゃあす——」

「異性としてな」

「——」

言葉を失う。

「あの時のお前を支えてくれたのは花音だ。それは幼馴染みだからというものあっただろう、でも本当にそれだけだったのか？」

「それだけ」？ それだけじゃないのか？

「他に何かあったとでも言いたいのか」

「はあ…。本当に鈍感だなお前」

少し間をとって続ける。

「花音はお前の事を異性として意識してるぞ」

「は？」

嘘だろ……。

「いやいや、それはないだろ……」

軽く笑いながら言う。

内心では結構焦ってる。だってそんなふうに考えた事は無かったから。

「逆にあれでないと見えるお前が凄いわ。天然という所もあるからだろうが花音なりにアピールしてるぞ。こう言われると思いがたる節があるんじゃないか？」

思いがたる節……。

そう言われるとドキツとする事が結構あった気がする。

「まあ……ある、な」

「だろ？」

最近花音はますます可愛くなってきた気がする。これは前から思ってた事でもある。

「と、これらの事を含めてもう一度聞くぞ。お前は花音の事をどう思ってる？」

俺の確信をつく質問を投げる。

ここまで来ては自分の意思に嘘なんてつけないし、幼馴染みなんて



言葉も使わない。

自分の心から思ってる事を初めて口にした。

「好き、だ。花音あいつの事。一人の女として」

それを聞いた総士はニカツと笑う。

「それなら水族館、頑張らないとな！」

席を立てバンバンと俺の背中を叩く。

親友が応援してくれている。それに俺は嬉しく感じた。

「ありがとな総士」

「へへっ、いってことよ！ よーしそれじゃあ——」

「それじゃあ、勉強を再開するか」

プリントをしまおうとしていた総士の手を掴み止める。

「ええ!? もういいだろ？ 話もいいところだままとまったしき！」

「それとこれとは別だろ。さ、やるぞ」

「そ、そんなあ〜〜！」

教室に総士の声が響いた。

俺は気付いたこの気持ちを大事にする、それと同時に日曜日の水族館を心待ちにする。

「(花音、俺は……)」

あの頃、支えてくれた花音に恩返しがしたいと思ってた。そう、もしも……もしも本当にあいつが俺を思ってくれているのなら最高の形で恩返しが出来るかもしれない。

「奏〜！ ここ教えてくれ〜！」

「はあ……」

さっきの雰囲気はどこに行ったのか。でもそれがこいつのいい所、なのか？

そんな事を思いつつも感謝をしながら教える。

「それはここを——」

「ふんふん……なるほどな！」

日曜日か。ははっ、こんな事になるなんて……。

俺はその日をととても楽しみにしていたのだった。

### 第十三話 水族館へ【前編】

（奏 side）

「あつ……奏くん」

俺よりも先に来ていた花音が手を振っているのが見える。その日、俺らは駅前で待ち合わせをしていた。

「ごめん、少し遅れた」

「ううん。私が早く来ちゃってただけだから……遅れてないよ」

時計を見ると待ち合わせ時間の三十分も前だった。

「そっか、じゃあ行くか」

早いが二人で駅のホームへ行く。

「……………」

「……………」

ホームで電車を待つてる間、どうも会話がはずまない。

前に総士に言われた事を思い出すと幼馴染みを意識して話し掛けづらくなったのだ。

「えへへっ」

突然花音が笑う。

「どうした？」

「いや、奏くんと水族館って久々だから……嬉しくて」

「久々？ ……あー、そっか」

二人で最後に行ったのは中学三年の夏だった気がする。

エタハピが解散して初めての夏休み。

ドラムの前に座らず、今までであったものがなくて心にぽっかり穴が空いたような気持ちの時に花音が誘ってくれたっけ。

花音の笑顔はその時の支えで、俺は彼女が隣に居てくれるだけで心が落ち着いていた。

「（今でも支えだけだな……）」

勿論、気恥ずかしくてそんな事は本人の前では言えない。

『間もなく電車が到着します。危ないので黄色い線の内側まで——』

「電車もうすぐ来るみたいだね」  
ホームにアナウンスが流れる。  
それを聞いた俺達は線まで下がり電車が到着するのを待った。

く花音 side く

電車に乗った私達、なんだけど……。

「暑い……人多すぎだろ……」

満員だった。

私達は車両の端っこに立っている。

「あー……花音ちよつとこっち来い」

「え？ う、うん……」

扉側に立っている奏くんと場所を入れ替わる。

「確か、前にお前と行った時人に流されてたよな」

そう言われて両手を私の後ろにある壁につく。そこには小さな空間が出来ていた。

「(えっ……え!!? こ、これって——!?)」

所謂「壁ドン」というものだ。

周りには人がいっぱい居るはずなのに私には奏くんしか見えなくない。

電車が揺れる度に奏くんも揺れる。

よっぽど暑いのだろう、汗が流れ落ちるのが分かる。

少しでも涼しくしようとか服のボタンを開けてパタパタとしていく。

「(うう……どうして私の前でするの?!?)」

その男の子っぽい仕草にドキドキしてしまう。

たまに私の鼻に届く匂いや普段見ない部分の肌を見てその意識は加速していく。

「花音は……」

「ふえっ!?!」

奏くんは声を掛けられる。

見ていたのがバレた？ 見すぎちゃったかな……。なんてふうに思う。

「花音は暑くないか？」

「え、あ……。暑い、よ？ 今日テレビでも一番の暑さって言ってたし……」

暑くないわけがない。

かく言う私も汗をかいている。でも奏くんのおかげで周りに人がいないからまだマシだ。

「やっぱりか。妙に暑いと思ったらそれか……。そうだな、電車降りたらアイスでも買って行くか？」

そう提案をされる。丁度いいと思う、体も暑いし……。水族館までは距離も少しあるから体温を下げるためにはいいと思った。

「うん。アイス食べてひんやりしたいね」

「だな」

駅につくまでの間、私達はアイスの話をして気持ちだけ涼んでいた。

〈奏 side〉

電車が駅に着いて俺は前の人達が降りた後続く。その俺の後ろに幼馴染みも続いた。

「気を付けろよ花音」

「う、うん……。っ！」

ぴよん、と可愛らしく少しジャンプしてホームへ降り立つ。そんな姿を見ていると自然と笑が浮かんできた。

駅を出ると近くにアイス屋があるのでそこを目指す。

「アイス何食べようかな？ 奏くんはどうするの？」

「そうだなー」

歩きながら考える。

別にこれと違って好きなものがある訳では無いからどうするか  
かれては答えに困ってしまう。

「俺はチョコかな。花音は？」

「私はバニラにしてみよっかな」

短い会話をしているとアイス屋に着いた。

店自体はそんなに離れてないから距離的には助かる。

店の中に入るとひんやりとした空気が肌に触れる。

「いらっしやいませー！ 注文はお決まりでしょうか？」

「えと、チョコとバニラを一つずつで」

そう言っつて財布から金を取り出して二人分を支払う。

「じ、自分の分は払うよ？」

「いいって奢るから」

花音には何だかんだで感謝しているからちよつとでも恩を返した  
い。

まあ本人は気付いてないだろうけど。

一人でそんな事を思いながら花音にバニラのアイスを手渡す。

「ありがとね奏くん♪ 外のベンチで食べよ？」

「ああ、そうだな」

丁度木影にベンチがあったからそこで二人腰を下ろしてアイスを  
食べ始めた。

「美味しいね奏くん」

「意外とこのアイス美味いんだな」

人気の店とは知ってたがこつちまで来ないとないから確かめよう  
がなかったけど、これはいい店だ。

隣に座る幼馴染みを見るとアイスを食べながら周りをキョロキョ  
ロと見渡している。

俺もつられて見渡すと俺と花音のように男女二組のペアがほかの  
椅子に座っていた。おそらくあれらはカップルだろう。

それを見て何を思ったのか、花音はいつぞやのように俺にアイスを  
スプーンに載せて差し出してくる。

「奏くん、私の一口食べる？」

上目遣いにそんな事を言われる。

「(くそっ……そんなの反則だろ……)」

俺は短く頷く。

すると花音は「あーん」と言って口を開けるようにさせてくる。

「……うん。バニラも美味しいな。ほら、俺のも」

花音は少し動きが止まったがすぐに俺のスプーンに食いつく。

「チョコも美味しいね♪」

えへへ、と笑う花音はとても可愛くてその顔をずっと見ていたくなかった。

「あ、花音ちよつとそのまま」

「ふええ?」

俺は花音に手を伸ばす。

「か、奏くん……?」

俺が何をしようとしているのか分からない花音は首を傾げている。

「口、アイス付いてる」

「え?」

花音の口の周りに少しだけ付いていたアイスを指で取って舐める。

その行動に花音は慌て出す。

「か、かか奏くん!?!」

「……バニラやつぱ美味しいな」

顔を赤くする花音を見ているとこっちまで恥ずかしくなってしまう。

ああ、やつぱり俺は――。

「悪い悪い。そんじゃ、早く食べて水族館行くか」

「う、うん……、そうだね……」

顔を赤くし歯切れ悪く言葉を繋ぐ花音、そんな幼馴染みを見ながら俺はアイスを食べた。

自分らしくない、まるでチョコのように甘い事になった。そう思いながら。

## 第十四話 水族館へ【後編】

（奏side）

「奏くん！ 早く早く！」

水族館の前に着いた途端、花音がいつになく元気に走って中に入る。

俺はその後を歩いて着いていき目的地に着いた。

入口に置いてあるパンフレットを手に取り目を通した。それで最初にどこへ行くかを考える。

すると横から花音が顔を覗かせてくる。

「どうする？ クラゲ見に行く？」

「昼までの二時間か？」

「私はそれでも——」

「ごめん、俺がもたない……」

二時間もクラゲって……どんな罰ゲームだよ。クラゲ研究者じゃあるまいし。そもそも立つとくの疲れないのか？

「普通に見て回ろう、昼からはイルカショーがあるみたいだし」

「うん、分かった♪」

笑顔で返事を返してくる花音はとても楽しそうだった。

「わあ〜！ 凄いね！」

目を輝かせながら水族館を見て回る花音。

バンドを始めて少し変わったな、と思う所もあったけどこういうのは変わらないんだな。

横目で花音をちよこちよこ見ながら、俺も魚を見ていた。

「（おお、やっぱり面白いな……）」

歩いていくと鯨やエイといった普段見ないものが見れる。

俺は花音みたくこれといって好きな生物はいない。あまり興味が



無いというのもあるが……。

「クリオネ……これは特に面白いよな」

何となく目に止まった。

ふよふよしてる点ではクラゲと似ている。

「うん。クリオネも見てて楽しいよね」

「たの——お、おう楽しいな」

楽しい、という感覚なのかこれは。俺の中では楽しいと面白いは全くの別物なのだが。

そして一つ一つ話しながら見ていくとある水槽の目の前に着いた。

「わあ、クラゲ♪」

クラゲが少し見えただけでその場に駆け足に駆け寄る。その姿を見てると高校二年生なのだがそれよりも幼い様に見えた。

「見て見て、綺麗だね……！」

くるっ、と両手を後ろで組み俺の方を向いて笑顔で言ってくる。

その時の花音は水色のワンピースと水の色が重なり、水の中に花音がいてクラゲと遊んでる様に見えた。

「ああ——綺麗だな」

それはどちらに言ったのか。

クラゲか花音か……、ま後者だろうけど。

それから花音はぼーっとクラゲを眺める。

「神秘的だよね」

「神秘……かどうかは知らんが」

本当、どうしてクラゲにそこまで魅力を感じてるのかは知らない。クラゲに軽く嫉妬だ。

花音には失礼だがふわふわとしてるのに共感を得たのだろうか……。

「何にも縛られずに彷徨う姿がいいよね」

「（盛り上がってきてる……）あ、ああ……」

頷く事しか出来ない。

いつもはふわふわして包み込んでくれる花音だが、今回は有無は言わせない、そんな威圧みたいのがあった。

それからクラゲの話は三十分以上続いた。

「ご、ごめんね……つい盛り上がりすぎて……」

しゅん、となる花音。

「いや謝らなくていい、お前が楽しそうでよかったよ」

時計を見るとそろそろ昼になりそうだ。

俺は水族館の中にあるレストランへ向かうように花音に言う。

「ま、ご飯にするか。確かレストランがあっただろ」

パンフレットに載ってる地図を見てその方向に指を指す。

「うん、そうだね。……ありがとう奏くん」

その笑顔に胸がドキツとしてしまう。

「何がだよ……、行くぞ」

照れ隠しをするように早歩きでレストランに向かった。

く花音 side

レストランでご飯を食べた後、私達はイルカショーが開催される場所へ向かった。

ちよつと早めに行けたからなるべく前の三列目に席を取ることが出来た。

「あつ、始まったよ！」

イルカショーが始まる。

五頭のイルカがトレーナーさんの合図とともにパフォーマンスを始める。

飛んだり、泳いだりと色々なパフォーマンスが見れて他の観客から拍手が起きる。

「……イルカってこんな飛ぶんだな」

呆然として呟く奏くん。

「凄いよね。あんなに息ぴったり」

「共に過ごした時間がなせる技、なんだろうな」

どこか引つかかるように言う。

「ねえ奏くん？」

「ん、どうした？」

「……いや、やっぱり何でもないよ」

笑って誤魔化する。

ここで更に余計な事を考えて欲しくない。

「？ 変なやつだな」

『はい！ 観客の皆さんー！ 音楽に合わせて手拍子をお願いします  
！』

そこでトレーナーの一人がマイクに向かってそう言った。それと同時に音楽が流れて手拍子が起こる。

私達もそれに合わせ手拍子を始めた。

リズムよくイルカがジャンプをしたりして観客を楽しませている。

「——まるでライブだよな」

ふとそんな事を言う奏くん。

「うん、みんな笑顔で楽しんでるね」

「………」

どうしてこころちゃんが出てきたのか？

私は疑問に思う。

「ハロハピもこういう笑顔のために存在するんだな。こころの夢、世界を笑顔に——って」

グツと手を握る。その横顔は奏くんがエタハピとして活動していた時の顔にどこか似ていた。

「みんなを笑顔に。同じものを持つてるんだ、それなら支えないとな………こころを。ハロハピを。」

こんな思ってもらえるなんて、こころちゃんに嫉妬してしまいそうになる。

でも奏くんはそのために私達と共にいる。だからそう思うのは当然だろう。

「応援するよ？ みんなの夢だもんね」

それは嫌っていたものとの向き合いを示していた。  
奏くんは向き合うと決めただ、自分の過去に。過去を克服し、次へ繋げるために。

「（私はみんなを支える奏くんを見てるだけなんて嫌だよ。何も出来ない、何の力も無い私だけ……出来る事があるかもしれない）」  
奏くんが好きだから……、隣で寄り添って支えたい。自分勝手なわがままでもそれが私の気持ちだから。

そのためには――。

私も奏くんのように手を握り、ある覚悟を決めた。

〈奏 side〉

「今日は楽しかったね」

満足そうに言う花音。

今は水族館から出て家に歩いて帰ってる途中だ。電車に乗った時点で既に日は降りていて、こっちに着いた頃には暗くなっていた。

周りには仕事や学校帰りの人達が多くいる。

「ああ。久々に二人で出掛けれて俺も楽しかったよ」

こういう面では千聖には感謝しないとな。

二人で居ることはあっても俺の家だから未来がいる、それなら実質三人という事になる。

「そういえば他のみんなと会った？」

「莉緒とかか？」

「うん」

話す話題を探していた所に花音が聞いてくる。

「ちよつと前に話をしたな。最近は楽しい、だってよ」

確か家に外国人が来たとかなんとか……。

それと、よく一緒に行動している九郎は外で会う機会は滅多にない

だろう。なんせ家にこもってゲームだし……これについては花音も知ってるから聞かない。

「総士くんは？ 同じクラスだよね」

「あいつは相変わらずだな。うん、うるさいの一言」

「あはは……。そ、そうだ龍斗くんはどう？ 音楽、再開したんだよね？」

「らしいな。どこでやってるのかは聞いてないけど」

そう、再開したのは知っている。けどどこで練習をしているのかは知らない。

知ってそうなのは総士か九郎だろう。

「私は誕生日の時から会ってないから、みんな元気そうでよかったよ」

そうか。全員で集まったのはあれが最後か。

総士と龍斗は高校が同じだからよく会うが、違う高校の莉緒と九郎はあまり会わない。

そう考えると俺もあまり会っていない事になるのか。

それぞれの道を歩いているもんな。——もう高校なんだし。

それからハロハピの事を話しながら歩いた。

花音がここに誘われた事、ハロハピのメンバー集めの事、豪華客船に乗った事……聞いててそんな出来事があったなら花音も変わるだろ、というのもあった。

そもそも人前に出る事が苦手だった花音がライブしてるのすら冗談だろ、と思える。それはエタハピの全員も思うだろう。

「話を聞いてるだけで疲れる……美咲は凄い、あいつらをまとめれるんだから」

「みんなミッシェルが美咲ちゃんだった気付かないんだもん、それについては美咲ちゃん自身も諦めちゃったみたい……」

苦笑いから察する。

「見てるだけで大変そうだもんなあ」

重ねて見るなら。

「こころ、はぐみが総士と莉緒、薫は龍斗、花音が九郎で美咲は俺と  
いった感じか。」

「そんな事を考えてる間に俺の家の前に着いていた。そこで俺は花  
音と別れの挨拶をして家に入った——」

はずだった。

「それじゃ花音、今日はありがとな。また今度——」

「か……奏くん！」

「別れの挨拶をしようとしたら急に大声で俺の名前が呼ばれる。そ  
して何かを言いたげに口ごもる。「どうした？　なんかあったか？」  
と、俺は聞く。」

「えと……あのお……」

「下を向きながら先ほどの声とは反対に弱々しい声で言う。けれど  
数秒後、頭を横に振り俺を見据える。」

「い、今から奏くんに伝える事は一方的な事なのでただ聞いていてく  
ださい！」

強く言われる。けれど俺は何を言うのかを聞いていない。

大きく二回深呼吸をして、その言葉は紡がれる。

「まず私には好きな人がいます。その人はとても優しくいつも私を  
助けてくれます」

「は？　急に何を言い出すのかと思えば……。」

「その人はとても強くて、同時にとても弱いです。私が言うのも変な  
話だけど……。だけど弱い私はその人をずっと見てきました」

「間を取りながらも完成されていく言葉。俺はただ言われた通りに  
聞くだけ。」

「いつの間にか私にとってその人はとても……とても大きな人とな  
り、一つの感情が生まれました。その感情は今までに体験した事にな  
い感情で……その感情が“それ”と気付くのは時間がかかります」

少しの月明かりに照らされる中、花音を見続ける。  
分からない。何でそれを俺に言うのかも、だってただの幼馴染み――

「時間がかかったのはきつとその人とずっと近くにいたから。その幼馴染みとはずつと一緒だったから」

――俺が幼馴染みに抱く感情を知らないこいつが――

「ねえ――奏くん」

一歩、二歩……と俺に近付いてくる。不意に鼓動が早くなる。

そして彼女は俺を見て。

「私ね――

何でそんな、俺と

――奏くんの事が好きです。幼馴染みなんかじゃなくて、異性として」

感情と同じ事を言ったんだ？

## 第十五話 戸惑い

♪奏side♪

家の扉を開け中に入る。

そのまま二階に行こうとしたらリビングに居た未来に声を掛けられた。

「おかえりーお兄ちゃんー」

「……おう」

「ご飯はー?」

「食べてきたから大丈夫。遅くまで起きとくなよ」

はーい、と返事が返ってくる。

それを聞いた俺は二階にある自分の部屋へと行き中に入る。そしてすぐさまベットに横になった。

「はあ~~~~」

深いため息。

あの花音からの告白の後、俺は言葉が出なかった。それは嬉しさと困惑からだ。あの場で俺が頷いていたら晴れて付き合っていたのかもしれない、でも俺は何も出来なかった。

くそ、自然と声が漏れる。

「何やってんだ……俺は……」

あの場で返事をしてよかったのか、むしろ黙ってた今の結末が正しかったんじゃないかと思う。でも心にあるのは後悔だ。

あの花音が勇気を振り絞って言ってくれたのに俺は何もしていない。

「はあ——」

返事をするだけ、向こうと思いは同じなんだ。ただそれだけのはずなのにこうも難しく考えてしまう。

「(あまり考えた事なかったけど、恋って難しいな)」

その日はよく眠れずに考えていた。



〈花音side〉

「どうだったかしら花音」

「う、うん……」

学校で千聖ちゃんから昨日の事を聞かれる。当然といえば当然だろう。きつと彩ちゃんや美咲ちゃんも気にしていると思う。

そして私は話した。

久しぶりの二人でのお出掛け、水族館での話やイルカショー。そして……

「そう頑張ったわね」

告白した事を伝えると頭を撫でられる。私はそれがくすぐったく感じた。

「も、もう！ 千聖ちゃんっ……!」

「ごめんなさいね。でも私は嬉しいの。ちゃんと自分の思いを伝えられたのは大きな一歩よ?」

優しい笑顔で褒めてくれる。それはまるでお母さんの様に。

千聖ちゃんは色々な役や仕事をしているからか大人びて見える。

それは仕草や行動によく現れていて、私はそんな千聖ちゃんを尊敬していた。

「それで返事は? もうオツケー?」

「——あ」

いつもよりも弱い声が出てしまう。

「花音?」

首を傾げて下を向いた顔を覗いてくる。

昨日の私の一方的な告白の後、私は奏くんの返事を聞かずにそのまま駆け足で帰ってしまった。千聖ちゃんは前に奏くんも意識してくれていると言ったが私は怖かった。千聖ちゃんが嘘をつくとは思えない、けどもしも違ったら——。

「返事は、聞いてないの……。怖くて逃げちゃった」

「……まあ花音らしいといえば花音らしいわね」

「ううっ……」

その言葉がぐざりと心に刺さった。でも千聖ちゃんは次に優しい言葉を掛けてくれる。

「でも後は待つだけでいいと思うわ。奏の事だからすぐに答えを出すわよ」

「うん……そうだね」

奏くんの答えを待つだけ、待つだけなのにどうして――。

これが女の勘というやつだろうか？

あまり感じた事のない事に変な気分になる。

「(こんなにも嫌な予感がするんだろ……)」

く美咲 side く

土日は特に何もなく過ごせて、今週も普通に頑張りたいと思いつつの登校。すでに起こりうる問題といえれば今週の日曜の久々のバンド練習だろう。三バカが何も起こさなければいいが……必ず何かしら起こるだろう。

「美咲！・美咲！」

そのうちの一人が毎回のごとく私の席に来る。

これがあるから周りからは「美咲と弦巻さんって本当に仲良いよね」とか言われる始末だ。

「はいはい、今日は何？」

普通に返事をする。ただどこころはいつもとは雰囲気違った。

「あ……えつとく……。わ、笑わないで聞いてくれるかしら？ あたし自身もこういうのは慣れてなくて……」

「？ 相談か何か？」

「え、ええ」

目を逸らしながら言う。

へえ、ここも悩むんだな。

普段楽しさを優先的に考えてあまり悩みとか無いと思ってたから

意外に思える。

「悩んでるんでしょ笑わないよ。言ってるころ、私でよければ相談乗るよ」

「ありがとう美咲！」

顔を明るくして手を握ってくるころに少し恥ずかしく感じる。

「(うつ……やっぱり弱いなあ、私)」

思わず照れて目を逸らしてこころの話聞く。

それにしても相談ってバンドの事かな？ ミッシェルに新しい事をさせたいの！ みたいなの。

でも雰囲気からしてバンドじゃない気がする。バンドの話しならもっと明るいはずだし……。

「えーと、その……。はっ、恥ずかしいから耳を貸して！」

「うわ!？」

グイッと体を引き寄せられ耳の近くでこころが周りに聞こえないように言う。息がかかって少しくすぐつたい。

「す、好きな人思いを伝えたい……けどどうすればいいか分からなくて……」

「!？」

ガタツ！

言い終えて私から離れたところを見る。相談の内容が内容すぎて驚いているのだ。

私は恋の類いについて特別詳しい訳では無い、自分自身それについてはあまり関心がないからだろう。でも何故か私は友達からそういう相談を受ける事が多い。多いのだが……まさかこころが恋についての相談をしてくるなんて夢にも思ってた。

冷静を保ちつつ言葉を探して口にする。

「ま、まあその人にもよるけどこころは真正面から言うのがいいと私は思うかな」

「真正面から……」

「うん。でもあくまでも私個人の意見だからね？ 最終的にはこころが決めないと。他校の生徒なら時間合わせるのも難しいだろうし、あ

まり引つ込んでると他の人に取られたりするかもね」

「こころが惚れるなんてよっぽどカッコイイ人なんだろう。だってあのこころが惚れるんだから、それなら他にその人が好きな人がいてもおかしくはない。」

「時間なら、水曜日に……もう予定が」

「……凄いね、いつもと違う意味で。準備万端、みたいなの？」

「ちっちゃい、違うわよ！ たまたまその日は一緒に練習する日で！」

「それにしても慌てるこころを見るのって新鮮すぎて楽しい。いつも脳天気な分慌てる事が全くと言っていい程ないから動画で撮りたいくらいでもある。」

「何の練習なの？」

「ど、ドラム……」

「ドラム？ ライブハウスにでも行くのだろうか。まあという事はその人は音楽関係って所か。」

「うーん……同級生？」

「そこを聞いてなかったのを思い出す。聞くとこころは「先輩」と短く答えた。」

「うーん。どんな人か分かりさえすればいいんだけど……」

「学校も違うおまけに先輩ときた。男性でそんな人なんて草薙さんしか私は知らないから分からない。」

「ど、どんな人って……美咲は知ってるわよ？」

「は？」

「知ってる？ 私が？」

「そんなはずは……。こころが好きになりそうな男性を私が知っているなんて有り得ない。」

「ごめん。分かんない。誰なの？」

「うっっ！！」

「顔を赤くしてもじもじするこころ。」

「……で……よ」

「名前を言ったんだろうけどあまりに小さくて聞き取れなかった。」

「？ 誰、ヒトデ？」

「ヒトデじゃないわよ！ 奏よ！ 奏！」

奏？ 私が知ってる奏という名前の人となると……。思い当たるのは一人だけいる。草薙さんが……。

「(……あれ?)」

私達の先輩でドラムをやっている、そして私はその人を知っていて、その人の名前は「奏」……?

「え？ ひよつとして、草薙さん……?」

こくつと小さく頷く。

顔はどうなってるか見えないけど耳が赤くなってるのが分かるから顔はとても赤いのだろう。

それにしてもこころが草薙さんにねえ。確かに最近草薙さんに反応してたな、とか思ってたけどこういう事か。

「(でもこれはどうすれば……。花音さんも草薙さんの事が好きなのに……。あれの結果もどうなったか知らないし……)」

昼に集まる約束は一応しててそこで聞けるからいいが結果が結果だったら、こころの恋はすぐに終わってしまう。

「(うあああ!! なんで週の始めにこんな悩まないといけないんだ私は!)」

内心一人で騒いでいる。

でもこころの気持ちを無下にはできない。何だかんだで私を信用して聞いてきてくれたんだ、これはちゃんと支えないと。

「(……)」

柄にもなく机を両手で叩いて立ち上がる。

「わっ!? ど、どうしたの美咲?」

「応援するよ！ 私は！」

「え、ええ、ありがとう?」

若干私の行動に戸惑っている。だけど戸惑ってるのはこつちも同じだ。

「(千聖さんの力を借りよう、うん。こころの力になりたいけど状況が状況だ。助っ人が欲しい)」

一つ目の山は昼休みに聞く花音さんの告白の結果。それ次第でど

うなるか……。

それから昼休みにまでの授業はあまり頭に入らずに時間はすぎていった。

## 第十六話 宣戦布告 ―逃げない気持ち―

く美咲sideく

「……えっ？ それじゃあ付き合っていないんですか？」

「う、うん……」

「えー!？」

昼休みに前みたいに四人で集まり昼食をとっている中、あたしと彩さんは驚く。彩さんは花音さんに「何で何で!？」と質問をしている。

その間にあたしは千聖さんにあの話を持ち掛けた。

「あの、千聖さん」

「どうしたの?」

二人が盛り上がってる中小声で話す。

「その……花音さんの邪魔をしたい訳じゃないですけど、草薙さんの事が好きな人がもう一人いてですね……」

「それは……誰なの?」

「うちのバンドのところで、何ですけど」

それを聞いた千聖さんはとてもビックリしている様子だ。まあそうだろう、好奇心の塊と言ってもいいところが恋心を持っているなんて、全校生徒が驚くと思う。

「……それを私に言っただうしたいの?」

「あ」

確かにそうだ。千聖さんに言っただあしはどうして欲しいのだろうか? 助っ人かと思っただが何をすればいいのかも分からない。

「……………」

つい黙り込んでしまう。

すると千聖さんはくすつ、と笑い優しく話し掛けてくる。

「美咲ちゃん。あなたは友人を助けたいんでしょう?」

「は、はい」

「私は親友の気持ちを実らせるために手を貸したの、今美咲ちゃんがやろうとしているのと一緒に。別に美咲ちゃんがする行動が私は邪魔

だとは思わないわ。友人の為なんでしょ？」

「千聖さん……」

「お互いサポートする者として頑張りましたよね」

握手をする為か手を差し伸べる。白くて綺麗な肌だな、なんて思いながらあたしはその手を握る。

「でも、花音の為だから手は抜かないわよ？」

そんな笑顔で言わないで下さい、怖いです。

なんて事は言わずにあたしは苦笑いをしていた。

〈総士side〉

「あの、総士先輩」

「ああ〜何も言うな。分かってるから」

購買で適当に買ったパンを食べながら龍斗に言う。こいつが話そうとした事は既に分かっている。

「おい奏ー。大丈夫かー」

「……ああ」

気のこもつてない返事に俺はため息をつく。

奏が今日こんな感じなのは花音との一件があつたかららしい、それを聞いた俺は思わず「何だそれ」と言ってしまった。

「だーめだこりゃ」

俺は奏にやろうとしてた缶コーヒーを龍斗に投げる、龍斗は「ありがとうございます」と言つて缶を開けて一口飲んだ。

「それで何であんな感じなんですか？」

何も知らない龍斗はさつきからあの状態（朝からだか）の奏に疑問を持つていた。はたしてこいつに花音の事を言つていいのかと一瞬躊躇つたが、別にいいだろと思ひ話す事にした。

「昨日花音から告られたらしくてさ、それで悩んでる」

「……………」

何を言われたのか分からないような顔で俺を見てくる。



「ああ——俺の恋は終わったのか……」

「ま、いいじゃないか。選択肢が絞れて」

ガツクリとしている龍斗の肩を叩いて声を掛ける。

「絞れたって。確かに未来の事は好きですけど恋愛感情ではないですよ」

「え？ そうなのか？」

「そうですよ」

さざらつと言われて驚く。

てつきり花音と未来、どっちかで悩んでるんだろうと思ってたんだが……。

「花音さんの事は残念だけど、最近は周りに花がありますしね」

ニヤニヤとしながら言う龍斗はどこか楽しそうだ。花というのは詳しく知らないが龍斗が楽しそうならまあいいとしよう。

「というか何で告白されたのにこれなんですか？」

「さあな。花音の勢いに負けたんじゃないか」

「ふーん……何か変な話ですね。幼馴染みなのに」

その言葉を聞いて俺も思う事があった。

もしもつぐに告白されたら俺は素直に答えられるのだろうか、と。

「……俺も似たような境遇だからほんの少しは分かるが幼馴染みだからでもあるな。それまでの関係が一転するんだ、好きという気持ちもだがそっちも大きいさ」

「んー、やっぱり俺にはよく分かりませぬね」

龍斗がコーヒーを飲みほすと同時に俺はパンを食べ終えた。奏を見ると三つあったうちのパンが一つに減っていてそれを持ってその場に立った。

「やるよこれ、お腹いっぱいだし……」

「(ジャムパンかよ) 何だよもう帰るのか？」

「教室で寝とく」

そう言って先に帰ってしまった。

その背中を見ながら貰ったジャムパンの袋を開けて食べる。そんな俺を見て龍斗はパンに指を指して言う。

「あれ、先輩そのパン……」

「んん？」

指されてる場所を見ると賞味期限が書いてあり日付を見る。そこに記されていたのは。

「……切れてるじゃねえか」

今日よりも三日前の日付だった。

「何だよ、あいつそんなに悩んでねえんじゃねえか」

「そうなんですか？」

案外区切りは付いてるのかもな。こんな遊びをしてくるくらいなら。

「(お前が踏み出せばいいんだ。それで結ばれるさ……)」

応援と想い人と結ばれるという羨ましさそれを持って心の中で思った。

く花音 side く

「花音」

帰りの挨拶が終わってから千聖ちゃんが私の席に来た。何やら教室の入口をちらちら見ている。

「どうしたの千聖ちゃん？」

「外で……ろちゃんが残ってるの。花音に用事じゃないかしら」

「……ろちゃん？ どうしたんだらう？」

今日は学校で会ってないから話してないけど急な用事なのだろうか。携帯を確認したけど誰からも連絡は入ってない。

私は鞆に荷物を入れて千聖ちゃんやクラスメイトに挨拶をして教室を出る。

「こんにちは……ろちゃん、どうしたの？」

綺麗な髪を揺らしてこちらを振り向く。

「花音にとくくっても大事な話があるの！ 今日この後時間はあるかしら。」

今日は部活もバイトも休みだから予定は特に無い。誰かと会う約束もないし——。

「(つて、自分から逃げたのに何を言ってるんだろう……私……)」  
考えを表情に出さずに答える。

「今日は何も無いよ」

「そう！ それならよかったわ！」

パシツと私の手を取りどこかへ走り出す。向かってる先は……屋上だろうか？

「わ、わわっ……」

いつもとは違うスピードで階段を上ってるから慌ててしまう。

「はあはあ……っ、それで……話って？」

息を整えながらこころちゃんを見る。

こころちゃんはいつもの様に明るく笑顔で話してくれる。

「話は奏についてよー！」

「奏くん……？」

どうして奏くんの話を私にするのだろうか。幼馴染みでよく知ってるから？ それともほかの理由が？

その考えはこころちゃんの一言で消え去った。

「単刀直入に言うわね。花音は奏の事が好きなのかしら？」

「……え？」

何でそんな話を私にするの？

「ど、どうして私に言うの……？」

戸惑いを隠せずにあがった声になってしまった。そもそもこころちゃんがそういった話をしてくるの自体珍しい。

っ

「あたしね、花音。奏に告白しようと思うの！」

「え——」

いつも以上に小さな声が出る。いや、もはや声が出たのかも分からなかった。

こころちゃんは一度決めた事は必ず曲げない、それは一緒にバンドをやってよく分かっている。だからこそそんな事を言われると不安に

なる。真っ直ぐ私の目を見て返事を待っている。

「それで花音はどうなのかしら？ 奏の事好きなの？ それとも――」

「す、好き……だよっ！ 私っ、奏くんの事が好き!!」

その先の言葉を聞きたくなくて感情を露わにする。そんな私を見てこころちゃんは少し目を丸くすると同時ににやっとならう。

「ふふっ、知ってたわ。だから聞いたもの!」

「ど、どういう事なの?」

こころちゃんの意図が分からなくてつい聞いてしまう。

「隠れていくなんて私の性に合わないわ。だから花音に恋の宣戦布告をしたの! 奏を私に振り向かしてみせるわ!」

私に指を指して宣言をしてくる。

昔の私なら逃げて黙っていただろう。だけど今は違う。奏くんは誰にも取られたくない、私の中でいないといけなくらいに大きな存在になっていた。

だから私は言い返す。いつもはおどおどしてる私だけど今回ばかりは――奏くんだけは譲れない。

「う、受けて立つよ! 奏くんは誰にも渡さないんだから……!」

あの時は逃げちゃったけど面と向かってそんな事を言われたらもう前に進むしかない。少しでも変わるために、こころちゃんに取られないために。

独占欲が強いと思われてもいい。だってそれくらい奏くんが好きだから。

「ふふっ……」

「えへへっ……」

お互いに何故か笑いがこぼれてしまう。

自分の気持ち素直にぶつけるスツキリとする。その影響なのだろうか？ そう言えば中学の頃に奏くんにこう言われた事があった気がする。

『お前は何かと抱え込みすぎるからな。少しは自分の意思を言った方がいいんじゃないか？ 少しは気が楽になるぞ』

確かにその通りだ。打ち明けると気が楽になる。

「珍しい花音が見れたわ！ もうあたし達はライバルね！」

「ライバル……まっ、負けないからね？ ころちゃんも相手でも……っ！」

奏くんを思う気持ちなら誰にも負けない自身はある。

「私もよ！ 絶対に負けないわ！」

お互いの奏くんへの思いをぶつけた私達はライバルになった、けど今まで通りの関係でもありその後は話しながら一緒に帰った。

きつといつも通りなのはころちゃんだからなのだろう。私はそれが嬉しくも思う。

「花音に負けないわよー！」

「ふええっ!?! こ、ころちゃん道端で叫ばないで〜！」

周りの人に見られるけどころちゃんは気にしていない。私は気にしていたけどころちゃん笑顔を見てそんな気は無くなっていった。

## 第十七話 その想い 《こころ》に気付いても

（奏 side）

「……は、早いつすね」

「そうでしようか？」

目立つ。その一言に限る。

黒塗りの高級車が学校の前に止まると何事？ となるのは当然だろう。現に帰宅する生徒や部活動の生徒もその珍しい光景に目を奪われた。

「連絡来て三分も経ってないですよ」

「こころ様の指示とあらば迅速に行動をするのは当たり前なので……。それよりもどうぞ」

車の扉を開けられて中に入る。後ろからの視線が気になってやばい、こりや明日は質問攻めだな。

それはそうとこうなつた経緯を話そう。今日は水曜日、こころの家で個人的なドラム練習をする日だ。帰りのHRが終わり家に帰ろうとしていたらこころから連絡が入っているのに気付いた。内容は迎えが来る、という事で取り敢えず俺は学校の外で待とうと考えていたのだ。

「こころ様は先に家でお待ちになってます」

「そうですか」

外の変わりゆく景色を見ながら返事をする。

外に出ようと正門に向かうと軽い人だかりが出来ていて、何事かと近づくとも黒塗りの高級車が置いてあったのだ。それも黒服の人もセットで。そりゃあ人だかりも出来る、俺はすぐにその場に駆け寄り黒服の人に話し掛けて——、初めに戻ると言う訳だ。

「奏様」

信号に引つ掛かり止まった時に黒服の人が名前を呼んだ。

「はい？」

「こころ様について話しておきたい事があるのですが……聞いて頂け

ますか？」

「別にいいですけど……」

車が走り出すと同時に「ありがとうございます」と言って話し始める。

「私は仕事で離れている。両親の代わりにごころ様を小さい頃から見てきました。ごころ様は小さな頃から元気でとても笑顔でした、それは今のごころ様を見れば分かりますよね？」

「ああ、正直ああいう奴がこの世にいるなんて思ってもなかったな」「何かに失敗しても何とかしてそれをひっくり返す、そんな才能さえも持ち合わせてます。運動神経もよく周りからは注目を集めていました」

「だろうな、と思う。美咲や花音からもたまに聞くが学校では一年から三年まで知れ渡っているらしい。良い意味なのか悪い意味なのかは分からないが。」

「——だけど友達と呼べる人はいなかったのです」「はっ。」

軽く聞こうとか考えていた思考が止まる。

「い、いや友達はあるだろ？ 親友はともかくけど」

「いえ、いませんでした。恐らくご家族の方から何か言われてたのでしよう。そうですね……『弦巻家の子には余計な事はしないでね』、『怪我をさせたらダメだからね』とかですね」

それを聞いていつかのごころの言葉を思い出す。

『笑ってくれるけどみんな距離を置いてる様に思えるの……』

あの時の言葉はそれを踏まえてなのか？ でも今はあんなに元気で笑顔なのに？

「それは小、中学校と続いていきました。別にいじめられている訳ではありません、周りの方もそういう気は全く無いでしょう。今もですがごころ様はご飯の時にその日あった事を話してくれます、でもその中に人の名前は出た事ありませんでした。人を指す時は『みんな』という言葉しか使っていなかったのです」

俺は黙って黒服の人の話を聞き続ける。

「私達は心配でした。こころ様は一人で抱え込むタイプ——いえ、」  
一人でしか考えられない」ので私達に相談する事なくずっと一人で考えていました。どうすれば友達が出来るのか、どうすればみんなのよう  
に話せるのか、と。結局そのまま高校へ上がり私達はそのような生  
活が続くと思っていました」

「だけど……。」

「高校から、こころは変わった——か」

俺の言葉に短く頷く。

「驚きました、駅前で歌ってたら松原様が現れて……たまたまドラム  
を持っていて……。薫様風に言うのなら運命、という事でしようね。  
それからは凄かったですよ。トントン拍子にバンドメンバーが集ま  
り、あろう事か誰もこころ様を特別扱いしない……。一人の「弦巻こ  
ころ」として見て接してくれる。こころ様には初めての体験でした  
ね」

あいつら個性が強いもんな。こころはこころで自分がそんな立場  
にいるからと言ってどうこうしないし、あいつらはあいつらで知って  
も態度を変えないだろう。

高校になれば変わる奴は多いが以外にもこころもそれに入ってた  
のか。本人はそんなつもりは無いだろうがな。

「自分のしたい事、目標に向かって進んでいると壁にぶつかるとい  
うのは、物語にありがちな事ですね。その壁が——」

『俺がお前に教えてやるよ。目を瞑ってるお前に、知らないふりをし  
ているお前に、俺が教えてやる』

あの時、俺がこころにぶつけた言葉。

言葉はどんな暴力よりも体に、心に被弾する。遮る事が出来ないか  
ら、耳を必死に塞いでも、音を切り離しても……。口の動きで分かって  
しまう。

「俺、か……」

「あの時のこころ様は正直見ていたくなかったですね。よっぽど奏様  
の言葉が心に響いたのでしよう。でも当然ですね、同じ目標を持ちそ  
れを諦めた方の言葉なら、自分と重ねてみることは容易に出来ます。



——そして、そうなった自分を考えるのも」  
再び信号で止まる。

「怖かったでしょう。周りの笑顔が偽りと思うと、いつかは崩れ去る自分の幻想と思うと。その時のこころ様は崩壊しそうでしたよ」

その時のこころ様はあの時の——独りになった俺と同じだっただろう。いや、俺よりも酷かったかもしれない。こころには俺の花音のような心の支えがないから。

——だけど、だからだろう。俺がそう思ったのは。

車が動き出す。

「でも、再びこころ様は笑顔を取り戻しました。楽しそうにその日の夜は話してくれたのを今でも思い出せます……。『聞いて聞いて！私ね、親友が出来たのよ！』と、今までにないほどの笑顔でそう言ったのです」

『あなたがあたしの最初の親友』

その言葉通りの意味。

本人が認めればそれは親友だ、そう思われたのならその相手はそれに応える。だから俺は支え続けたいと思う。

「感謝してます奏様。こころ様を笑顔にしてくれて」

「そんな、俺は支えるだけです。あいつの……傍で」

あの時の言葉を口にする。すると「なるほど……」と何を納得したのか分からないがそう口にした。

既にこころの家が見え始めていると運転している黒服の人が最後にという感じで話し掛けてきた。

「男性と真正面から話したのは奏様が初めてでしょう。こころ様から聞いていませんか？」

「聞いてませんね、それに似た事は言われましたけど」

ま、軽々しく男に抱きついたらやばいだろ。普通に可愛いんだから男は変に意識するだろうし。

「ちよつと話します。悪い言い方をするとこころ様は男性に興味を持ってません、あくまで笑顔になる対象としか見ていなかったでしょう。それが特定の誰か——それも男性の事を思っって行動する事は

きな変化です」

「へえ……そんな人がいるんだな。大変だな、そいつも」

他人事のように言う。すると黒服の人は「はあ」と珍しく深いため息をついた。

「仮に話をしましょう。……こころ様は自分の目標をある男性に否定されました、だけどその男性は『傍で支える』とこころ様に言いました」

仮の話なのにどうしてさっきの話を繰り返すんだ？

聞き返すことの出来ないまま話が続く。

「それが原因だったのでしょうか。それからはその男性に心を惹かれていき、いつしか今までに感じた事のない感情が芽生えてました。その感情の名前に気付いたこころ様はその人に想いを伝える事にします。偶然にも伝えようとしたその日は二人で練習をする日、これほど絶好の機会はないでしょう」

丁度家の目の前で車が止まる。そして車の中では言葉を交わさず無言の状態が数秒続いた。

そこまで言われて気付いた、気付いてしまった。その男が誰を指しているのかを。

「……でも、俺は——」

決めたんだ。もう迷わないって。俺は、花音が好きだから……。

「奏様」

優しく名前を呼ばれそちらを向く。

「こころ様は自分の想いを伝えます。でも奏様には既に決めた方がいるのでしょうか？ それを知っての行動です、きっと結果は自分でも分かっているのに伝えるのです」

どうして伝えるのか……、結果が分かるならその行動は無駄じゃないか。

「俺には訳が分かりません。それは、無駄なのに」

「無駄、ですか。こころ様はそうは思わないと思います。結果がどうであれ自分の気持ちを伝える事に意味があるのでしよう」

話はここままで、そう言わんばかりに切りやめられた。

そして俺達は車から降りて黒服の人に扉の鍵を開けられる。

「それでは、行ってらっしゃいませ奏様。こころ様の気持ちを受け止めてください」

「ああ、受け止めるさ。叶える事は出来ないけどな」

すれ違おうと同時に交わした言葉に黒服の人は少し笑っていた。

……気がした。

## 第十八話 伝える想い

〈奏side〉

黒服の人と別れて練習場所へ歩く、こころは既にそこで俺を待っているだろう。でも微妙に足取りが重く感じる。それはきつと黒服の人との会話の内容のせい……この後に起きる事に対しての戸惑いだろう。

花音に告白されて、次はこころか……。ほんつと人生は何が起きるか分からないんだな。

二階にある部屋に着いて扉に手を掛ける。

「来たぞ、こころ居るか？」

「あら、来たわね！ こんにちは奏！」

いつも……以上だな。いつも以上に元気に挨拶をしてくる、まるで私はいつものように元氣と言わんばかりに。

俺はドラムの準備をしながら、いつも通り適当な話をし始めた。

「それにしても、わざわざ車なんて出さなくてもよかったのに。急ぎの用事でもあったのかよ」

「いいえ、特に無いわよ？ 強いて言うならあたしが奏に会いたかったからかしらね！」

「そーですか」

椅子に座り足をパタパタとさせて言う。躊躇いなくそう言ってくるこころについて気恥ずかしくなる。

こんなやり取りはいつもしている。だけど心の内側を知ったら見る目というか、言葉の受け取り方が変わってしまう。

「よし、っと」

軽く叩いて音を出す。

感覚は最近で戻ってきた。だけどそれでステージに立てと言われると無理だろう、勿論ライブを正面から見ると見る事もだ。

「準備出来たぞ。やるか？」

ぴよんと椅子から降りて俺の近くに来る。そしてくるりと何故か

一回転してからその日の練習が始まったのだった。  
「ええ！ 始めましょうか！」

〈総士 side〉

「あ、総士くん？」

「ん……花音か、久しぶり」

学校が終わりバイトも休みだし久々に沙綾のこのパンを買いに行こうと歩いていると、懐かしい人物と出会った。制服姿を見ると向こうも学校帰りという事が分かる。

「何やってんだ、こんな所で」

「美咲ちゃんと沙綾ちゃんの家のパンを買って帰ろうかな、って」

成程な、同じ考えって訳か。

美咲と呼ばれた少女は俺を見て軽く頭を下げてくる。この子と会うのは恐らく初めてだろう。うん、見た記憶はない。俺は一応自己紹介をする事にした。

「初めましてか？ 俺は白羽総士、奏の友達だ」

「あ、すいませんそちらからだなんて。あたしは奥沢美咲です。ハロハピではDJやってます」

ペコリと再び頭を下げる。

互いに挨拶を終えた俺達は並んですぐそこにあるやまぶきベーカリーへと向かう。

中に入ればパンのいい匂いがすぐに鼻に届く、焼きたてのパンもあるのだろう。俺はクロワッサンとチョココロネを取って先にレジへ向かった。

「いらっしやいませ。って白羽さんじゃないですか久しぶりですね」

「おう、そっちも元気そうで何よりだ」

そこには、この店の子供である山吹沙綾がレジに立っていた。慣れた手つきで袋に詰めて、支払いをする。

「はいどうぞ」

それを受け取りまだパンを選んでは花音達を待つ。すると沙綾が意外な事を聞いてきた。

「別に他意は無いですけど、最近の龍斗ってどんな感じですか？」

「龍斗？ 別に変わった事はないぞ、最近周りに『花』があるとしたか？ 聞かなかったけど花って何だろうな。まあ、あいつの性格からして女だろうが。」

「ふふっ、そうですか」

それを面白そうに笑う。何が何だか分からない、沙綾に関係するの  
か？ そんな考えてるうちに花音と美咲もパンを持ってきて会計を  
済ませた。

別にそこまで探るつもりは無いから聞きたくなったら聞く事にす  
るか。昔の奴が今の関係に入り込むのはアレだな。

そして、それぞれパンを買った俺達は店の前で別れる事になった。

「また今度ね総士くん」

「失礼します」

「おう」

軽く挨拶をして別れようとした時に俺はある事を花音に伝えた。

「ああ、そうだ花音」

「？ どうしたの」

くるっと振り返り、呼び止めた事に疑問を持っているようだ。

「奏と色々あったらしいがあいつ、そろそろ答えを出すぞ」

「——え？」

言いたい事を言った俺は「じゃーなー」と言って手を振りながら帰  
る。その俺の言葉に花音は聞き返してきた。

「そ、それってどういう——」

更に混乱する花音、これ以上は推測では言えないから無理に話を切  
りやめる。

「もう時期分かるって、奏を信じとけよ」

「う、うん……」

オドオドしながらも強く信じてるのが分かった。

ああ、俺もつぐにこんなに信じられたら……。奏よりも俺は恋愛については弱いのかもな、などと思う。

ずっと支えてくれた花音と支えられた奏。

いつの話かは覚えてないが奏自身「今度は俺があいつを支えたい」なんて言ってた記憶がある。それがもう少して叶おうとしている……。

「ほんと羨ましいぜ……。先にその場で待っていてくれよな、奏」

くところsideく

あたしは何曲が終わって一息をつく。

「——ふう。休憩しましょうか奏！」

「あ、ああ」

丁度そのタイミングで黒服の人が飲み物を持ってきてくれる。奏は注がれているオレンジジュースを一気に飲み干してしまった。

「何かお前、いつも以上に気合い入ってるな」

「そうかしら？　自分ではいつも通りのつもりよ？」

……なんてのは嘘に決まってる。本当はずっと、奏がここに来た時からドキドキとしているのだ。あたしはそれを隠すために練習中は張り切っていた。

いや、ドキドキを隠すためじゃないのかもしれない。

本当は逃げないようにするため。あたしの言葉に対する奏の返答は既に決まっている……。それはあたしの望むものではない——。

「いつも通り、ね。——なあこころ、変な話をするけどいいか？」

奏が唐突に言うから戸惑ってしまう。

へ、変な話って何かしら……。ないと思うけど——。

「え、えっちな話は嫌よ……。？」

もじもじとしながら言うど頭を抱えてため息をつかれる。

「お前は俺をどんな目で見てんだよ……。どう混乱しても女子にそんな事は話さない、いや話せねえ」

「そつ、そうよね！　ごめんなさい奏……。それで話つて？」

すると奏は少し間を置いて話し始めた。だけど、それは奏を呼んだ事に繋がって……。――

「まあ、いや……。お前、好きな人はいるのか？」

まさか奏からこんな話をされるとは思ってもいなかった。

あたしは覚悟を決めて告白をする。

「――ええ、いるわよ」

「男女関係、の意味だぞ」

「ええ」

奏を見つめる。

二人しか居ない空間には先程のような賑やかな音は流れていない。奏は別に驚くわけでもなく、いや知っていたかのように冷静にいう。

「あたしの好きな人……。ねえ、奏……。あなたに言いたい事があるのだけれど、いいかしら？」

「おう」

ゆつくりと奏の前に立つ。

鼓動が早くなっているのが分かった。

あの宣戦布告の後に花音から告白の事を聞いたけど、こういう感じだったのだろうか。

「あたしね、初めて男の人と仲良くなれたの。そしていつの間にかその人を意識していて、よく分からない感情が芽生えたわ」

後ろで手を組みながら気恥しいけど笑顔で言った。

「最初に会った時には喧嘩のようなのをしたけど、その人と話したり会ったりすると心がドキドキとしていたの。それは今も……。なってるわ」

「最近、この気持ちの名前に気付いたわ。恋心――あたしはその人に恋愛感情を抱いていたの」

奏を見据えて話す。

思いを伝えるように……。いや、伝える為に。

「傍で支えてくれると言ってくれた時、とても嬉しかった。優しくし



てくれて、笑顔で話してくれて……、その人を考えるだけで毎日が楽しかったわ」

ギョツ、と両手を胸の前で強く握る。

そして想いを伝える……決して叶うことの無い願いを。

「あたしは、奏——あなたの事が好き——大好きよ!!」

〈奏 side〉

「あたしは、奏——あなたの事が好き——大好きよ!!」

ほら来た、というのは失礼だろう。

こうなる事は黒服の人から話を聞いた時から確信していた。

外を見ると既に夕方になっていて窓からは夕日が差し込んでいる。

その光はこころの魅力を倍増させているように思えた。

「……そっか」

俺はボソリと言う。

分かっていたけどキツイ。

花音とこころの二人から告白をされる、片方を受け入れれば片方とは付き合えない、そんなのは当たり前だ。

俺は花音に昔から秘めていた思いを今度伝える。それはこのこころの告白を拒否するという事で……こころを振るといふ事だ。振った後でもハロハピとして顔を合わせるのとはとても辛い。

「ねえ奏……奏は、あたしの事どう思ってるの?」

返事をしない俺にこころは問を投げかける。

「俺は——」

迷わないと決めた。

自分の気持ちに、想いに……。

「こころ。俺はお前の事は好きだ」

その言葉に驚くように目を見開く。

「だけど、俺は花音が好きだ。だからお前の告白は受けられない」

「——っ」

沈黙。

お互いの気持ちを打ち明けて時間が止まったような静かさが訪れる。

「あはは、っ……。そうよね、分かってたわ……」

力無く笑いながら弱い声で言うところ。

「あー、やっぱり無理だったわね。花音には完敗だわ!」

こころはくるつと後ろを向いてしまう。その時に何か、煌めく何か  
が落ちるのが見えた。

「何で……告白をしたんだ。結果は分かってたんだろ?」

自分でも酷な質問だと思う、だけど理由を聞きたかった。

どうして分かっていたのに告白なんてしたのか、無駄な行動をした  
のか、を。

「理由、ね……」

こころは制服の裾で顔を拭って、再びこちらを向いてくれた。

その顔は涙で顔が赤くなっているのが分かった。

「どんな結果でも逃げたくなかったから、かしらね。ここで逃げたら  
一生後悔すると思ったから……」

強いな、こころは……。

「ごめん」

どの言葉よりもその一言が出てしまう。

「どうして奏が謝るの? あたしはあなたが幸せになるならそれでい  
いわよー!」

無理に笑顔を作ってるのがバレバレだ。少しでも、少しでもいいか  
らこいつを癒してあげたい。

俺はドラムの椅子から立ち上がりこころに近付いた。振った奴が  
するような事じゃないのは分かっている。だけどこんな事しか俺に  
は思い浮かばなかった。

「ごめん、こころ。お前の想いを受け止められなくて……」

強くこころを抱きしめる。

そしていつかの言葉を繰り返した。

告白とは別の願い、その願いは叶えてやりたいから。……いや、叶

えてほしいから。

「でもお前の傍で支えてやる。お前の『世界を笑顔に』という夢を、これからも支える」

真正面から抱きしめているから、こころは俺の胸に顔を埋める形になっっている。

「……う、あ」

こころから声が漏れた。

「う……うあ……ああ……っ。かなで、かなでえ……！」

俺の名前を呼びながら、後から後から大粒の涙がこぼれ落ちていく。

強いと先程思った少女、きつと思ひ詰めてたんだろうと思う。そんな少女の傍に居て支えてやれば負担は減るし、辛くならない。

それに……心の支えにもなれるだろう。

俺はこころが泣き止むまでその背中をさすっていたのだった。

## 第十九話 二人の決意

♪奏side♪

どれくらい時間が経ったのか分からない、そのくらい背中をさすっていた。だが、そうしてる間にもこころは落ち着いてきたようだ。

「っ、…………ごめんなさい…………奏」

まだこころの瞳には涙が浮かんでいた。

いつの間にか俺の後ろに回していた手を解き、俺の腕から離れる。

「いや、こちろこそ…………悪い」

「ふふっ…………さつきも言ったじゃない、奏は謝らなくていいわよ。あたしはこれだけで満足なの」

こころは携帯を取り出して何やら操作をしている。手の動きからして文字を打っているようだが、画面は見えていないので正確には分からない。

そうして操作が終わったのか手が止まる。そしてこころは俺の目の前に携帯の画面を突き出してきた。

「あたしは奏達を応援するわ！ あなたの幸せは…………あたしの幸せでもあるから——！」

『あたしは花音と奏を応援するわ！ 必ず、幸せになるのよ？ そうしないとあたしが奏を横取りするわよ！』

突き出された携帯の画面にはそう書かれていた。

きつとこころなりの応援なんだろう。

だけど、俺はその携帯の画面よりもそれを握っている手に目がいった。

——プルプルとその腕は震えていたのだった。

「(はあ…………)」

頭を掻いて自分に似合わない言葉を言おうとする。二、三回咳払い。あー、と言ってから俺は話した。

「俺は……お前が笑顔じゃないと幸せになれないと思う。バカみたいな事を言ってるのは自分でも分かってるさ、だけどお前の泣き顔を見るのは辛いよ」

間をひとつ置いて続ける。

「俺を好きになつた二人、花音とこころ。正直なところ俺はお前らの両方が好きなんだろうな。花音の笑顔、こころの笑顔。花音の匂いや仕草、こころの匂いや仕草。花音の声、こころの声……色々好きだと思ふ。俺は花音を笑顔にする。だけどそれと同時にこころ、お前も笑顔にしたいなんて思ってる。逆に俺が笑顔になるには花音と——こころ、二人の笑顔がないと無理だよ」

他人になんと言われようと構わない。

俺の幸せは二人の存在で成り立つと思う。この選択はもはや直感だ、だけど不思議と間違ってる気がしない。

俺がどちらの少女に惹かれてたのは間違いないから。

「そもそも世界を笑顔にする本人が笑顔じゃなくてどうするんだよ。せめて目の前の人だけでも笑顔にしろ、それから広げていけ」

再び服の裾で顔を拭う。拭いながらもこころは何故か笑っているようだ。

「あはは、つ……。奏ってほんとずるいわよ……。振った相手に言う言葉じゃないわ、それ」

ちよちよこと手招きをされ、既に近かった距離を更に詰める。

——ちゆ。

「!? お、おまつ——こころ!?!」

突然の行動に戸惑う。

頬に残る生暖かい感触、顔が近くにあつたからか視界に入ったこころの綺麗な髪。俺はキスをされたのだろう。

その暖かさ残る部分に手を添えて、俺はこころを見る。

「あら、そんな顔の奏は初めて見たわ。不意打ちに弱いのかね?」

小悪魔的な微笑み。人の弱みを握った人物がするような表情だ。ただどこの少女がそんな表情をすると己の魅力を違った形で引き出しているかのように思えてしまう。

「だ、誰だっっていう反応になるだろ……。お前、そういうの誰にでもしそうで不安だ」

「あら、誰にだっっていう失礼ね。あたしは奏にしかしないわよ？」

さりりと云ってのけるから凄い。俺もいつかは堂々と言ってみたいものだ。

恥ずかしさを隠すかのように俺はドラムの席に座る。だが動揺はそう簡単に隠せないようだ。

「っ。ほ、ほら告白も終わったんだ！ 切り替えて行くぞ！」

「ええそうね！ それじゃあやるわよ！」

泣いた後だから目元はまだ少し赤い、だけどそれ以上の笑顔を振りまいてこころは歌い始める。

「(ちゃんとこの笑顔を支えないとな……。その想いは受け止めて、叶えてやらないと)」

花音への想いとこころの気持ちの受け止め。

大変だろうけど二人を幸せにするためにはやらないといけない事だ。

こころに告白された今日、俺は心に誓った。どんな形であれ二人を幸せにすると――。

その為には……。今度の日曜日が勝負か。

く花音 side く

「――あ」

「どうしたの花音さん」

総士くんと別れた後に美咲ちゃんと二人で歩いていると私の携帯が振動した。

「メールが来たみたい。誰からだろう？」

携帯を取り出すと画面にはこころちゃんと表示されていた。

こころちゃんからメールなんて珍しいから何かあったのかな？  
と思いつながらメールを開く。

「……………」

文章を読んで携帯を落としそうになる。

恐らくこころちゃんはあるの宣言通りに告白をしたのだろう。そして結果は――。

「花音さん？」

美咲ちゃんが心配そうに顔を覗かせてくる。そしてたまたま携帯の文が目に入ったのか、目を丸くした。

「こころ……。そっか、あんたは……」

何かを噛み締めるように呟く。それはこころちゃんを思っているように……。

「花音さん、あたしも応援してますよ。草薙さんと花音さんを」

美咲ちゃんは私を見て真っ直ぐにその言葉を口にしてくれる。きっと美咲ちゃんは知っていたのだろう、こころちゃんの気持ちを。

「うん……。私、頑張るよ……。っ！」

今度は逃げない。

ちゃんと奏くんに、もう一度想いを伝える。色んな人に背中を押してもらってる、だからもう怖くはないんだ……！

「(日曜日、みんなでの練習の日……)」

その日が私が一步、踏み出す日に――。

## 第二十話 応援

（奏 side）

「それでは奏様、今日はお疲れ様でした。松原様との関係……頑張ってください。応援してます」

「あ、ありがとうございます。それでは」

あの後、黒服の人に家まで送ってもらって家に帰ってきた。そして家の前に降ろしてもらった俺は挨拶をして別れた。

車が走っていった後に今日あった事を思い出していた。

黒服の人からのこころの心情、こころの告白、そして俺の決意……。人生でこんなに疲れたのは久々だ。つい、達成感からため息が出た。

「——あれ、奏じゃん」

「あ？」

家に入ろうとした時に誰かに声を掛けられる。その声に後ろを振り向くと意外すぎる奴が立っていた。

「九郎？ 何してんだ、暇人か？」

「あはは。暇じゃないよ、九莉を迎えに来たんだ」

俺に用だなんて珍しいと思っただが違うようだ。用事は九莉を迎えに来ただけらしい。

九莉というのはこいつの妹の事だ。

松橋九莉、未来と同じ学校で同級生。兄とは違って割としつかりしている性格で、いつも迷惑をかけている莉緒にしよっちゅう謝っている。

「それなら部屋で寝てるんじゃないか？」

「かもね。取り敢えず上がっていいかな、立つのも疲れるし」

「おっと、すまない」

そう言っただけ俺は家の扉を開ける。

玄関にはやはり未来ともう一つ、別の靴が置いてあった。九郎が「九莉の靴だね」と言った事から確定だろう。



九郎にはリビングで待つてるように言って、俺は二階の未来の部屋へと向かった。

「未来ー、入るぞー」

そのまま部屋の中に入る。そして俺は暗くなった部屋の電気をつけ、やはり寝ていた未来の体を揺すった。

「う、ううん……。クーちゃん……」

二人は制服のままベッドに寝ていて、九莉は未来の腕にがっしりと抱きついている。

あまり時間をかけると下で待つてる九郎に申し訳ない。少々強引だが寝ている九莉を未来の腕から話して、俺は抱き抱える。

そのまま階段を降りていると九莉が寝言を漏らした。

「みーちゃん……。大好き、だよ」

二人は仲がいい。仲がいいのは兄として嬉しい、けど俺と九郎が手を焼いているのは九莉が本気で未来の事を好きという点だ。それで俺の事は『お兄さん』と言われるから尚更困る。

もはや結婚する勢い——いや、本人はそう言っているが、未来は遊び程度だと思っているから微妙に二人は噛み合っていない。

「九郎、連れてきたぞ」

「んー……。あー……」

ぐったりとソファアに腰をかけている九郎はやる気のない返事をする。

「このソファア、気持ちいいね……。ふあ〜」

目を細めて爺さんのようにのんびりとしている九郎を見ると、中学の頃に戻ったような感じがして懐かしく感じた。が、勿論そのままなわけにはいかないので九郎を揺さぶって意識を戻させる。

「寝るなよ。ほら、九莉持ってきたから帰れ。外も暗くなるし、明日はお互いに学校もあるんだ」

「ぬあ、僕は……。ああごめん、気持ちよくて寝かぶってた……」

頭を掻きながらゆっくりと立ち上がる。そうして九莉をおぶってから玄関に向かった。

「ごめんね、急にお邪魔して」

「いや回収に来てくれたから助かった。それじゃ気を付けて帰れよ」  
「うん」

短く返事をして扉に手をかける。そのとき「あ、」と何かを思い出したかのように俺に振り返り声を掛けてきた。

「頑張つてね。花音はずっと待つてたから」

どうしてその事を――。

そう聞く前に俺の口は動いていた。

「だな。待たせた分、しっかりと伝えるさ」

その言葉を聞くと、九郎はくすつと笑って家を出て行った。この事については龍斗ら辺から回ったりでもしたのだろう。

九郎が帰って家の鍵を閉める。そしてリビングに戻っていると、二度二階から未来が降りてきていた。

「おにーちゃん……くーちゃん知らない？」

「九莉ならさつき帰ったぞ。九郎が迎えに来てたからな」

「んー、そうなの？ ……あ、おかえり〜」

これは相当寝ぼけてるな。何をしてたんだ、こいつらは。

「おう、ただいま。取り敢えず、飯作つとくから服を着替えて来い」

「うんー、分かった〜」

目を擦りながら再び部屋に戻っていった。……ふらふらしながら階段を上る姿を見ると、少々不安にもなるが。

俺はキッチンに向かいながら今夜のメニューを考えるのだった。

〜九郎 side〜

奏の家から帰る最中に携帯で数時間前のやり取りを見直す。それは、総士、莉緒、龍斗とのLINEでの会話だ。

九莉が居なくなつたから取り敢えず聞くだけ聞いたけど面白い情報も聞けたのだ。

まずは総士。

『店には来てなかったぞ。莉緒にでも聞いてみるよ』

そして莉緒。

『旅館には来てないぞ？ 親父も来てないって言ってる。龍斗か奏なら知ってんじゃないね』

それで龍斗。移動中だったのもありこれは通話にした。

『九莉ですか？ 奏先輩の家で寝てるんじゃないですかね、ほらいつもじゃないですか』

「ん、でも未来は部活……」

『休みとかならこの時間でも有り得ますよ。総士先輩達じゃないなら、消していつて奏先輩の家でしょうね』

「そっか。うん、ありがと」

そう言って通話を切ろうとしたら最後に、という感じで龍斗が言ってきた。

『あ、それとですけど。奏先輩ようやく花音さんと引っ付くそうですよ』

「……それは面白い事を聞いたね。二回目だけど、ありがとね。今度お礼するよ」

といった感じの会話だった。

随分遅かったけど二人が付き合ったらパーティーでも開くかな。

皆と花音を呼んで、莉緒か奏の家で……昔みたいに――。

「……みーちゃん？」

「ん、起こしちやっただね」

考えながら歩いていると、背中の九莉が起きた。

「お兄……？ どうして？」

「奏の家で寝ていたから、おぶって帰ってるんだよ」

聞かれたのでこうなった経緯を軽く説明する。すると「ごめん」と申し訳なきように謝られた。

「いや……いつも迷惑をかけてるのは僕だから。たまにはお兄ちゃんみたいな事もしないよ」

そう言っただけゆっくりと歩き続ける。そんな中で九莉に先程思い付

いた事を話してみた。

「そういえばさ、奏が花音に告白するらしいんだけど……」

「奏さんが……花音さんに？」

「うん。……それで、急に世界が滅びない限りは付き合うから、お祝いのパーティーをしようと思ってるね」

「お兄にしてはいい考えじゃない？ 二人も喜ぶと思う」

二人の関係を知っている九莉は認めてくれた。

まあ九莉じゃなくても莉緒達なら納得してくれるだろうけど。

「その時は、九莉も呼ぶよ。花音と最近話してないでしょ？」

「うーん、嬉しいけどボクの予定が空いてたらね」

と、九莉は笑いながら言った。

確かにその日が部活と重なったら意味無い、か。それにいつ奏から連絡が来るかも分からないし。

取り敢えずは明日、莉緒に話を持ち掛けてみよう。祝う事はどっちにしても確定している。莉緒自身もあの二人の事は応援していたし、了承してくれるだろう。

「(僕らの中で……先に進んだのは、奏が最初か)」

今度、奏に色々話でも聞こう。それで得られるものもあるかもしれない。……千聖に対する接し方も。想いを伝える事も。

「……お兄？」

考えてるうちに足が止まっただけで、九莉が心配そうに顔を前に出してきた。

「ん……。ごめん何でもないよ」

僕は再び歩き出した。

心の中で奏の幸せを願って――。

## 第二十一話 「花音。俺は、お前の事が——」

〈奏side〉

「おはよう花音」

「お、おはよう……奏くん」

そして日曜日、俺はライブハウスCIRCLEという場所に来ていた。

今日は久々の全員揃つての練習との事で、こころ達は張り切つている。……が。

「じゃ、じゃあ私も準備するね……っ」

やはりというか花音だけは、俺によそよそしかった。原因は……当然知っている。先週の事で悩んでるんだろう。

俺は何も起きてないような感じで接しているが、相当無理してるのが自分でも分かっていた。

「(ふう……。でも、ここで折れてたらラストの準備をしてくれたころ達に申し訳ないしな。頑張らないと……)」

話はこの練習の前日——昨日の夜に遡る。

前もって俺はこころに電話をしていた。

「——という事なんだが、頼めるか？」

『あたしは良いわよ！ 最後に花音を残せばいいのね！』

「お、おう。言い方は変だけど、それで頼む」

『任せなさい！ はぐみ達にはあたしから連絡するわ！』

それは、明日の為の準備。それは練習が終わった後、俺と花音を二人きりにするというものだ。

あの時のように一体一で、花音のように真正面から想いを伝える。

『応援してるわよ！ 奏！ また明日！』

「……おう。ありがとな、こころ」

結果、練習が終わった後に練習場から俺と花音以外の奴は適当な理由を作って出ていくという事になった。花音も気まずくて逃げるだろうから、その時は俺が手を打つというわけだ。

とまあ、後のことは不安は残るが大まかな事は分かってるから多分いい。問題は……。

「いえーい！ 張り切っていくわよー！」

「おー!!」

こいつらの練習だ。

俺は手を叩いて一旦ストップをかける。

「待て待て、自由すぎるだろ」

「? いつもこんな感じよ?」

「いやいや嘘だろ。こんな練習あるわけ——」

「……………」

「(うつそだろ……)」

俺を見ていた美咲が目……というか顔を逸らす。それだけで俺は分かった。

こころが言っている事は本当だろう。美咲でも説得しきれずに諦めた、といった感じだ。花音は苦笑い、美咲はどんな表情をしているか分からないけど開始数分で疲れきっていると思う。

運動神経抜群のこころはバク転をされていて、はぐみはミッシェルに抱きついて、薫は演技か何かをしている。

こんな力オスな練習風景、俺は初めて——いや、俺らもあつたな。「あー、取り敢えず何曲か通してくれ。見てからアドバイスをしていくからさ」

「歌えばいいのね? 分かったわ! それじゃみんな、いくわよ!」  
その言葉と共にその日の練習は開始した。

「今日でしたっけ、奏先輩」

「ああ。今頃練習でもしてるんだろうな」

俺はつぐの家で毎度の手伝いをしている。今日は龍斗が勉強をしに来ていて、人も少ないので教えてるといった感じだ。

「……奏、何かするの？」

たまたま居合わせた蘭が興味を持ったのか聞いてくる。

「奏が花音に告白するんだよ」

「そうなの？」

「そうらしいよ」

そこに注文を持ってきたつぐが話に加わった。妙にニコニコとして楽しそうにしている。

「言い方は変だけど、ようやく付き合うんだね」

「長かったよな……三年か？」

俺達が練習を教えていただけあって、アフグロのメンバーも二人の関係は知っている。

「三年ですね。ま、これで周りに関係がハッキリできますね。紛らわしい部分もありましたし」

龍斗がシャーペンを置いて答える。

確かにそうだと思う。

知ってる奴はいいが、モカなんか知らない奴は最初二人のやり取りを見て「付き合ってるんですか？」と聞いたくらいだったからな。

「うう……、ここでイチヤイチャされるのかなあ……」

「いつもの事だろ。付き合っようがなかるうが、友達以上の接し方をしてるんだし」

つぐが心配そうに呟くがあまり心配しなくていいと思う。花音の天然さが暴走しなければ、その点は大丈夫だろう。

行き過ぎても奏が止めてくれる……だろうし。……少し不安だけだ。

「ふーん、それなら今度会ったら祝福しないとね」

「俺は明日の昼飯の時にかな。何か買っていこうつと」





「ああうん。それでいいや」

そしてミツシエルと花音の方を向く。

「みき——ミツシエルは大変だろうけど頑張ってくれ。DJはあまり分からないんだ」

ミツシエルは大きな頭を縦に動かして頷いた。

「それと花音だけど……うん、すっかりしてると思う。上手くなったな」

「！うん……練習、したから」

開始時はあまり顔を合わせてなかったけど、少し楽になったからかぎこちないがちゃんと話している。

いつも仲のいい二人がぎくしゃくしてるのと、もう一つの事でついあたしは笑ってしまった。

「ふふつ、良かったわ奏。あなたがちゃんと見てくれて」

「あ？ 当然だろ。見るって言っただから」

やはり、自分では分かっているようだった。

練習とはいえライブの練習、前に美咲から奏はライブを見るのが嫌いだと聞いた事があったから心配していたが、どうやら大丈夫なようだった。

安心をしていると薫が話を切り出した。

「それはそうと、最後の曲をする前に一旦休憩をしないか？」

その話は花音以外のある事を実行する合図だった。

「じゃあはぐみお水飲んで来るね〜！」

「私も付き添うとしよう。プリンセスはぐみ」

言うや否や二人は練習場を出て行った。それに続いてミツシエルも花音にひと声掛けた。

「すいません花音さん……。暑くて、外の空気吸ってきますね」

「う、うん。私はこころちゃん達とここで待ってるね」

花音がそう言うのを見て、あたしは奏に近づいた。そして小さな声で言った。

「頑張りなさいよ、奏」

「おう。感謝する」

すれ違うように扉へ向かって、みんなを追うように出ようとする。すると、後ろから花音が声を上げたのが分かった。

「こっ、こころちゃん!」

「悪いわね花音! やる事を思い出したの、しばらく二人で待っててくれるかしら?」

「ええっ!? ま、待って……っ!」

花音の声を聞かぬまま、あたしは外へ出た。

——願うのは、二人が幸せになりますように。と願って。

〈奏 side〉

「え、あ……。わ、私も行くね……。っ」

やはり二人きりになると避けようとする。花音は扉に向かおうとするが、そんな事はさせない。

「——花音」

「ひゃっ!」

逃げようとする花音の手首を握り捕まえた。当然それを振りほどこうとするが男の力には抗えず、徐々に大人しくなっていた。

「な、何でこんな事するの? 手……離してよ……。奏くん……」

顔を伏せて小さな声で言う。その声は震えていて、どこか脅えているように思える。

俺は抵抗をしなくなった花音の腕を見つめる。

「嫌だな。俺はやる事があるからこうしてるんだ」

その言葉にビクツと体が震えた。

「やる事、って……。何を……。?」

まだ下を向いたままの花音は震える声でゆっくりと聞いてきた。自分でも俺が何をするか分かってるから震えてるんだろう。

「告白の返事だ、分かってんだろ花音も」

俺はそれを実感させる為にはつきり言う。

それは自分を奮い立たせる意味もあっただろう。

覚悟は決めても不安は残る、〝もしも〟を考えてしまうのだ。そんな弱い自分を殺す為に、今自分は何をするのかを再度確認する為に。「もう一度、花音の想いを聞かせてくれ。今度はちゃんと返すから……」

「わた……し、は——」

戸惑ったような様子を見せたが、空いた手を胸の前で強く握る。それを見た俺は掴んでいた腕を離れた。

花音は顔を上げて、あの時のように俺を見てから名前を呼んだ。

「——奏くん……っ！」

〈花音 side〉

また繰り返す所だった。みんなに押ししてもらえたのに、その期待に裏切るかのように……。

でも——。

「私、私はね……っ！」

こころちゃんや美咲ちゃん、千聖ちゃんに彩ちゃん……色んな人に押ししてもらった。

そして今の奏くんの言葉……。

「好きっ、奏くんが……好きだよっ！」

私の二回目の告白、ストレートに好きと伝えた。

そして奏くんの返事を待つ、前は怖くて聞けてなかった、けど今回は逃げない。

震えてた私はいつの間にか収まっていた。むしろ、しっかりと立って、奏くんを見ている。

……この感覚はライブの時に似ている。

始まる前は怖くてビクビクしてるのに、始まるとしつかりとドラムを叩いている。それと似ていた。

「こ、今度は……奏くんの想いを聞かせてっ」

「ああ」

短くそう答える。

うう、何だかドキドキしてきたなあ……。つ、ううん！ 弱気になっちゃうダメだよ！ ちゃんと返事を聞かないとっ！

「……俺はなずっとお前に感謝してたんだ。あの時に俺を支えてくれて、ずつと恩を返そうと思ってた」

それは高校に上がる前の話だろう。エタハピが解散した時の辛い思い出……。

「少しづつだけど仕方ないと思い始めて、心も落ち着いてきた。そうなれたのはお前が隣に居てくれたから安心出来ていたんだ」

それは昔聞いた事があった。

その時に何回も感謝されたのを覚えているけど、私は逆にそうする事しか出来なかったから、と笑って言ったのだ。

「きつと……その時から心のどこかで、お前に惹かれていたんだろうと思うよ」

「——え？」

その「惹かれていた」という言葉に声が漏れた。

それはいつか、千聖ちゃんが言ってた事を思い出して——。

「自分で知らない間に俺の幼馴染みは可愛い、綺麗だと思い始めていた。そしてある日、俺は確信したさ。俺は……幼馴染みを一人の女として見ている事に、な」

照れくさそうに頭を掻く奏くん。そんな彼の姿を見ると、こっちまで恥ずかしくなってしまう。

「前にさ二人で水族館に行っただろ？ ずつと花音を目で追っていた、見飽きた行動だけど全てが新しく新鮮に見えるんだ。それは、意識が変わったから……。おかげでこっちはドキドキしっぱなっしだったよ。——そして帰る時のさ」

「う、うう……」

水族館へのお出かけの帰り。

忘れもしない、私が勇気を出して告白した日……。そして自分から逃げた日。

「俺は何も出来なかったけど、今なら言える。ちゃんと……お前を――」

「花音を見て、言える」

奏くんは私を見据える。

まるで、あの時とは反対のように。

「花音。俺は、お前の事が——好きだ。花音と先の関係に進みたいと思ってる」

「え……。ほ、本当に？」

聞き間違いかと思いき返してしまった。

「本当だよ、嘘を言うタイミングじゃねえだろ……」

言い終えると照れたように顔を逸らす。

横から見える顔は赤くなっていて、失礼かもだけど可愛く見えた。

「っ、良かった……。奏くん……。かなでくんっ！」

嬉しさのあまり私は奏くんに抱きついた。

急な行動なのに冷静に優しく抱きしめてくれて、それがまた嬉しくなって奏くんの胸に顔を埋めた。

「花音……」

ギュツと更に強くしてくれる。

それにどんな意味が含まれているのかは分からないけど、離さないという意味だったら良いな……。

私達はみんなが帰ってくるまでの間、二人で抱き合っていた。

〈奏side〉

「……花音、そろそろ」

「あ、うん……。めんねっ」

嬉しさのあまり泣いていたらしい花音は目元が赤くなっていた。

俺としてももう少しこうしていたいのが、そろそろ種明かしというか、みんなを呼ばないといけないと思った。

「じゃ、みんなを呼んでくる」

花音から体を離して扉へ向かう。そして扉の前に着いた俺は、コンコンと三回扉をノックした。

そんな俺を花音は不思議そうな表情で眺めていた。

「奏くん？ 何して——」

……ごめんな花音。

心の中で謝って扉を開ける。

それとほぼ同時に練習場内に人が押し掛けてきた、その人は一目散に花音へと駆けてゆく。

「おめでとう！ 花音っ！」

「かのちゃん先輩、おめでとう〜！」

「わあっ!? こ、こころちゃん、はぐみちゃん!？」

飛び込んできたのはこころ。そしてその後からはぐみも抱きついた。

美咲と薫はゆつくりと入ってきて俺の横に並び、三人がじゃれ合ってるのを見ていた。

「上手くいったようだね王子様?」

「ああ。みんなのおかげだよ」

「あたしは草薙さんの頑張りだと思いますけどね。……それと、おめでとうございます」

そこで美咲に祝福の言葉を貰った。それに続くように薫も言ってくれた。

「姫と幸せに、王子様」

「ははっ、ありがとな」

その言葉がとても嬉しく感じる。

それは花音も言われているらしく、少し声が聞こえてきた。が、どうやら様子は違うようで……。

「え、え……うっど、どうして?」

花音は混乱していた。

恐らくどうして自分達が付き合い始めた事を知ってるのか、という事だろう。

混乱してる花音に、俺はこの事を説明をする。

「さっきみんなが出ていったら? あれは俺らを二人きりにさせる為だったんだ。ごめんな、罫にはめる形になっちゃまって」

まあ、こころから聞いてたのと内容は違ったけど……。

「それで、最初から俺が告白するのは言ってあったんだ。成功したら三回ノック、失敗したは二回ノックって感じで扉近くで待っててもらってた」

後は言わなくても分かるだろ？

といった感じで俺は話を止めた。

それを聞いた花音は、力が抜けたように地面に座る。

「え、えへへ……。びっくり、しちやった……。な」

それは周りの人達の思いやりに気付いたのか、花音は再び涙を流してしまう。

「でも、ありがと……。っ。わ、私……。奏くんに言えたから……。奏くんに受け入れてもらえたから……」

それでも笑顔でこの場に居る人達へ感謝をする。

「っ、こころちゃん、はぐみちゃん、薫さん、美咲ちゃん——背中、押しにかけてありがとね？　そして……」

花音は俺を見る。

今までずっと一緒にいた花音の表情、色んな表情を見てきた。だから全部見た、と思っていたがそれは違ったようだ。

「奏くん——ありがとっ！　大好きだよっ！」

今までに見たこともないほどの笑顔で、花音は俺への感謝の言葉と想いを伝えたのだった。

## 第二十二話 付き合い始めて

〈奏side〉

「みんな、すぐに帰っちゃったね」

練習と片付けが終わり俺と花音は外にあるカフェに居た。他のみんなは終わると同時にそそくさと帰ったので、二人だけ残されたのだ。

「だけど俺達を思ってたの行動だろう。考えてくれた人物の顔が思い上がり、思わず笑ってしまった。」

「奏くん？」

「いや、ちよつとな……」

頼んだ飲み物を飲んで何でもないように振る舞う。

カフェには時間も時間だから俺たち以外に人は居ない、そのため静かだ。その為、少しでも音がすればそれは耳に届くわけで……。

カシヤツ。

「ん？」

近く、というか目の前でシャッターの音が聞こえた。前に居るのは花音、つまり撮ったのはこいつという事で。

飲み物をテーブルに置いて花音を見ると、慌てて携帯を下ろした。

「ご、ごめんね？ でもほら……せつかく彼氏彼女になったから、記念に撮りたいなって……」

「俺の写真なんていくらでも持つてるだろ？」

総士達や未来よりも花音は俺の写真を撮ってると思う。なのに何で今更撮る必要があるんだ？

そう言うとき花音は頭を横に振って小さな声で話す。

「じゃなくて……恋人みたいな写真が欲しいなあ、って」

……そういう事か。

つまり今までとは違う特別な写真が欲しいわけか。

それなら。と俺は席を立ち花音の横に並んだ。

「花音、携帯渡せ」



「え？ う、うん……」

クラスの女子が見せてきた写真にはこういうのがあったな。これで花音が喜ぶかは知らんが。

俺は花音を少し抱き寄せて密着する。そして携帯のカメラを内側にして「撮るぞー」とひと声掛け、シャツターを切った。

「え？ え？」

突然の行動に混乱する花音、そんな花音に写真が表示された携帯を返す。

その表示された画面を見て顔を緩ませたり、赤く染めて恥ずかしがったりと、ころころ変わる表情を見ていると楽しく感じてしまう。

「(ふむ……)」

彼女彼女か。

そう意識すると、ちよつとした事でも花音が可愛く感じるな。いや、元々可愛いがそれが倍になったような感じで……。

——カシャッ。

「ふえ？ 奏くん？」

「悪い、可愛かったから撮っちゃった」

「~~~~っ!!?!」

更に顔を赤くする、それは耳までなっていて相当照れた事が分かった。

昔なら絶対言えなかった言葉も今なら言える、それは自分達の想いを伝えあったから、そして結ばれたから。

「はは、ごめんごめん」

「もう……子供じゃないんだよ？」

まだお互いに子供だろ、というツツコミはやめておく事にした。俺は花音の頭に載せていた手を退かす。

「何かさ、俺達付き合ったんだな……」

頭では分かっているけどまだまだモヤモヤが残っているからか自然とそんな言葉が漏れた。

「今みたいなやり取りだって、似たような事はしてただろ？ 抱きしめるのは別だけど……。中学の時とかよく言われてたし」

花音は自分の飲み物をストローで混ぜながら考える。

「んん〜……、でもあの時は今みたいに真正面からは言っていなかったよ。そう考えると変わったんじゃないかな、私達の関係」

「そっか？ そっかあ〜？ 何かこう、恋人っぽい事すれば実感も湧くのかな……。ほら、恋人繋ぎとか飲み物の交換とか」

昔からの関係の延長線のように過ごしてきた俺達だからよく分からない。食べ物も俺が花音に食べさせる事だっであつたし、食べ物との交換もした。飲み物は多分ない、と思う。

「あつ！ じゃあさ——」

と、そこまで言いかけて急に止まった。

「何だ？」

「——あ。う、ううん！ 何でもないよ！」

何でもないわけがない。そこまで言ったら何かあるだろ。

というかこつちが気になる、そんな中途半端で止められたら。

「言ってみろって、何か案が思い付いたんだろ？」

「う、うう……。奏くんと……。す、だよ」

モジモジとしながら言うから上手く聞き取れない。酔？ 酔で何

をするんだよ。ダジャレか？

「もっかい言ってくれ。聞こえん」

「だ、だからあ……。すだつてばあ」

ダメだ、<sup>ズ</sup>しか聞こえねえ。

「なあ花音、大きな声で言ってくれよ。分からな——」

「だからあ……。っ、キス！ チューだよ！ ううっ……。恥ずかしい……」

俺がそう指示したから当然だが、花音が大きな声で言う。ついそれに驚いてしまい、その場に固まってしまった。

は？ キス？ キスつてあれか、昔でいう接吻か？ 確かに恋人っ

ぽい、というか恋人同士がする事だが……。

と俺は予想以上に混乱していた。

彼氏彼女になったとはいえ先程までは今まで通りの幼馴染みだったんだ、そんな子と急にキスというのはハードルが高いのではないか

？　そもそも花音の準備とかもいるだろうし……。いや、俺もだが……。

「な、何だ興味とかあるのか？」

「ふえ!?　な、無い——と言ったら嘘になっちゃうけどお……」

……そんな反応されると期待するだろ。

花音の素直さはこういう時に凶器と化す。普段から嘘をつくことが苦手な花音は、嘘をつく事になると一旦躊躇う。でも、その躊躇いは本心を表して……。――

俺はつい花音を見つめてしまう。その瞬間、花音と目が合ってしまった。

「もつと、先に進んでみるか……?　お前が良ければだけど」

自然とそんな言葉を発していた。

「(あれ?　俺、何言ってる……)」

頭でそう思っているも体は動いている。

テーブルに身を乗り出して、ほぼ無意識に花音の両肩を掴んでいた。

「わ、私は……奏くんが良ければ……」

震えていても自分の意思をハッキリと伝えてくれる。

花音はしたいのだろうか、そう考えると胸の鼓動は早くなるのが分かった。

不安よりも期待。

ほんの数センチ先には花音の顔——唇がある。息づかいも感じ取れて、こんなに接近したのは初めてなんじゃないかと思う。

「奏、くん……」

するりと腕を頭の後ろに回される、これでもう俺は逃げれない。視界には花音しか写っておらず、それしか意識はできない状態になっていた。

「花音……」

もはや引き返せないラインに立っている。ここで振りほどいて逃げたら、意気地無しなんてレベルじゃない、男かと疑われるレベルだ。

——俺は覚悟を決めて前に進む。

「好きだ——」

そう言うと同時に距離を詰めて唇を奪う。

「んっ——、ん……う」

ぎこちなくキスをする。

初めて感じる他人の唇。柔らかく、温かく……色々な感覚が流れ込む。

それよりも好きな人とうち出来る事が何よりも感じ取れて……。

「——っあ、っ……い」

「えへ、えへへっ……。奏くんと……しちやつた、ね」

ありきたりな表現だが、キスは一瞬だったが永遠にも感じれた。その言葉は本当なんだと実感した。

唇を離れた後に目の前の花音を見ると、恥ずかしそうだが嬉しそう  
な表情をしていて俺は更に恥ずかしくなってしまう。

「俺達は、付き合ってる……」

口に出すと最初のような違和感は無くなっていて、そう実感できた。花音はそれに応えるかのように、俺の手に自分の手を絡めて握ってきた。

「うん。私達は付き合ってるんだよ、奏くん」

そうだな、と短く答えて俺は今の幸せを感じた。

それは、繋がれたこの手がそれを証明しているから。

〈???  
side〉

「ん？ あれは……」

勉強会の帰り道、私はあるものを見つけて足を止めた。

「どうしたの藍？」

それはライブハウス前にあるカフェ、そこで口付けをしている男女を見つけたのだ。

別にそれが知らない男女がやっているのなら興味も示さずに流していただろう、但し二人共知り合いで仲も良い人ときたもんだ。

「ねえ、ゆり」

「ん？」

親友の名前を呼ぶと反応してくれる。

「SPACEでのライブにき——」

私は思い付いた事をゆりに話す。するとその提案に食いついてきた。

「いいわね、それ。久々に藍を見直したわ」

「なにそれー！ 見直してよー、学校は違っても生徒会長なんだよー？」

はいはい、と流されながら再び帰り道を歩く。

その帰り道は、とあるライブを開催するにあたっての作戦会議になっていた。

## 第二十三話 お互いの昼

〈奏side〉

告白して結ばれてから数日後、最初こそはからかわれたりもしたが心から祝ってくれてるのは伝わっていた。クラスの奴ら全員から言われた時は驚いたが、不思議と嫌な感じはしなかった。

そんな事があり生活も落ち着いた頃……。

『ピンポンパンポーン！ 2—B組の草薙奏くん、白羽総士くん。1—A組の九十九龍斗くんは至急、一階の食堂に来てくださーい！ 来ないなら私直々に迎えにまいりませーす！』

それは、四限目が終わりいつものように昼飯を食べようと思っていた時に起きた出来事だった。

「うわあー……家帰っていい？ いやマジで」

「ダメに決まってるだろ。諦めろ、俺も嫌だけど行くんだからさ」

周りからは羨ましがられている。それはきつと、憧れの生徒会長に呼び出されたからだろう。だがその人と関わりが深い俺達にとっては、厄介事を押し付けられるとしか思わないのだ。

昼食を片手に教室を出る。するとやはりというか、歩いていると知り合い達から今の放送について質問をされる。「どうして呼び出されたんだよ？」とか「会長のサイン貰ってきて〜！」とか、色々だ。それ程ここの生徒会長は生徒達から人気が高い。

「あ、先輩」

階段を降り一階に着いたところで龍斗と遭遇した。気だるそうに近くまで歩いてきて、一緒に食堂へ向かう事となった。

「で、何で呼ばれたんだろううな」

「って俺も知りませんよ。家では何も聞いてませんし」

「どうせ厄介事だろ」

男子三人で適当に話しながら廊下を歩く。

前も校内放送で呼び出された事があり、そのときは荷物運びの手伝い、その前は各部活への不足道具の確認ともっぱら生徒会の仕事を手

伝わされていた。

「んー……。文化祭の手伝いとかか？」

「文化祭って、四ヶ月後ですけど……。こんなに早くします？」

あるわけない事を言う総士を否定する。

そうしてる間に、俺達は食堂に着いた。

そのエリアに入るといろんな匂いが鼻に届いてきて、お腹がすいてくる。そして、俺達を呼んだ張本人が手招きをしているのが目に入った。

「やあやあ、今をときめく少年達。元気してるかい」

近付いてその人が座っているテーブルに腰を掛ける。するととてもいい笑顔で話し掛けてきた。

「呼び出しを食らわなければ元気だったな」

「総士先輩と同じだ。校内放送で呼ぶなって言っただろ？」

「だって階段面倒だし！」

上級生だけど気軽に愚痴を言う。これはこの人の位置もあるだろう。

「それで藍葉さん、どうして今日は呼んだんですか？」

この学校の生徒会長であり、俺達エタハピと関わり深いこの人は十九藍葉。春高の三年生で龍斗の姉だ。顔立ち、スタイル、運動神経、頭脳どれをとっても良くて人望もある。総士が不完全な天才なら、藍葉さんはさしずめ完成された天才というものだろう。……言動は少しあれだが。

「他ならぬ君達に頼みがあつてね。いっただきまーす♪」

「あ、飯。総士先輩は何します？ 頼んできますよ」

「おお頼むわ、じゃカレーの並で」

藍葉さんが食堂の定食を食べ始めたのを見て龍斗は注文をしに行った。それと同時に俺は珍しく持つてきていた弁当を広げる。

「お、何だそれ、未来の手作りか？」

いつもと違う俺の昼飯に総士は反応を示す。

「いや花音が作ってくれた。手間がかかるからいいって言ったんだけど……」

「ふーん……。そう言う割には顔、ニヤついてるぞ」  
「は？ な——」

総士の言葉で食べ始めようとしていた手が止まる。総士はからかうように笑いながら話を藍葉さんに振った。厄介事が広まる前に話を止めようと思ったが、先程の言葉で瞬時には動く事が出来なかった。

「そうそう先輩！ ようやくこいつですな花音と付き合ってたんですよ！」

「へえ——って何も知らなかったら言ってたね」

「あれ、知ってたんですか。奏に教えてもらってたとか？」

藍葉さんは首を横に振る。

不思議に思い俺は考える。

まず花音は誰にも言っていないはずだ、総士もこの反応からして言っていない。未来には言ってるが学校からして藍葉さんに伝えるのは難しい、九郎や莉緒も同じだ。可能性があるとすれば……。

「先輩持つてきましたー」

カレーと定食を持ってきた龍斗を俺は見る。総士からお金を受け取っている龍斗に俺は質問をした。

「なあ龍斗……お前藍葉さんに俺と花音の事言ったか？」

「話してませんけど……。もしかして、何か姉ちゃんに言われたんですか？」

龍斗が性格からして嘘をつくとは思えない、となると一体誰が教えてたんだ？

謎は深まるばかり、そこで黙って俺の様子を見ていた藍葉さんが口を開いた。

「別に私は教えてもらった訳じゃないよ、見ただけだもん」

定食に手をつけながら話し続ける。……個人的にはどっちかにしてほしい、一応女性なんだから。

「見た、って何をですか」

「ふふっ……。あんなに堂々とキスされたらね、もう見入っちゃうよ」



「はあ!？」

「おお」

藍葉さんの言葉に龍斗と総士は対象的な驚き方をする。

「っ……………でもそれは花音さんの幸せだから……………でも、でもお……………っ!」

「やるな奏! 恋人つて感じがするぜ? ああでも、ちゃんと見てみたかったなあ」

当の本人である俺は声を発せれないままでいた。

キス? 確かにあれから何回かしてるが、人の目に付くような場所ではした記憶が無い。する時は家でやるのだ、そんな外でなんてした記憶は……………。

『好きだ——』

『んっ——、ん……………う』

そこで思い出したのは告白の日の記憶。そう、あの時だけ外でキスをしていて。

「……………ま、まさかあの時……………見て……………」

藍葉さんはただ笑うだけ。それがその現場を見ていた事を何よりも証明していた。

「それでさそれでさ! 花音ちゃんの味はいかがなものでしたか、草薙さん!」

マイクを持つふりをして手を前に突き出してくる。がそんなのに反応したら向こうの思うつぼだ、なるべく平常を保って俺は弁当を食べ始める事にした。

俺が黙るのを感じ取ったのか藍葉さんは一人で喋り始める。それを総士と俺は呆れながら見ていた。

「むむう、それはさぞかし美味かったのでしょうね! 前々から思ってたけど、こう……………ふわふわしてて柔らかいもんね。上から、下まで!」

「う、上から……………下まで……………っ!？」

そこは姉弟と言うべきか、お互いに変なノリには付き合おうらしい。味わいながら騒ぐ二人を無視して総士と話しながら弁当を食べる。九十九姉弟は俺達が食べ終わるまで話を続けていたのだった。

〈花音 side〉

「あら？ 花音のお弁当……」

「千聖ちゃんも気付いた？ いつもと違うよね。どうしたの花音ちゃん？」

お昼、千聖ちゃんと彩ちゃんのご飯を食べる事になり私達の教室で弁当箱を広げている最中に起きた事だった。

「う、うん。色々あつてね……」

「なになに、何があつたの！」

何かに勘づいたのか彩ちゃんが興味を示す。別にそんなに面白くはないんだけどなあ……。

だけどその後ろで千聖ちゃんも聞き耳を立てていて話さないといけないらしい。きつと千聖ちゃんの場合は、奏くんが絡んでいるのを気付いているからだろうけど。

二人の期待の視線を受けて、私は今朝の出来事を話し始めた。

「え、えつとお……今朝、なんだけど——」

「か、奏くんっ！」

「え、花音？ どうしたんだよこんなに朝早く……、取り敢えず中に入っいいいぞ」

少し息を切らしていたのを見て驚いた表情で家の中に通してくれる。

そのまま奏くんが続いてリビングに行くと、制服姿の未来ちゃんがソファーでのんびりとしていた。

未来ちゃんは私を見るやいなやすぐに飛び起きて抱きついてくる。

私は抱きとめる、すると未来ちゃんのいい匂いが鼻に届いてきた。

「わあ〜！ お姉ちゃんだ！ おはよー！」

「おはよう未来ちゃん。今日も元気だね」

「うんっ！ 元気だよ！」

そこでここに朝早くから来た理由を思い出す。未来ちゃんと話す  
とつい本来の目的を忘れかけてしまうのは、私の悪いところだろう。

「そうだよ、奏くん！」

「……別に大声出さなくても聞こえるって。で、どうしたんだ今日は。  
学校もあるだろうに」

制服にエプロンという普段は見ない格好に少しドキツとしてしま  
いながらも、来た目的を果たす為にバックから弁当箱を取り出す。そ  
してキョトンとする奏くんの前にそれを突き出して……。

「こ、これっ……作ったんだけど、食べてくれる……かな？ 奏くんの  
料理よりは下手、だけど……」

「お、俺に……？ わざわざ作ったのか？」

赤くなる顔を隠すように下を向きながら頷く。すると弁当を受け  
取り優しく頭を撫でられた。

それだけの事が無性に嬉しく感じてしまい、ますます顔が上げられな  
くなくなってしまふ。

「そんな——いや、ありがとな花音。素直に嬉しいよ。でも……」

でも？ 何かあったのだろうか。

奏くんをゆつくりと見ると、気まずそうに頬を搔いて苦笑いをして  
いた。そして指を机の一点を指す。そこには弁当箱が何故か三つ置  
いてあった。

一つは奏くん、もう一つは未来ちゃん。それであと一つは誰のだろ  
うか？

「あー、そういうえばお兄ちゃんも作ってたもんね。お弁当」

「まさかこんな事になるとはな。完全に予想してなかった……」

二人で話を進められて少し寂しい感じがする。気になる私は奏く  
んにどういう事を聞いてみた。

「あの弁当だけど、俺らとあと一つは花音に作ったんだよな」

「え……そうなの？」

今度は私がキョトンとしてしまう。

それもそうだ。別に私達は交換する予定なんてなかったのだ、むしろ何も伝えてないのだからサプライズだったのだが。どうやら私と奏くんは同じような事を考えていたらしい。

「最初は二人の分を作ったんだ。それで時間があつたから俺のも……ってな。まあ取り敢えずは俺と花音の弁当を交換するとして、うーん一個余るなあ」

「あ、私も一個余っちゃう……どうしよう」

自分の分と奏くんの分、二個持つてきていて交換してもお互いに一個残ってしまうのだ。それでどうしようと思っていると未来ちゃんがアイデアを出してくれた。

「それならそれなら！ 私にいい案があるんだけど——」

「——つて事があつて」

と、今朝の事を話し終えた私に目を輝かせながら彩ちゃんが身を乗り出してくる。

「いいなあ、あの草薙奏くんにお弁当作ってもらえるなんて……。羨ましいよ花音ちゃん！」

奏くんと付き合い始めた時に知り合いに報告した時、一番驚いていたのは彩ちゃんだった。これは最近知った事だが、彩ちゃんはエタハピのファンだったらしく、だからそのうちの一人と私が付き合うかというのにびっくりしていた。

「奏の料理は悔しいけどそこらの女子じゃ太刀打ち出来ないくらい美味いものね。料理、家事は出来る、見た目はイケメン、改めて考えるとスペック高いわよね……」

「うん。それにね奏くんは優しいんだよ。私がお菓子作ってくれるし、ギョツとしてくれる時はね少し撥ったいけど、私を想ってくれてるのが伝わってきて——」

千聖ちゃんの言葉を受け取り奏くんについていつの間にか話して

いた。

奏くんの事を考えると胸がぼかぼかする……、それにいろんな良さをもっと知ってもらいたい。私は嬉しかった事を思い出し笑いながら二人に説明を続ける。

「面白いわ……まさか花音の口から惚気話を聞く日が来るとはね。何があるか分からないわね」

「——え？ の、惚気……？」

突然千聖ちゃんの口から出た単語にピタッと止まってしまふ。

「あら、自覚がなかったかしら。それどこからどう聞いても惚気話にしか聞こえないわよ？」

ギギギ……と音がしそうな感じでゆっくりと彩ちゃんを見ると、その通りと千聖ちゃんの言葉を肯定するように頷かれる。

「ふあ……わわっ、忘れてっ……！ 今のは冗談、冗談だからあつ！」  
自分で顔が赤くなっていくのが分かる。私は両手で顔を隠して必死に今の話を無かった事にしようとする、だが二人は意地悪にその話を掘り返してくる。

「奏に抱きしめられたのね？ それで感想は？」

「おやすみの電話っていいよねえ。少女漫画のワンシーンみたい！ さすが花音ちゃん、青春してるね！」

「もう〜！ だからやめてっばあ〜!!」

〜未来side〜

「嬉しいけど……ボクが食べていいの？ みーちゃんが貰ったんでしょ？」

昼食時間に今朝の出来事を軽く説明して、私はくーちゃんに弁当箱を渡した。受け取りはしてくれたがくーちゃんは申し訳なさそうに確認を取ってくる。

「でもお兄ちゃん達に説明もしてるから大丈夫だよ。んっ……この卵焼き美味しい〜！」

「う、うーん……。奏さんと花音さんの了承があるなら食べるけど、申し訳ない気持ちになるよ……」

今朝、お兄ちゃん達が悩んでいた時に私が出したアイデア、それは親友であるクーちゃんに二つとも食べてもらおうことだった。

『クーちゃんに食べてもらうのは？ いつもお腹すいてるし、二個くらいならすぐに食べてくれるよ!』

「うわあ……。眩しい……。これが、愛……」

弁当箱を開けて変な事を呟くみーちゃん。

「全部は食えない、かな?」

「いや食べれるよ。……。うん、美味しい、流石奏さん達だ。お兄の料理とは全然違う」

クーちゃんはゆっくりと箸をつけて口に運ぶ。

美味そうに食べる姿を見てこれと話したらお兄ちゃん喜ぶのかなあ、なんて考える。

「私も少しもらうねっ」

「言わなくても、これはみーちゃんのなんだから」

「えへへー、そかなー?」

いつもと違う弁当を二人で囲んで会話を弾ませながら、その日の昼は過ぎていった。

## 特別編

### 花音特別編 誕生日と集まるメンバー

〈花音side〉

「じゃあ、お母さん行ってくるね」

外出の準備をして玄関でお母さんに言う。

「奏くんの家？」

「そうだよ、私のお誕生日パーティーをしてくれるんだって。それもエタハピのメンバーで」

「あらみんな揃うの？ 久しぶりじゃない、楽しんできてね」

「うん！ 行つてきまゝす！」

扉を開けて奏くんの家に向かおうとする、すると家の目の前で知ってる人と出会った。

「~~~~♪ ん？ おお、かのか久しぶりだな」

「莉緒くん？」

自転車に乗ってる男の子。

名前は沙霧莉緒くん。中学からの友達で奏くんのバンドのエタハピのメンバー。

因みにエタハピとは奏くん達が組んでいたバンドの略称で正式名称は“Eternal Happiness”。

訳があつて今は解散しているけどメンバーの仲は高校に上がった今でもとてもいい。

今日はそのメンバーが揃うらしい。

「今回の主役と会うとはな。一緒に行くか、目的地は同じなんだし」  
「うんそうだね」

私達は二人で道を歩く。

その間は高校二年になって変わった事を話して……その中には当然あの事も含まれた。

「……バンド!? かのが!?!」

「あ、あはは……。やっぱり驚くよね……」

私がバンドを始めたというのを聞いてとても驚く莉緒くん。

「はあくへえく、あのかのがねく。ま、俺はいいと思うけどな。……で、あいつには言ってるのか?」

あいつ、それはきつと奏くんを指しているのだろう。

「えつと……まだ……」

もじもじとしながら言う。

「いつかは言おうと思ってるんだけど、言い出せなくて……」

「んー、そうだよなあ。言いづらいよなあ」

ドラムをやってる、なら言えるけどバンドに入ったなんてとても言えない。別にそれを嫌ってる訳では無いが……私が余計に考えてるだけなのだろう。

「ま、それはかのに言う勇氣が出来たら言えばいいさ。いつかはその日が来るんだしさ」

「うん……ありがとね莉緒くん」

「俺は何もしてないんだけどなー、昔っからよく分からないところで感謝するよなーかのは」

話しながらのんびりと歩いていたらいつの間にか奏くんの家に着いていた。莉緒くんが自転車を置いてきてインターホンを鳴らす。

「はーいー!」

家の中から元気な声が響いてくる、そして扉が開いた。

「あつー! お姉ちゃんと莉緒くん! 入って入ってく、もうみんな居るよー」

「ホントか? 邪魔するぞー」

「お邪魔します」

家に通してもらった私達はリビングへ向かう。

そしてリビングに着いたら未来ちゃんが言った通り、みんなが待っていた。

「お、来たな」

「花音さんお久しぶりです!」

「何だ、莉緒も一緒だったのか」



「久しぶり……」

奏くん、龍斗くん、総士くん、九郎くんがリビングに座っていた。私や奏くんが高校二年生になってみんな揃うのは今日が初めてだ。男子メンバーはすでに盛り上がっている。

「よお春高メンバー。久しぶりだな」

「莉緒先輩こそ久しぶりです！」

「龍斗は、相変わらず元気だね……」

「お前は相変わらず怠そうだな」

「前も聞いたけど日高にちこうで大丈夫なのかよ」

日高は莉緒くんと九郎くんが通う学校で正式名称は日里ひさと高校という男子校だ。

春高とは真反対の位置、私が通う学校の近く……とは言い難いが割と近くにある。

「大丈夫……何かあったら莉緒がどうかしてくれるから」

「どれだけ俺が苦労してると思ってたんだよ!? 矛先は俺に向くんだぞ!?!」

「九郎に苦労してる……うん、面白い……」

「面白くねえ!」

のんびりとしている九郎くんとは裏腹にいつも迷惑だと言わんばかりに怒鳴る莉緒くん。

「ま、雑談はこれくらいにして今日は花音の誕生日だ。祝おうぜ」

台所から未来ちゃんがケーキを持ってきた。そしてみんな椅子に座った後に電気を消して、ろうそくに火をつける。

誕生日お決まりの歌を歌ってもらった後に私が息を吹きかけ火を消した。

「花音、誕生日おめでとう」

「おめでとうお姉ちゃん!」

「おめでとうございませす! 花音さん!」

奏くんや未来ちゃん、龍斗くん。その他のみんなも祝ってくれた。

そして奏くんがケーキを切って、それぞれの皿に載せる。それを見んな美味しそうに食べ始めた。

「ああ、そういうえば……」

ケーキを食べ終わってジュースを飲んでいた総士くんが私に声をかけてきた。

「はい、安いけどプレゼント」

そう言つて一枚の紙を手渡される。その紙には「羽沢珈琲店サービス券」と書かれていた。

手に持つてる紙を見てみると奏くんが横から覗いていた。

「そつかお前はあそこの手伝いをしていたな」

「総士くん、つぐみちゃんと仲良いもんね」

奏くんのその言葉で思い出す。総士くんはつぐみちゃんと幼馴染みで昔からよく一緒に居る姿を見る。今は休みの日に喫茶店で一緒に働いてるのを見る事が多い。

「ん……ま、まあな」

何故か目を逸らして言う総士くん。

「私プレゼントの準備してないよ〜!」

未来ちゃんが慌てている。

「あはは……気持ちだけでも嬉しいよ」

「ん〜! じゃあ——」

納得しない様子の未来ちゃんが私の隣に突然来て……。

「んっ——」

ほっぺに柔らかい感触がする。近くには未来ちゃんの顔……少し遅れてキスをされた事に気付く。

「気持ちの表現! また今度プレゼントはやるからさ、今はこれでお願ひー!」

「ありがと未来ちゃん……でも、少し恥ずかしいかな……」

女の子同士のスキンシップでも人前だとやっぱり恥ずかしい。

「俺はお前らのやり取りは見慣れたからな」

と奏くん。

「俺らは大丈夫だが龍斗の前ではやめとけよ? いつか死ぬぞ、あれ」  
莉緒くんが指を指しながら言う。その先には鼻血を出して倒れて

いる龍斗くんがいた。

「え、え？ 私達のせい……？」

呟いたその言葉に九郎くんがティッシュを取り出しながら言ってきた。

「十中八九、その通りだね……」

「ご、ごめんね龍斗くん……」

そして龍斗くんの鼻血が止まった後はみんなでのんびりと喋っていた。

〈奏side〉

何気なく外を見るといつの間にか暗くなっていた。やっぱりこいつらといると時間が早く感じる。

「暗くなってきたしもう帰れ。俺も片付けをしたいし」  
掃除などをして夜飯も作らないといけない、そう考えると今帰ってもらった方が俺としては助かる。

同じように外を見た莉緒が席を立てて帰宅の準備を始めた。

「そうだな。おい九郎、帰るぞー」

「……引っ張って帰って」

九郎は眠たそうに言う。

どうやら夜に弱いのは相変わらずのようだ。

「自転車なんだけどなく……、それじゃ俺らは帰るわ。今日は楽しかったぜ。また今度、時間があったら呼んでくれよ」

「また今度、おやすみ……」

「(……早い) おう、じゃあな二人共」

二人がリビングから出た後に続くように龍斗が声をかけて帰ろうとする。

「んじゃ俺も帰ります。忘れてた課題あるんで」

「頑張ってね龍くん！」

「またね龍斗くん。今日は楽しかったよ」

未来と花音が龍斗に別れの挨拶をした。

「はっ、はい！ 頑張ります！ 俺も楽しかったです！ それでは！」  
失礼します、と言って扉を開けて龍斗が出た。

一瞬ガッツポーズが見えたのは気のせいだろう。

「ま、花音色々頑張れよう？ それとまた学校でな、奏」

「ああ、学校で」

総士も帰り、この場に残ったのは俺と未来、花音いつもの三人になる。

「お姉ちゃんも帰る？」

「うん、お母さんも待つてると思うし」

帰ろうとする花音に俺は声をかけた。

「……花音」

「ん？ どうしたの？」

振り返って反応してくれる。

「外、暗くて危ないし俺もお前と一緒に行くぞ。夜飯は少し我慢して  
てくれよう？」

パーカーを着て外に行く準備をする。それと未来に少し待つてお  
くように言う。

「分かったよ。時間があるならお風呂に入っておくね」

未来が二階に上がっていき、花音の準備が終わった俺らは家の外に  
出た。

「ごめんね？ わざわざ送ってもらって……」

「気にするな。俺も好きで送ってんだから」

会話をしながら暗い道を肩を並べて歩く。

俺は総士が花音にプレゼントをやった時からある事を考えていた、  
それは花音に何を贈るかだ。

考えていたらすでにパーティーは終わってしまったが……。

「花音って俺から何か貰って嬉しいのってあるか？」

時間もないので直接聞くことにした。

普通はプレゼントでこんな事しないんだけどな。

「え？ えつと……お菓子、とか？」

「ああ悪い、食べ物以外で頼む」

「うくん……」

食べ物は何回やってるから違うのがいいと思った。例えば少しでも特別な物があれば、と思う。

少し考えた花音は欲しい物を言ってくる。

「じゃあ——えいつ」

何故か手を握られた。

「家に着くまでこのままがいいな……。これが私への奏くんからのプレゼント♪」

理由は分からないが嬉しそうなので詳しい事は聞かないでおく。

「俺も何となく嬉し——というか落ち着くしな」

そのまま手を繋いで花音を家まで送った。

〈花音side〉

「じゃあな花音、また今度な」

「うんまた今度ね」

家まで送つでもらった私はお礼を言つて奏くんと別れる。

「(えへへ、あつたかかったなあ〜)」

私は家に入る前に繋いだ手を見ていた。

本当はとても恥ずかしかった、けどたまには……自分に素直になつてもいいかな？ つて思つて……。

いつか伝えたい私の気持ち。

幼馴染みの彼に伝えないとだけどそんな勇氣は私には無い。だから今のような関係が続いている。

「(少しの間だったけど今度はちゃんと、一人の女の子として奏くんの隣に……手を繋いで道を歩きたいなあ……)」

今日の出来事を思い返ししながら、私は家の扉を開けたのだった。

## はぐみ特別編 ちよつと変わった関係に

〈奏side〉

「いやいや、どこどこなの?」

美咲が車から降りて眩く、花音はその隣で苦笑い。こころ、はぐみ、薫はテンションが上がっているようだ。そして俺はというと……。

「何で俺は呼ばれたんだよ……」

呼ばれた理由を聞いていなかった。

花音から連絡があったかと思うと家の目の前にはこころの家の車が止まっており、黒服の人がインターホンを押していた。そういや、それに出た未来は慌ててたな。ま、それは置いといて、そのまま流されるように車に載せられ目的地を聞かないまま車に揺られる事数分、ドームのような場所の目の前に居るといふ謎の状況だ。

「ミッシェルがいなくて人数が合わなかったのよ! だから奏! あなたの出演よ!」

「人数? 何をするんだよ。ゲームかなんか?」

「ふっふっふ……」

雰囲気にあつてない笑い方をしてこころが答えてくれる。

「今日は野球よ! はぐみの誕生日をお祝いするの!」

え。いやそれは初耳だ。はぐみ誕生日なのか……。

それならまずは祝の言葉だ、そう思いはぐみを正面から見てお祝いの言葉を掛ける。

「誕生日おめでとうはぐみ。言ってくれば何か作ってきたのに」

「えへへ〜! その気持ちだけでも嬉しいよ〜!」

ほらほら早く! みんなを引き連れるかのようにこころと先頭を走る。

というか野球って、女子の中に男の俺が混じって大丈夫なのか? ずっとキャッチャーやつとくとかぐらいしか出来ないのでは?

いくつかの疑問が出てくる中、薫が後ろから声を掛けてくる。

「余計な心配をしているようだね」

「余計……いや、楽しむためには力は釣り合った方がいいだろ。いくらのはぐみが野球かソフトボールかやってても高校の男子と女子じゃ元々の力が違うわけだし」

「優しいね奏は。でもはぐみもこころも力が釣り合うどうのこののじゃなくて、はぐみが——みんなが楽しむためには君も居た方がいいと思っただから呼んだんだと思うよ」

みんなが楽しめるため、か……。そっか、そういうバンドだもんなハロハピは。

「草薙先輩。あたしと花音さんも先に行きますね」

「中で待つてるね、奏くん」

美咲も何だかんだ車の中で言ってたが結局ははぐみ達に着いていく。その背中が自動ドアを通った所で薫が歩き始めた。

「さて私達も行こうか。主役と子猫ちゃん達のお待ちかねだ」

いつも変な事ばかり言うが、ちゃんとあいつらを理解してるんだな。

真面目に話してくれた薫は男の俺から見てもかっこよく映っていた。そりゃ女子から人気も出るわけだ。逆にいつもそうだったら嬉しんだが……。そうしたら薫じゃなくなるか。

「そうだな、待たせるのも悪いしな」

くはぐみ side く

みんなとの野球が終わって今はこころんの家のお風呂を借りて汗を流している。みんなと入るお風呂は新鮮でちよつと楽しかったり……。

「今日はどうだったかしらはぐみ？」

「うん！ とっても楽しかったよ！ それにしても黒服の人達凄いいね、運動神経抜群だよ」

かなくん先輩が来て三体三だったが広いドームでは人数が少なすぎた。そこでこころんが黒服の人達を呼んでみんなで野球をやった

のだ。

はぐみの言葉にみーくんが反応する。

「あの人達、足速すぎでしょ。テレビとか出てるんじゃない？ ほら逃げるやつ」

「あつという間に点数入ってたもんね……」

「でもみーくんも足速かったよね？」

思い出してみるとみーくんも速かった。はぐみ達のチームに入れば上の方にいけそうなくらいだ。

「あたしはテニスとかで走ってるからね。でもころほどではないけど」

「確かにこころは速かったね。まるで駆け抜ける馬のように……」

「あら、嬉しいわ！ 薫もなかなかだったわよ！」

「ふふっ。こんなにも美しい人に認められると嬉しいね」

走りの話題で盛り上がる中かのちゃん先輩が話に参加せずにお湯に深く浸かっていた。そこに近寄って後ろからはぐみは抱きついた。

「かのちゃん先輩！」

「きゃっ!? は、はぐみちゃん!？」

「わー！ 肌すべすべく、プニプニで気持ち〜！」

「んっ……はぐみちゃん——っ！」

手を動かすとっ、と滑っていく。

暫く綺麗な肌を堪能したところで手を動かすのを止めて話の話題に入る。

「かのちゃん先輩元気ないけどどうしたの？」

「うう……。私だけ今日の野球で活躍できなかったから、ほら足も遅いし……」

今日あまり活躍しなかったから落ち込んでいるのだろうか？

「うーん……でも楽しそうだったよ？」

試合してる時のかのちゃん先輩は笑顔だった。例えばフライのボールを取った時だ、ジャンプして喜んでいた。

「た、楽しかったよ？ でもチームに貢献が出来てないから……」

「かのん！」



バシヤバシヤとお湯をかき分けてさつきはぐみがしたようにころんがかのちゃん先輩に抱きついた。はぐみも背中に抱きついたままだから少し横にずれてこころんは抱きつく。

「ひゃあ!? こころちゃんも!?!」

「はぐみやみんなが楽しめるために野球をしたのよ? 貢献よりも楽しむのが目的なんだから! 花音が楽しめたらそれでいいのよ?」

「力が釣り合うとか貢献とか、奏と花音はみんなを優先して考えてくれるあたりが似てるね」

薫くんとその後からみーくんが近付いてくる。

「奏くん?」

「ああ、ドームに来た時にね。その時に私から言ったんだみんなが楽しむために君が必要、とね」

薫くんの言葉をみーくんが繋ぐ。

「ま、考えるだけ疲れるって事です。それよりも二人共、花音さん嫌がってるから離れて」

「そうなのかな……?」

みーくんの言葉に微妙に納得したようだ。

「いやよ! 花音の肌気持ちいいのよ? 美咲も触ってみて!」

「えっ!? あ、あたしはいいよ……」

「じゃあ薫!」

「そうなのかい? それじゃあ失礼しようかな」

「か、薫さん? じよ、冗談だよね……?」

「ふふ、どうかな」

やっぱりみんなでのお風呂はいつもと違って楽しい! もうちよつと楽しみたかったけど、かのちゃん先輩がのぼせちゃったからみんなで上がって団扇で風を送ってた。

〈奏side〉

花音がのぼせたと聞いて心配でこころの部屋に来たけど、扉の目の

前ではぐみと会った。

「あつ！　かなくん先輩！」

「おう、はぐみ。花音は大丈夫か？」

「だいぶ落ち着いてきたよ、今はゆっくりしてる」

それなら邪魔はしない方がいいな。様子を聞いたし帰ろうかと後ろを向くと、はぐみに呼び止められた。

「ねーねーかなくん先輩！　たまにははぐみと話そー？」

意外だった。こんな事を言われるなんて。

「別にいいけど、それじゃあ外に行くか？」

「うんっ！」

手を引つ張られて外に向かう。突然の行動にちよつと戸惑ったがその戸惑いは徐々に消えていった。

「(着いたのはいいが、それで何を話そうか)」

俺とはぐみは共通の話題が少ない。だから普段話そうとしても話しくいのだ。

考えてるとはぐみから口を開く。

「えつとね……今日はありがとう！」

いきなりお礼を言われる。

「何のお礼だよ、今日何もしてねえよ」

俺とはぐみはチームも違ったし、こいつを助けるような事はしていない。お礼を言われても心当たりなんて思い出せない。

「ううん。今日来てくれてありがとう！　かなくん先輩が居てくれたからみんな笑顔になれたと思うんだー！」

その言葉は薫にドームに着いた時に言われた言葉だった。

「かなくん先輩居てのハロハピだからね！　……ミッシェルが来てくれなかったのは少し悲しいけど」

その言葉に内心「ああ、そつかこいつもそうだった」とガツカリしてしまう。

俺は「ミッシェルは置いて」と話し始める。

「そう言ってもらえると途中参加の俺としては嬉しいな。ありがとう、はぐみ」

ほんぽんと自然に手が頭を軽く叩いていた。なんかこいつと居ると未来と居るように思えるんだよな。あまり二人きりつて事がなかったから気付かなかったけど。

「えへへっ……。擦ったいね、こういうの」

「あつ、悪い。つい未来と同じようにしてしまつて」

俺は手を離して心の中で反省をする。だけど次のはぐみの言葉に俺は驚く事になる。

「未来ちゃん？ うーくん……。それなら『お兄ちゃん』って呼ばないよね」

いつものように笑いながら言ってくるはぐみ。意外すぎる行動にドキツとなる。

「……やめろ。誤解されたらどうすんだ」

「う、うん……。はぐみも想像以上に恥ずかしかったよ……」

俺らの間に微妙な雰囲気生まれる。

それをどうにかしようと思つて無理やり話題を作つた。無理やりだからそこには俺が普段思つてる事が入つていて。

「ああ……。たまにだけどき、花音が迷子になつてる時に助けてくれてありがとな」

「あはは、かのちゃん先輩よく見かけるんだー、だからついでだよ」

「それでもだ。ありがと、俺からも礼を言つとく」

花音の事をつい話に出してしまつたが言おうとしてたのは他にあり。次はそれを言う事にする。

「それとさ」

「？」

話が終わったと思つたのかぼーつとしてたはぐみがこちらを見る。

「こころがみんなを笑顔にするけど、はぐみは俺ら——ハロハピを笑顔にしてるんだよな。だからありがと、つて。みんな普段言わないけどそう思つてるぜ。もちろん俺を含めてな」

「な、何だろう。言われ慣れてないから照れくさいね……。でも——」  
頬を少し掻きながら顔を仄かに赤くする。そんなに反応をされる  
とは思ってもなくこちらも恥ずかしくなってしまう。

その時、上からこころの声が響いてくる。

「はぐみ——！ かなで——！ 花音も起きたしご飯食べるわよ——！」

「うん——！ 今行く——！」

大きな声で返事を返すはぐみ。その後に俺を真正面から見てさっ  
きの続きを言う。

「でも——ありがとう！ かなお兄くんちゃん先輩！」

「それじゃご飯だよ！ 行こ！」と再び手を引っ張られる。

こりや世話の焼ける妹が増えたな。だけどその時の俺は少し笑っ  
てたんだろうと思う。

その後、声が聞こえてたらしく食事中にこころや花音から質問攻  
めをされたのは別の話。

## こころ特別編 幸せなひと時を

〈奏side〉

八月七日、その夜。花音から電話が掛かってきた。

「——デート?」

『うん、いいかな?』

内容は明日こころとデートをするとの事だった。理由を聞くとうやら明日はこころの誕生日らしく花音が何かをしてあげたいと考えた結果、それに至ったという。

「でもいいのか?」

『私はいいよ。こころちゃんには色々と助けられてるし……こころちゃんのおかげで奏くんとも、こういう関係になれたんだから』

そう、俺と花音は晴れて付き合うことになった。俺らが付き合うと聞いたハロハピのメンバーや千聖達が祝ってくれた。……その時はこころには辛い思いをさせてしまったけど、笑顔で“おめでとう”と言ってくれたのは今でも思い出せる。

「そうか。俺はお前がいいのなら別にいいけどな……。こころに予定は伝えてあるのか?」

『まだだよ。奏くんが言ってあげて』

「了解。それじゃ、またな花音。おやすみ」

『うん、おやすみ。明日の奏くんはこころちゃんの“彼氏”だからね』  
そう言われて通話を切られる。こころの彼氏か。ま、いつも通りにすればいいか。

思いながら次はこころに電話をする。この時間ならまだ起きてるはずだが……。

『もしもし? 奏?』

どうやら起きていたようだ。

「おう、ちよつと話したい事があるんだがいいか?」

『ええいいわよ! 奏との話しならいつまでも!』  
いつまでもは勘弁だな。

苦笑いをして話の内容——先程の話をする。

「はは。まあ話の内容は明日一緒にどこか行こうぜ、って話だ。俺とお前の二人でな」

『——っ。い、いいの?』

さつきと雰囲気が変わり声が弱くなった。

それもそうか。俺は花音と付き合ってる、そしてこころを振ったんだ戸惑うのも当然だろう。

「ああ、花音と話をして向こうが決めたんだ。俺は明日はお前の「彼氏」だ」

それは遠まわしに叶う事の出来なかったこころの未来を示している。

『~~~~っ!!』

「お、おい……どうした?」

『嬉しいわ! それじゃあ明日、あたしは奏の「彼女」になれるのね!』

心配になつて聞くと、とても元気にそう言った。

「そ、そうだな」

本当に嬉しそうに言うこころに電話越しなのにたじろいでしまう。

『ふふっ、今日は寝れないわ!』

「いやいや。ちゃんと寝てくれよ」

『冗談よ、それじゃあ明日を楽しみにして寝るわ! おやすみなさい奏!』

お前が言うとは何でもかんでも冗談じゃなくて本当になる事が多いんだから困るんだよ。はぐみのドームの件とか分かりやすい例だ。

「おやすみこころ」

こころとおやすみの言葉を交わして通話を切る。

そして俺は明日の予定を組み立てる。こころが何を喜ぶか、プレゼントは何にしようかとか。

そう考えているうちに俺の意識は落ちていった。

くころsideく

自分の心臓がドキドキと音を立ててるのが分かる。その原因はさっきの奏との会話……。

『明日はお前の“彼氏”だ』

奏が言った言葉を思い出して、ベッドの上で枕を抱き抱えてゴロゴロと転がる。

嬉しかった。例えそれが一日だけの幻想でも、二十四時間の夢でもあたしの想いが叶うのならば……。

「こんなにも嬉しい事はないわ！ 明日は頑張るわよー！」

大きな声で叫ぶ。この気持ちの高ぶりをどうにか収めたかったから、そうでもしないと奏を考えて寝れないから。

「ふふっ、楽しみなね。こんなに楽しみなのは久々だわ！」

く奏sideく

「(そろそろ待ち合わせの時間か)」

時間は昼を少し過ぎた頃。

待たせるわけにはいかないから用事を済ませて、先に待ち合わせ先のショッピングモール前に俺は居た。時間を見て周りを見渡すがこのころの姿は見えなかった。

どうしてだろうか、自分の心が少し高ぶっているように思える、それと同時に不安も感じた。俺はこころを笑顔に出来るのだろうか？ 退屈させたりしないだろうか？

「(そもそもこころって何が好きなんだ?)」

よくよく考えれば問題はそこだ。笑顔とかか？ 楽しいものといっても、何が楽しいと感じるのかを詳しくは知らない。

と、考えているその時だった。

「かーなでー！」

突然名前を呼ばれてそちらを見ると私服姿のこころが立っていた。

「おう、おはようごころ。今日も元気だな」

「ええ！ あたしはいつでも元気よ！」

それじゃあ早速行きましょう！ と言われて手を繋がれる。自然な行動に一瞬驚いたが俺は思い出す。今日一日は違うんだ、と。

それに応えなくてはな。ごころの「彼氏」として――。

「行こうぜごころ。今日を楽しむためにな」

「そうね！ 楽しみましょう！」

ごころに手を引かれたまま俺らはショッピングモールに入っ  
ていった。

「どこに行こうかしら？」

「俺はお前が行きたい場所でもいいぞ」

そもそも決めてないし。滅多にショッピングモールに来ない俺としてはどこに何があるのかを知らないから、それ以前の問題だろう。

「うーん……そうねえ」

ぐるつと見渡してごころはどこに行くかを考える。うーんと唸っている。「あ！」と何かを見つけたような声を上げる。

「洋服屋さんに行きましょう！」

洋服屋？ へえ、服に興味あるのか。でも女の子だから普通なのか？

割と意外すぎる場所に驚きつつごころに付いて行った。

洋服屋に着いてすぐさまごころは服を何着か持って試着室に入っ  
ていった。どうやら俺に見てほしいものがあるらしいが……。何な  
のか検討もつかない。

「見て奏！」



そしてシャツ！ とカーテンが開きところが背中から声を掛ける。後ろを振り向くと、そこには――。

「……おお」

思わずそんな言葉しか出なかった。

今のこのころの格好は水着だ。白がメインで所々に水色が入っている。とても綺麗な白い肌に美しく揺れる金色の髪、スタイルもよく水着とうまくマッチしていると思う。

「ど、どうかしら……？」

もじもじとしながら上目遣いで聞いてくる。何とも言えない感情に囚われながらも俺は思った事を素直に言った。

「可愛いよこのころ、似合ってる」

「え、えへへ……そう？」

くるっ、とその場で回転して後ろ側も見せてくる。

……本人には言わないけど一健全な男子高校生としては、目がその……なんだろう。女の子の部分に行っちゃうわけで……意外とこころって“ある”から、回転すると動いちゃうわけで――。

「奏が気に入ってくれたらこれを買おうわ！ 次はね――」

純粋なこのころはそんな俺のやましい感情には気付かない。

そうやって洋服屋での時間は過ぎていった。

俺が似合ってると言った服を全部買ってそれを店のロッカーに入れる。それが済むや否や、次に行く場所を提案してきた。

「奏はお昼ご飯は食べてきたかしら？」

「いや、まだだな」

昼からになった理由は俺の予定があったからだ。

それは部活中の未来に弁当を届ける事。急いで出たせいで家に忘れていったから学校に俺が持っていた訳だ。ついでに作り直して持っていたから自分の飯は食べていない事になる。

「私もまだなのよ。それなら次はあそこね！」

指を指した先はフードコートだった。すぐそこにあつたので歩い

ていき適当に席に着く。

さて、何を食べようか。

俺はざっと注文一覧を見て決める。どうやらここもすぐに決まったようだ。

「んー、ハンバーガーとフライドポテトかしら。飲み物は、んーカルピスかしらね」

「奇遇だな、俺も飲み物以外は同じだ。じゃ注文してくるからな」  
席を立ちカウンターへ向かおうとするとここに止められる。

「あ、待って！ お金渡さないと……」

「いいって。俺はお前の彼氏なんだからそれくらい奢らせろ」

適当にカツコつけて言ったのはいいが想像以上に恥ずかしくなり、その場から離脱するようにカウンターへ逃げた。

やっぱ俺、こういうセリフ似合わねえ。とつくづく思わされる。

「ハンバーガーとフライドポテトを二つづつ、それとジュースをカルピスとフアントで」

「店内でお召し上がりですか？」

「はい」

注文をしてカウンター近くで待つ。その間にここをチラツと見ると両足をパタパタさせながら何かを考えていた。

「(楽しそうだな……)」

あんなふうに居られると一緒に居るこっちとしては嬉しい限りだ。

店員が持ってきたハンバーガーなどを席に持っていく。

「おまち、っと」

席につくや否や俺は飲み物を飲む。ここに入ってから何も飲んでいなかったから喉が潤されていく。

「奏は何を頼んだの？」

ストローに口をつけながらこころが聞いてくる。

「フアントだな」

飲みながら答えていると、次のここの言葉でむせてしまった。

「一口飲んでもいいかしら？ あたしのもあげるわ！」

「ごほっ！ ごほっ!!」

待て、というふうに片手を前に出す。それは自分に落ち着けと言つてるようにも思えた。

それは、あれだろ関節キスになるだろ、……でも一日彼氏だから別にいいのか？

そんなこんな考えてるうちにこころが俺の飲み物を飲んでしまう。「美味しいわね！」と言ってるこころを見ると余計な考えは吹き飛んでいく。

「(はあ、成るように成れだな)」

乗つかるようこころのカルピスを飲む。味はいつもよりも少し甘く感じた。

「ふふっ、不思議ね。夢みたいだわ……奏とこんな事を出来るなんて」ふとそんな言葉を漏らした。

「——そうだな」

自分の好意を捨てた相手とこうして親しく、偽りのとはいえデートをしている。不思議以外に表現は出来ないだろう。

「こころは、幸せか？俺とこうしていて」

「そんなの決まってるじゃない」

こころはとても笑顔で言った。

「あたしはとつても幸せよ！奏のおかげでね！」

「そっか……」

目の前の幸せを受け入れる、それはこころの強さでもあり優しさでもあるのだろう。

そんな俺が何を考えてるの知らずにハンバーガーに美味しそうにかぶりつくこころ。心の器の大きさをつくづく感じさせられてしまう。

「俺も幸せ者だな」

「そりやそうよ！あたしの彼氏なんだからね！」

大きな声で言うから周りから「このリア充め……」といった視線を浴びせられる。が、こころが幸せならそれくらいは目を瞑ろう。

これでこころが笑顔になるのなら安いものだ。

やる事をやり終えてシヨツピングモールから出る。そうして俺らはこころの家の車を待つ。話の流れからどうやら俺も乗せていってくれるみたいだ。

「今日はありがとうね奏！ とつても楽しかったわ！」

笑顔で言うこころに俺はちよつと言り返す。

「何言ってるんだ？」

「え？」

その反応が予想外だったのだろう、素つ頓狂な声をあげる。

「まだ——」

そう言いながらこころの手を握る。

「今日は終わってないぜ」  
デート

「——あ」

家に帰るまでが遠足みたいなノリで言ってしまう。だが、事実そんな感じがする。

俺とこころのデートはまだ続いている。家に着くまでの時間はまだデートなんだ。

「もう少しの時間、話そうか」

顔を赤くしてるこころに語り続ける。……主にハロハピの事だが。

そう話しているとこころがちよいちよいと俺に耳を貸すような指示をしてきた。

「？」

ちよつとしやがんで耳を近づけると、周りをきよろきよると見てからこころは耳に顔を近づけた。

「奏……。やっぱりあたし——」

声が聞こえた後に、頬に不思議な感覚を感じる。

「あなたの事、好き。世界で一番好きよ」

その感触が何かと気付くのはこころが顔を話して笑顔で微笑んでる姿を見た後だった。

頬へのキスは確か——親愛デートだったな。

そう思いながらこころと今日の残り僅かな時間を楽しんだ。

## コラボ 夕焼けに誓う幼馴染達

〈奏side〉

「賑わってるなあ……」

「う、うん……凄い、ね」

数日前に総士から聞いたとある学園祭の話。それに俺達は足を運んでいた。その学園祭というのは羽丘学園の学園祭……そう、蘭達が通う高校の文化祭だ。

学園の敷地に入って第一に思った事は賑わいだ。俺も花音も正直ここまでとは思ってなかったのだ。

「いらっしやいませー！ ポップコーンいかがですかー！」

「たこ焼きいかがですかー！ 美味いですよー！」

少し進み広場に出ると、色々な屋台が建てられておりそこから様々な声が飛び交っていた。売上のために他クラスと競い合い、それでも笑顔で楽しんでるのが見て分かった。

とりあえず……と店を見渡しているとき、と服を引っ張られる感覚がしたのでそちらを見る。すると、花音が服の裾を小さく握っていた。

「ど、どこに行こうか……？」

オドオドと今にも周りの雰囲気飲み込まれそうな花音を安心させる為に、服を握っていた手を自分の手で絡めとる。

「ふあ!? か、奏くん!？」

「そうだな、どこに行こうか。久々のデートなんだからしっかり考えないとな」

突然の俺の行動に戸惑いを見せるが、だけど嫌がりはずに顔を赤く染めながらも強く握り返してくれた。ただそれだけの事が嬉しく、愛しく感じてしまい、つい顔が緩んでしまうのが分かった。

「……ふふっ。えいっ！」

少し安心してくれたのか笑いながら俺の腕に抱きついてきた。

俺個人としては嬉しいが、すれ違う生徒達からの視線が痛い。言い

方はあれだが呪詛のような言葉すら聞こえてくる。

苦笑いになりながらもその場から少し移動すると、花音が顔を覗かせてきた。

「あ、えつと……。迷惑、だったかな？ ごめんね一人だけテンション上がっちゃって……」

「いや、急で驚いただけだ。もう大丈夫だから行くか。ああ、手離すなよ？ すぐに迷子になるんだから」

「は、離さないよ！ 奏くんの手だから……——あつ！ えつと今は違くて！ はうう……！」

「お、おう……」

恥ずかしいけどやはりそれ以上に嬉しい。そんな事を思いながらその日の行動を開始した。

〈莉緒side〉

「へい、いらつしやい。何食べる？ 焼きおにぎりとかオススメだよ」

「……何やってんだ、お前」

一緒に来たはずの九郎とはぐれたので校内中を探し回っていた俺。そんな時、聞き慣れた声が聞こえた方を見ると、そいつはいた。

「何って……手伝いだよ。知り合いがいたからね」

そうやって横に視線を向けるとその横にいた男子生徒はペコリと頭を下げた。

こいつ他校に知り合いいたのか、奏達とか以外に。と少々驚きながらも九郎を引きずり出す。少し抵抗してくるが、いつもは力が弱いためそれは意味も無く俺は九郎を確保する事が出来た。

「とうか早く合流しないといけねえだろ。お前のせいで随分ロスしたんだからな」

「あははー。こんにちはー」

「聞いてんのかよ」

何故が周りの生徒達からキヤーキヤー言われるのに反応して手を

振っている。

十二時に合流する予定だった俺達は一時間も遅れてしまっていた。既に奏達は待ち合わせのベンチにいるらしく、現在そこに向かっている最中だ。携帯でやり取りをしているからこちらの状況は把握してくれているのだが……、やはり申し訳なく感じる。

「そーいえば、ここには雄天がいるんだっけ。会えるかなー？」  
「あーそうだったな。案外と会えるんじゃないか？」

早足で歩きながら引きずられる形の九郎がふと言った。

雄天というのは俺達の後輩に当たる人物だ。龍斗とは同学年で俺達からすると一個下、エタハピメンバーとは中学時代に関わりがあり、仲は普通にいい。

この学校ということは文化祭に参加はしてるんだろう。まあ歩いてるうちに屋台は見付けられるから、今探す必要は無いが。

「雄天の事は奏達と合流してからだな」

こっちはこっちで色々——。と、考えている時だった。

「んー……そっかー。じゃ行こっか。よーい、どん」

「は？ あ、おい!! クソ野郎！ 待て！」

何を思ったのか唐突に走り出した。

引きこもりのくせに総士、奏に次いで足が速い九郎はみるみる人混みに消えていく。

「っ。その速さを普段から使えよっ！」

その後を愚痴をこぼしながらも、俺は追いかけるのだった。

く奏sideく

「あ、奏くん、莉緒くん達来たよ」

「やつとか……ん？」

一緒にベンチに座っていた花音が、人混みをかき分けて進んでくる二人組を見付けて俺に知らせてくれる。そちらを見るととても意外な光景が広がっていた。



「ふふん♪ 莉緒遅いよ、ちゃんと運動してる？」

「っ……！ はあ、っ！ くそっ……はあっ、はあ……！」

飄々と莉緒に話す九郎と息を切らしている莉緒。見た感じ走ってきたのだろうが、競走でもしたのか莉緒は悔しがっていた。

「え、えつと水……飲む？」

それを見た花音は莉緒と九郎、二人にお茶の注がれた紙コップを手渡した。二人ともグイッと飲み干して、莉緒は地面に座り込んだ。

「さて……屋台を回ろうか。昼ご飯探しだよ」

そんな莉緒とは真逆に、どこか満足げに次の行動を提案する九郎。

確かに昼飯の為に集まったのだが、莉緒がこれじゃあ動くに動けないと思うが……。

と、そこで花音が手を挙げた。

「えつとお……莉緒くん疲れてそうだし、私が買つてこよっか？」

「い、いや……かのが行くまでも、自分で行くから……」

莉緒がゆつくりと立ち上がったところで九郎は冗談げに言うが。

「じゃ全員で行こっかー。そだねー……莉緒は総士が抱えろとしてー」

「やだね。行くぞ龍斗」

「え、あ、はい。なんか、すいません先輩！」

即答、と謝つて後に続く龍斗。九郎は二人を追うようについていき、ベンチ前に残されたのは俺と花音、莉緒になった。

当然、見捨てるわけにもいかず莉緒のペースで歩いて先の三人に追い付こうとする。

「……なんかさー」

「どうした？」

ふらーつと歩きながら莉緒が話しかけてくる。

「奏とかのつて付き合ってたんだよな？」

「付き合ってるけど、それが？」

「いや……あんまり変わってないなー、って」

変わらないというのは俺達の雰囲気らしい。自分達だと結構変化しているが、周りから見るとそうでもなく昔……つまり付

き合ってなかった時と大差ないと言われる。

「そ、そうかなあ？」

「変わってないって……。手とか繋いでるだろ」

そう言っただけ俺は結ばれた手に視線を落とす。これだけでも十分な変化だと思う。

「え？ 昔から繋いでただらる？」

「……繋いでたか？」

「さ、さあ？」

「はあーっ。無意識のうちにかよ、相変わらず付き合っただけねえな」

二人揃って疑問符を浮かべる俺らに呆れる莉緒。そんなやり取りをしながら歩くと先に行った三人がある屋台で止まり楽しそうに話をしているのが目に入った。何故か人だかりも出来ていて、それを避けながら屋台の前にたどり着く。

「何だ、ここで買うのか？」

「わあ……いい匂い」

花音の言う通り、とてもいい匂いがする。ちよつと離れた場所からも匂ってたがここのやつだったのか。

ちよつと気を取られクレープを眺めていると店の人から声を……。名前を呼ばれる。だけどその声には聞き覚えがあつて――。

「か、奏さん!! 本当に来てたんですね！」

「？ あ、雄天……だよな？ 久しぶり」

話しかけてきたのは滝河 雄天。

昔エタハピとして活動していた時によく見かけた人物の一人だ。

「どうぞっ！ クレープになります！」

「おう、さんきゅーなひまり」

久々の再開に浸っていると総士が屋台に居たひまりからクレープを何個か受け取って九郎達に渡していた。種類は色々、イチゴやらチョコやら……。割と豊富だ。

そのクレープを食べながら九郎は俺達から背を向けて歩き出す。

「……奏。僕達は向こうのベンチに居るから、雄天と話し終えたら来てね」

「あまり時間はかけるなよ。俺らは辞めたとはいえここの地域だと認知度はまだあるんだ、くれぐれも余計な事は避けてきてくれ」

龍斗と総士もそれに続く。その前に耳元で総士が何かを言ってきた。最初こそ訳が分からなかったが、その意味は自然と分かる事になった。

「ふえっ……っ？」

「おわっ!？」

屋台を中心に何人もの生徒が集まってきたのだ。男子、女子とどちらもまだ。そのせいで俺達は位置が離れてしまう。

「あはは……。流石奏さん、今でも人気はあるんですね……」

「ゆ、雄天も人気だよっ!!」

変なところで張り合おうとするな、こちらは混乱してんのに……。ざわざわと声があるので少し聞き耳を立ててみる。

「あれってエタハピの——」「すげえ! 草薙奏じゃん! 他校だから見れる機会ないんだよなあ」「あっちは莉緒くんじゃない?」「高校生……だよな? すっごいかっこいい……!」

「(うわあ、何だこれ。こういうのは春高だけでいいのに……)」

別の高校で騒がれるなんて思ってもなかった。恐らくあいつらはこれに気付いてて場を離れたのか?

店の迷惑になるのも嫌だから俺も二人を連れてこの場を立ち去ろうとする。

……が、そう簡単に事は進まなかった。

「は、ハロハピの松原さん……ですよね?」

「えっ? は、はい……」

「あ、握手! してもらってもいいですか!？」

「え、ええ……っ? いいです、よ?」

人混みを掻き分け花音の元に向かう。莉緒も俺同様、花音の元に向かってるようだ。その花音はこの高校の生徒と握手をしていた。話の内容は聞こえない、いや、別に握手だけならいいのだ。

花音とその男子生徒は握手を終え、向かい合う。

「あつ、と。ら、ライブ見てくれてるんですか……っ?」

「は、はいっ！ とても楽しいですよね！ 元気、貰ってます！」  
「そうなんだ……っ。えへへっ、それを聞くとこころちゃん、喜ぶと思います」

ふにや、と表情を緩めている。何か嬉しい事を言われたのだろう。  
……俺と花音、付き合い初めて分かった事だがあいつは自分の評価が低い。俺が思ってた以上に低く自分を見ている。それ故にたまに男から声をかけられる事があるそうだ（千聖談）

「俺は弦巻さんよりも……松原さんに喜んで貰いたいです！」

「え——。わ、私も嬉しいですよ？」

「いえ、その——ああっ！ なるようになれ、だ！ ……単刀直入に言います!!」

ガバツ！ と姿勢を正して目を丸くする花音に何かを伝えようとする。その瞬間、俺はあと数歩を一気に詰めた。

「松原さん！ もしよろしければ俺と——」

「——『付き合う』のは不可能な願いだな、残念ながら」

花音の前に腕を回し自分に寄せて男の言葉を受け取り、遮る。

「あれ、奏くん……？」

「全く……。悪いなお前、こいつ俺の彼女だから」

行くぞ、と小声で伝えその場を急いで離れる。

俺の発言からか周りが凍ったように静かになる。その隙に莉緒も人混みから抜け出して総士が居るであろう場所に向かった。

「おお、やるう流石リーダー」

「リーダーは総士だ、変な事言うな」

その後、背後の人物達がうるさくなつたのは言うまでもない。

近くにあつたベンチには総士達が座っていた。

「随分遅かったですね、何かありました？」

「花音がナンパされた」

「うう……」

クレープを食べていたみんなに簡潔に説明をすると花音が顔を赤

らめてしまう。移動しながら話すとやはりそんな感じはしていなかったらしい。人に慣れ始めたのはいい事だが、こういう所は女なんだから注意はしてほしいものだ。

「か、花音さんがナンパあ!？」

どこのどいつですかそんな不屈き者は、と騒ぎ始める龍斗。それに対し総士は驚いた表情、九郎は興味を持ったように聞き始めた。

「花音は可愛いから……」

「だな。でもナンパって本当にあるんだな、すげえ勇気の持ち主だぞそいつ」

「く、九郎くん……サラツとそんな事言わないで、照れちゃうよお……」

「一旦落ち着け。それに無事だったんだからいいだろ」

「えへへ……奏くんのおかげだよ」

この場を流そうと思って言った言葉だったが別の意味で捉えられてしまったようだ。笑顔でお礼を言われるとなんか……気恥しい。

「お、おう」

と、そこに俺たちの誰でもない声が割り込んでくる。

「——それ、やってて恥ずかしくないの」

「平常運転ですな。これは司会のマー君もビックリですな」

「正直あの奥手な二人がこうなるなんて思ってたですな」

「!?!」

俺らの誰でもない声で我に返り驚く。

俺達の後ろには蘭、モカ、雄天が立っていた。それもとても妙な笑みを浮かべながら。

「それにしても驚いた。あの奏が、あの奏がこうなるなんてね」

「……どういう意味だよ」

やたらと「あの」を強調してくる蘭。俺がなんだってんだ。

「分かる」

「ほら九郎さんも言ってる」

いやもう、なんなんだよこいつら……。

「というか、モカと雄天。変な茶番するなよ」

「あはは、すいません。あ……でも、本当におめでとうございます。なんて言うか……とてもとても幸せそうで……」

「ま、お前らほどじゃないけどな」

雄天とひまり、この2人は付き合っていてそれは見ててこっちが恥ずかしくなるくらいのイチヤイチャっぷりを見せてくれる。

本人達はそれに関してどう思ってるのかは知らないが……。

と、話していると更に後ろから誰かが走ってきた。そして。

「雄天〜！」

「おわっ!? ひ、ひまり……!?!」

雄天が体勢を崩す。その正体はひまり、今の話のメインを飾った人物だった。

「ユウを見るや否や飛び付くのかよ……」

「誰がいても平常運転、だね……」

少し遅れて巴とつぐみもやってくる。

「……いやあ改めて思うけど、このメンバーが揃うって珍しいよな」

巴は俺達を眺めながらそう言った。その言葉にはこの場にいた誰もが同意するはずだ。

個別に会う事はあってもあの頃のように全員で揃うなんてのは少ないだろう。俺自身こんな日が高校であるなんて思ってもなかったんだ、他の奴らもそうだと思う。

「マー君と草薙さんは立派な男に……。これは次は総士の番ですかな〜」

「なんでだよ……。それを言うなら莉緒が——」

「ええ俺に振るのか？ じゃあ九郎、パス」

「……龍斗」

「任せてください先輩！ こほん。つぐみが総士先輩に告——」

「わあああああ?!?!」

……多分思ってる、のだろう。なんか盛り上がってるけど。

「ふふっ、賑やかだね」

「だな。いつも以上に楽しいよ」

総士達のやり取りを眺めてると雄天とひまりがある提案をしてき

た。

「あ、そうだ！ 奏さん、一緒に屋台とか回りませんか？ もしも時間があるならですけど」

「うんうん！ 花音さんも一緒に行きましょう！」

その誘いに悩むまでもなく俺と花音は返事をする。

「うんっ！ 行くよ！」

「おう。おーい！ 俺達移動するけどお前らはどうするんだー！」

席を立ちまだ騒いでる数名に声を掛ける。しかし先程よりも盛り上がってるらしく聞こえてないらしい。

「……はあ、仕方ないな。雄天、花音少し待っててくれ少しアレどうにかしてくる」

「あれ？ 私には？」なんて後ろから聞こえてきたがスルーし盛り上がり続ける連中に歩いてゆく。

——こんなふうに盛り上がってるあいつらを見ると昔を思い出す。

花音も笑っていて……まあ、あの時からは考えられない関係になってる訳だがそれも今は嬉しくて。

自然と笑みが浮かぶ。

「(楽しいなこういうの)」

今日一日はもつと楽しくなる、そんな確信を持ちながら俺は総士達に声を掛けたのだった。